

Title	眞島利行日記抄(昭和五年～昭和十九年)
Author(s)	芝, 哲夫
Citation	大阪大学史紀要. 1987, 4, p. 72-122
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10001
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

眞島利行日記抄

——昭和五年～昭和十九年——

芝 哲 夫

これは大阪大学第三代総長眞島利行の日記の一部であり、大阪大学に關係する部分を今採録することとした。日記のうち本学に關係する記載の量はこの抄録の約四倍に達するが、紙面の制限上、編集者の判断で特に重要な部分のみ選択摘抄し他は割愛した。ここに掲載の御許可をいただいた眞島行雄氏に深甚の謝意を表す。なお掲載にあたっては、左記のことについて留意した。

- 一、人名などの固有名詞以外は常用漢字に改めた。
- 二、かなづかいは原文通りとした。
- 三、() が原文にある場合はそのままつけた。編集者注は「」で表わした。二行割書きのもの、あるいは右よせの小さい字で書かれたものは「」をつけて表わした。
- 四、判読不能の箇所は□で示した。
- 五、文中の*印〔または、**、***印〕のある語または文章については、その日付の最後の*〔**、***〕印のついた編集者の注を参照のこと。

昭和五年

十月三十一日(金)* 井上氏とともに医大病院に楠本氏をたづねる。小竹の履歴を出す。理学部設置に楠本中々熱心なり。

〔*眞島はこの年まだ東北大学理学部教授であったがこの日、仙台より大阪へ出張した。〕

昭和六年

一月一日(木) 大阪のことなど心にかゝりて例年ほど正月らしき気分もせず。
一月十三日(火) 文部省に至り、赤間局長に逢ふて川合氏のことを話す。大阪リガクラブのこともきく。

四月二十五日(土) 一時二十五分頃上野学士院へ着。学研会議総会へ出る。其

始まる前、長岡先生余をよび大坂へ来らぬかといはる。余り突然にて驚く。よく考へて返事すといふ。何時迄にと問ひしに先生は三十日立ちて大阪をへて渡欧の由なれば、楠本氏にといはる。大分難問題と思ふもよく考へ見ることにす。五時頃すみたれば理研に向ひ一同にあひたり。

小竹氏に大阪行のことにつきて割合に安心しても可ならんといひ、長岡氏が余の方に用をいはれたりといふ。用のことは説明せざるにおく。

五月十四日(木) 九時、楠本氏へ電をかける。着京せる故に直に東京ステーションホテルに氏を訪ふ。大阪理学部のことを聞く。

二時タキシにて学士院へゆく。受賞式二時半より始り、三時に終る。楠本氏と共に公園を歩みて省電にて東京ステーションホテルに入り、四時頃より七時頃迄大坂理学部のことにつきて話す。建築費、設備、經常費などをも聞く。講座数をもきき、議会通过の難渋なりしことなどを聞く。結局、余に来ることをすゝめる。

十月五日(月) 午后八木「秀」教授をとひ、本多総長よりききし同氏大阪をとわる由につきてたづねる。長く話さる。同君は行く気なきにしもあらずなれども、こちらの研究所のことゝ向ふの実情にあきたらぬのとなにてやめる也。余も自身のことを述べて相談す。八木氏は行くことをすゝめる。されど余は決心つかず。

十月八日(木) 余は登校す。大阪塩見理研の岡谷、浅田両氏来仙、箕作氏案内して来らる。同氏等の立案にかゝる大阪帝大理学部建築につきて余の意見をのべる(部長室、図書室狭きことなど)。

十月九日(金) 午后、岡谷氏来らる。北大理学部の建築図を楠本氏宛托送す。尚同氏は塩見理研の由来、佐多、楠本の対立、大阪帝大理学部の成立事情等を話さる。

十月二十八日(水) 東京ステーションホテル、文部省などへ電話をかけ楠本氏をたづねつゝありしに、午后三時過來らる。五時半頃迄、余の大阪行を躊躇する理由を述べ、種々懇談す。大分内情をも話されたり。余り心配せず来てはとのこと也。とも角よく条件でも考へておきて長岡氏帰朝後に全先生と相談することにす。

〔*東京丸の内ホテルへ。〕

十一月十四日(土) 三時理研着、四時半長岡先生室にゆき、先生と共に自宅へゆく。余は大阪にゆく適才とは思はぬといへるが、先生は大阪人の希望なりなどいはる。夕食の御馳走になる。先生は中々総長をやめそうにもなし。余は大体ゆくことにして尚十六日迄確答を保留す。

(※長岡半太郎は十一月十二日(木)に帰朝していた。)

十一月十五日(日) 朝九時、桜井先生訪問、余の進退につきて相談す。先生は仙台の后さへ差支えなければ大にやるべしといはる。

谷中に埜和先生の墓にぬかづき黙禱す。

豊と池田先生の御宅までもにゆき別れる。久振にて池田先生にお眼にかゝる。七時より九時頃まで話す。

(※桜井鏗二先生。)

※池田菊苗先生。桜井、埜和、池田はいずれも眞島の東大時代の旧師。大阪行の相談と報告をなしたものと思われる。)

十一月十六日(月) 朝八時半、長岡先生の御宅にゆき、大阪にいくべしといふ。而て余より化学の創立委員として片山、田丸、朝比奈、高岡、原龍三郎を挙げる。先生は多すぎるとて、物理、数学の方もへらし結局、大河内、眞島、柴田「雄」、高木「貞」、八木「秀」、寺沢、楠本、堤とせらる。之れに賛成す。一年のばすことには先生は不賛成也。長岡先生はわかりはよいが、事務家でなく理想家故すいぶん余の立場は難局ならんと思はれるが、最後の国家への御奉口(ママ公カ)と考へて誠意を以て尽せるだけつくさんと決意す。

十一月二十五日(水) 長岡先生にあひ、先生の室にて相談す。阪大事務官、明日共に来り、共に文部省にゆき、創立委員会のことにつきて相談する由故。同行することにして帰仙を一日のばす。大河内所長にも逢ひて余の意志を談す。

(※理研にて。)

十一月二十六日(木) 十時頃長岡先生より電話あり。宅に来れとのこと也。由てタキシにてゆく。西尾事務官に紹介される。少し相談し、文部省にゆき、河原會計課長、赤間専門局長などにあふ。皆また余が働くことにつきて驚き居たり。予算の変更、七年度二〇万、八年度十五万、九年度五万とすることにつきて了解をうけたり。赤間氏には創立委員会開催のことにつきて了解をうけたり。委員の顔触れにつきても同様なり。学士会にて長岡先生より御馳

走になる。事務官も共に居たり。

十一月二十七日(金) 八木氏へ長岡氏の懇囑伝達、同氏意大に動く。

十二月二日(水) 大阪帝大総長より余に理学部創立委員たらんことをもとめる公文書来る。

十二月三日(木) 大阪帝大へ創立委員承諾の旨返事

十二月十一日(金) 学士会館に至る。午后三時頃より長岡氏、楠本氏、西尾氏などあり。委員追々来る。四時半頃第一回委員会開會。大河内、大熊氏も来り。予定のプログラムを了りて食事して、食後も尚話し散會す。九時頃也。

十二月十二日(土) 二時半上野に向ひ、学士院へゆく。鈴木「梅」、小川「琢」、

長岡「半」氏等と要談し早く辞去しホテルへかへり柴田氏を迎へて共に食事し、阪大の理学部の建築図につきて種々考慮し、又人選につきて打合はせる。

(※柴田雄次氏。)

十二月十三日(日) 九時、柴田氏を迎へて阪大理学部建築図につきて部屋割をきめドラフトの位置を定める。昼共に食事し、午后又少しつゞけ二時頃より共にタキシにて新宿に至り分れ(る)。

十二月十四日(月) 理研に向ふ。三時着。長岡先生に建物の変更、ドラフトのことなど話し、人事も少し話し(菊池、仁田、八木、千谷)、大学に向ひ、柴田、片山両氏に逢ひ人事につきて話す。夜、大熊氏に電話にて建築図を明日おくれんことをたのむ。倍のスケールになる。

十二月十五日(火) 大熊氏より建築図来り居たり。由て之に書き入れて大阪へおくり、又柴田氏へそのまゝのをおくることにす。

昭和七年

一月十日(日) 五時半柴田氏来る。食事すみたりとのこと也。由て独り食事し、后相談す。人事に関する事及び建築のことにして后の方主也。給、排水、瓦斯を定む。柴田氏大いに骨折らる。工業大永海氏のところのドラフト大に参考となる。十時すまし柴田氏かへらる。

(※眞島はこの日の朝仙台より上京、宿舎丸ノ内ホテルで東大理学部柴田雄次氏(阪大設立準備委員)と会談した。)

一月十一日(月) 九時楠本氏来る。化学の職員予定、余の一身のこと、化学の実験室のことなどを話し、ともに長岡先生宅に至る。西尾氏在り、建物の

ことを話しなどし昼飯の御馳走になる。先生は電波委員会へ出らる。余は理研へゆく。長岡先生の承認をえたるを以て、小竹、仁田両氏に化学の建築図を示し、明日中に之につきて考へ、ことに電気の設備につきて考慮せられんことを乞へり。尾形、黒田両氏と話し、それより学士会館へゆく。長岡、楠本、高木、寺沢、八木、柴田、余、萩技師、西尾事務官等集合、十号室。食事し建築のことにつきて種々萩技師と談合し、又人事のことにつきて大体総長の承認をうける。

一月十二日(火) 寺沢寛一氏来る。仁田氏の代りに阪大より留学生一名をかえずを望めり。寺沢氏とともにタキシにて出る。寺沢氏は大学へゆき、余は理研へゆく。所長に仁田、小竹両氏を阪大へとることの承認をえたり。但し其代に一兩年中に代りを阪大より留学せしむなど希望せらる。西川氏に仁田氏を乞ひ承認を受け、長岡先生に以上の経過を報告し、余の室にゆき、小竹、仁田氏に今夕の来会を乞ひ、文部省に午後一時過ゆき、赤間局長に在外研究員をたのみ、こちら三人といひしを、二人位は何とかせんといえる。

タキシにて帰宿す。柴田、仁田、小竹氏あり。建築図につきて相談す。其前に共に食事す。十時頃終る。其前、阪大嘱託丸島氏来る。赤堀の履歴を渡し、在外研究員の上申を乞ふ。

〔*宿舎は丸ノ内ホテル。〕

一月二十八日(木) 阪大より赤堀の留学上申に関して聞き合はせの事項あり。

一月三十日(土) 赤堀氏のこと長岡総長より上申の旨返事きたる。

二月一日(月) 赤堀氏阪大より当大学へ交渉来れり。愈本筋に進みきたれり。

〔*東北帝大。〕

二月十三日(土) 二時理研に向ひ、三時半頃より長岡先生を其室にたづね理学部の人事につきて協議す。数学の方につきて最心配せらる。廿五、六日頃大坂へゆき、廿三日には出立すべしといはる。

〔*眞島は二月十一日に仙台より上京していた。〕

二月十七日(水) 本多総長に大阪に金研支所を設くるにつきて大阪工業大に反対あることにつきて長岡総長の伝言をする。

〔*眞島はこの時仙台にあり、本多総長とは本多光太郎東北帝大総長。〕

二月十八日(木) 本多総長に金研支所のことをまた話す。東北大学といふことを冠せざるも可なりと本多氏は云ひたり。昨日はそれも云はざりしなり。

二月二十二日(月) 藤原氏と阪大の数学のことにつきて相談す。

二月二十三日(火) 午後、八木氏と話す。八木氏は大阪の方に乗気なり。喜ぶべし。

二月二十四日(水) 八時十五分頃。上野着。駅に仁田、小竹両氏出迎へらる。ともに東京駅に至り喫茶し、化学の設備につきて調べらし〔ママ〕ものを柴田氏の更に補はれしを受取る。

〔*この日眞島は午後一時仙台発。八時十五分は午後。〕

二月二十五日(木) 医学部紀〔ママ〕念館に長岡総長をとふ。医学部にゆかれたりと、由てそれに向ふ。楠本氏も居られたり。古武、村田両氏をよび一同にて医学部の教室を見、理学部の開校同時に数物化三講義室二実習室〔物化〕を借りること可能なるを見、之をたのみ。快諾さる。次に共に昼食して後、塩見理研に至る。岡谷、浅田両氏に逢ひ、其案内にて全部を視察す。物理と物理化学との研究室は余地充分にあるようなり。併し有機の方は余地少なく二人分はなきようなり。故に再び医学部にかへり三つの室を見る。其内一ヶは適當の様な故それを世話されたといふておく。出来るらし。それより総長と人事のことを長く話し夜朝日ビルの三宅にて牛肉を食す。

〔*眞島は前夜東京発、この日朝大阪着、堂ビルホテルに入っていた。〕

二月二十六日(金) ホテルを引きはらひ紀〔ママ〕念館にゆく。大学のオート迎にきたれり。総長と話し本部にゆき、佐多氏邸を訪ね塩研の図書と研究室とを理学部開校の始に利用したく図書は新築の後は移したしといひ、又本年十月以降の利用をも依頼し快諾をうける。辞去し館にかへりて食事し、総長とともに理学部敷地を見る。それより自動車にて工業大学に至り、堤学長にあひ、火事の見舞をのべる。丸沢氏、鉛氏、船久保氏にもあふ。工大のオートにて市工研に至る。高岡氏、渡辺氏、小林氏其他の人々にあふ。それより東区備後町の日本綿業クラブに於ける長岡総長の被露宴〔ママ〕のようなものに出る。木間瀬、坂田、其他の人々にあふ。

二月二十七日(土) 朝、岩尾次郎氏来る。講師にしてほしといふ。佐多氏の令息来る。本部にゆく。岡谷氏来る。会をしたしといふ。総長やめるといへり。西尾氏と余の住居のこと。四月末か五月初めに大体きまりたる人々大阪に集り、学課課程、学則案を議すること、六月に創立委員会をひらき、建築のこと、学課、学則等を議し、十月直に官制を出してもらふといふ段取にするこ

などを定む。又、杉山蕃氏を当分雇として使用することの承諾をえたり。総長と三月十日頃に八木氏を東京によび人事につきて相談すること定む。午後古武氏をたづね、鈴木研究員のことにつきて、又塩研のことにつきて相談す。又岡氏の研究室を見る。三時より総長の「文化史上より見たる独仏」といふ講演の第二回をきく。

二月二十八日(日)楠本氏に電話をかけて今日会見したしといふ。向ふより来らる。長岡総長と種々話す。小倉のこと楠本は入れても重任は不適といふ。佐多愛彦氏来る。小倉のことをたのむ。委員と相談してといふ。自分の子息のことをもたのむといへり。図書事件、一昨日は快諾せるが、今日は小倉の同意を得てといへり。総長と西尾氏とは今日后(ママ午後のこと)一時出立す。八時五十分発上京す。駅に岡谷氏ありて送らる。

三月十日(木)朝七時頃長岡先生に電話し、今夜ゆくことにす。

帰宿し塩見一覽を一読す。五時頃電話長岡さんよりかゝる。由てすぐ御宅へゆき夕食を御馳走になる。八木氏と一緒なり。数学は南雲、寺阪、清水、及代数の人一人高木氏きめられ、これにて人はそろひたりといはる。由て小倉氏は初め教授にしてみなくてもよしといはる。物理の人事につきて別話なし。堀氏はとりたきがすぐは取れぬといはる。一、二年後に何とか工夫してとる、八木氏や余は研究費を取りて仕事を始めることを希望される。九時頃八木氏と共に辞(す)。

(「*前日夜行で仙台を出発、この日到着京。」)

三月十一日(金)朝九時迄、楠本氏と西尾氏と来訪あり。楠本氏は金不足なれば理学部の建坪を少し減じ(4m左翼を)本部は医学部の方につくるとの説を出さる。紅茶をのみて兩人文部省に向はる。余之案につきて計算するに一万二千円の節減に過ぎず、反対也。岡谷氏に従ひ更に中央部より幅2m減じても同様一万二千円の減合計二万四千円にすぎず。昼前岡谷氏より電話あり、直に來られたしといふ。兩氏來らるゝところへ、小竹、仁田兩氏も来る。由て紹介し共に食事し一緒に大蔵省にゆく。此日朝葉田氏へも電話し来会を乞ひおきたれば皆きたらる。会議室といふ別の建物に至る。大熊氏其他官財局の人々あり。長岡さん理学部の建築の特殊性を説き、注意を与へられて後、各自の掛りの人々と懇談したり。八木、岡谷、浅田氏は電気の掛りと也。余は水、瓦斯の掛りと也。小竹氏は夏水道水温き故井戸水を欲しといへるが氷

をつかふことにす。又実験室の換気につきて希望あり。四時頃懇談を終了。三月二十三日(水)朝上野駅着。

ホテルに着し、長岡さんと柴田君とに電話をかけおき、十時頃大蔵省萩技師に電話をかける。七月頃には入札出来ぬといへり。大学にゆき柴田氏にあひ、榎田氏の履歴を受取り、阪大理の学則、学課案につきて高木、寺沢兩君にも伝達をたのむ。四月十一日、東京にて(丸ノ内ホテル夜)会合のことす。理研にゆき長岡先生にあひ、本件の承認をうけ其他種々の協議をなし、要点を案として先生に提出す。

(「*前夜仙台を出発。」)

三月二十九日(火)柴沼氏及び本田氏と阪大理研附設のことにつきて相談す。

(「*東北大理学部にて。」)

三月三十日(水)柴沼氏に阪大理研のことを相談す。

四月六日(水)西尾氏より大阪理学部への塩見よりの寄付金全部納まりたりといふきたる。

(「*阪大西尾事務官より仙台の眞島への連絡。」)

四月十一日(月)朝、長岡、柴田、高沼、鈴木忠へ電話をかける。十時理研へゆき長岡先生にあふ。講座なし教授の案名案といはる。

帰宿す。五時半寺沢、高木、柴田諸博士来る。二階二十四号室を借りて協議し、阪大理学部学課目及規程草案を訂正し、創立委員の案をつくる。初め食事を共にせり。十時半散会す。

四月十二日(火)二時前文部省に向ひ、服部氏、赤間氏にあふ。渡辺事務官も居たり。余の塩見理研、阪大理研の案につきて話し定員外教授を置くことにつきて話す。中々六ヶしそうなり。攻究を依頼す。学士院に行き尾形氏論文を紹介す。長岡さんに昨夜の案の清書と物理の学課の寺沢氏案を渡す。

四月十三日(水)朝九時半頃楠本氏ホテルへ來らる。二階の二十四号室にて阪大理学部に関する要件を種々話す。共に昼食し文部省にゆく。楠本氏は東京帝大へゆけり。文部省にて渡辺阪大事務官をたづね、赤間局長不在の間局長宅にて楠本氏を待つ。其前に長岡氏へ電話をかけしに來らる。服部氏など種々話す。主に塩見管理のことにつきてなり。次に次官室にゆき粟屋、安藤兩氏に逢ふて同伴につきて話す。其内に赤間氏と川原會計課長と來らる。結局兩氏の考へにて塩見を寄附講座となすことが最上なりといふことになる。

四月二十六日(火)午後八木氏と塩見のこと寄附講座とすることなどにつきて相談す。八木氏はなるべく独立したる態度にて研究をやり、他の人の基礎的研究をなすカムフラージュとなりてもよいような考へなり。之を岡谷氏につけてくれといへり。

〔*東北大学理学部にて。〕

五月一日(日)朝八時五十六分着、事務の人出迎へてくれる。阪大の自動車にて記念館に入る。直に創立記念式に出る。それより公開せられたる医学部を見る。種々の陳列有益也。布施信良氏に大に世話になる。それより園遊会ありてそれに出る。午後余興あり。落語、万才、奇術などを見る。剣をのみて種々のことをやる男ありたり。二時頃帰宿して調べものなどをやり、四時半頃総長室へゆく。総長あり暫く話し大阪ビルの学生団、教団懇親会へ出る。

余も挨拶させられる。「余は理学部創立に総長の命を受けて従事せるものなり。今日百名の新入者があつた。余はまだ真の入学者でない。今総長に長き試験をうけて居る。幸にパスして入学しうれば幸である。当大学は教師学生和氣アイアイの美風あり特色也。その愉快なるグルッペに入ることを祈望す。併し理学部の開かれるのは来年である。来年のことを話すと笑はれるから之で失礼する。」

〔*大阪着。〕

五月二日(月)朝、小倉氏より電話あり。由て午後一時こちらより伺ふと言ふ。総長と渡辺、西尾両事務官と種々打ち合はす。十一時過楠本氏来る。佐多氏へ電話をかけ、明朝十時行くことに打ち合はせる。総長、楠本氏と余と共に食事す。楠本氏と自動車にて出で余だけ塩見研へゆく。小倉氏と逢ひたるに結局岡谷氏が理学部に関係しうれば書籍も理学部へうつすという意らし。種々雑談す。次に岡谷、浅田両氏と逢ひ建築に関して電話、電気時計、失火信号などの位置を定める相談に應ず。出勤信号をやめることにす。

五月三日(火)朝十時総長と渡辺、西尾両事務官と佐多氏を訪ふ。佐多氏は塩見財団法人を存続し其建物も保存しておくことを希望し、それさへ出来れば利子を寄附して定款改正して寄附講座をつくるなり、また主腦者が皆理学部に收容せらるれば書籍を其方へやるなり、随意にこのこと也。帰宿して少し話し、記念館にて総長と食事し、それより大学のオートにて岡谷氏を訪ひ少し話し(「キカイ、タテモノトシヨノコト、リガクラブ用紙ノ事」)楠本氏をた

づね、佐多氏と会見の様子を西尾氏と共に話す。

歩みて中ノ島公会堂にゆき、阪大第二回記念講演会にゆく。一寸総長講演後のやすめるところにゆき、それより片瀬淡博士の食餌と疾病の話をきく。

五月四日(水)朝八時半東京着。

文部省にゆく。赤間局長に一寸塩見のことを話す。利子にて寄附講座も出来るならんといはる。河原氏にあふ。属官来りそれは駄目といへり。河原氏半分だけ寄附し一講座つくりたらばといへり。大学にゆき柴田氏にあひ、樋田氏の留学国、専攻科目をたのみ、渡瀬氏の件了解たのみ。先輩にて助教授にても異存なければ可といへり。高木氏にあひ兼任の件たのみ、寺阪氏留学国、専攻科目をたのみ。

二時半出発、九時四十分仙台帰着。

五月五日(木)昼食後、八木氏と大阪の様子を話し、同氏の意見を聞く。同氏は小倉氏は現給と同額の講師とし、所長となすところに帰着すべしといふ説也。

五月十日(火)三時半頃八木氏とともに理研へゆくタキンにて。西川氏も便乗せり。長岡先生にあひ、八木氏は騒音防止の研究プランを出せり。谷口資金をえんとてなり。余は塩見の件を相談す。寄附講座のことは総長も昨日文部省へゆかれしが、中々駄目らし。余は小倉氏に同氏の待遇方につきて早くうちあけることをすゝめしが決せず、十九日頃下阪のとき楠本氏と更に相談して見るとのことなり。事務官をよばざることにす。

〔*真鳥はこの日朝、仙台より上京。〕

五月十二日(木)朝八時四十分頃文部省にゆく。共に次官にあひ、財団の金を委託して講座をつくることにつきて話す。次に総長だけ大臣にあふ。共に調査するといへり。

余は一旦帰宿す。十時半頃大阪より電話あり。楠本氏廿五万円寄附はだめだろうといへり。由て今朝文部省へゆきしこと、十九日長岡氏出版のこと及び廿九日顔合はせのことなどを話し、尚総長と相談し、小倉へ話すようにといひおく。長岡さんは小倉に学士院の和算の調べものをやらせる案を考へつかれたり。余は大蔵省へゆき、萩氏居らぬによりて大熊氏にあひ、卅日建築会議を開くことに定めたり。

大学へゆき柴田氏にあひ、樋田氏にもあふ。留学先英国、無機化学と定む。

学士院へゆきたり。こゝにて長岡さん藤沼氏小倉氏のことを承知せりとて大に喜ばれたり。三十日建築会議のことなど話し、星野氏の論文を紹介せり。五月十三日(金) 理研へゆき長岡さんにあひて、清水、友近、正田の履歴を渡し、廿九、卅兩日のプランを渡し、渡瀬のリレキをも渡し承認をうけた。五月十八日(水) 会食后余化学*の教授達に十月より大阪本務、仙台兼務となることにつきて了解をもとめて承認を受く。

(*東北大学理学部化学科。)

五月二十九日(日) 朝八時長岡氏別邸にゆくとて八時東京駅に集る。横浜にてのりかへ浦賀まで電車、それよりタキシにて下浦にゆく。三千坪といふが邸内余りかまはず茅葺きの古き家也。裏はすぐ海なり。茶をのみてすぐ学則、学課目を議す。物理の方議論多く一時頃となる。簡単な食事となしまた暫く相談し紹介をなし邸内を見せてもらふ。アヒル、ニワトリなど居り、柑橘類多くピワも多し。五時過タキシにて鎌倉に向ふ。二台より来らず。途中にて一台徴発す。七時前海浜ホテルにつく。夕食す。八時過電車、九時半東京駅へつく。此日は皆総長の招待也。

五月三十日(月) 朝、渡辺事務官をよび、旅費のことを話し、共に文部省にゆき服部課長にあひ、吉田氏にもあふ。前者にて寄附講座のことを話す。駄目らし。吉田氏には在外研究員のことをたのみおく。帰宅し小竹きたる。共に昼食し、大蔵省中央会ギ室に至り建築の会議をなす。四時間以上かかる。電気関係のこと、旅費のこと、岡谷のことなど話し合ふ。大事は之より先きは楠本氏とうち合せてからやることにきめる。共に夕食す。

六月十四日(火) 十一時文部省へゆき赤間局長にあふ。阪大理の在外研究員已出の二名は七年度のをくりあげたるもの故本年度七年度に更に二名は出せぬ。之を余の誤解なりといへり。併し出来るだけ厚意は持つ故に七月になりて計算立てば九月以後に一名は出せるならん、又他一名はもっと遅れる、年度末になるならんといへり。又創立委員会を入札に附する前に一度開くが至当ならんといへり。理研にゆき昼食し、仁田、小竹両氏と化学の学年割当学課々程をつくり、三時半頃大学に向ひ、柴田氏にあひ樋田氏の件少し猶予を乞へり。

六月十五日(水) 朝九時楠本氏来る。阪大理学部の今年度在学(ママ、在外カ)研究員の件、創立委員会の件(七月一三日東京にひらくこと)、教授候補者

大阪にて会議の件(七月十四、十五日)、高校長会ギの予告の件(六月廿四—七日)など協議す。阪大会計きたる。種々話し別れる。長岡氏邸にゆく。楠本氏来り居たり。今朝協議したることを報告し、大体承認をうける。佐多氏より寄附講座につきて種々聞き合はせきたる由也。それに対する個条がきの答案をかきて総長まで出しおく。

六月十八日(土) 朝五時半起登校、午後八木氏と話し。三時頃より六時過に至る。東京にて相談し予定したることを告げ、物理の学年別学課表をつくることなどをたのむ。

(*仙台の眞島の自宅にて。登校は東北大理学部へ。)

七月十三日(水) 十一時頃文部省にゆく。渡辺事務官にあふて予定任命表をわたくす。大学にゆき柴田氏をたづねる。樋田君の留学発令九月末になることを話し。理研にゆきて昼食し、小竹、仁田、黒田、尾形、村上にあふ。仁田君に化学主任をたのむ。

学士会にゆき、南北大総長をたづねる。共通講座のことを話し。四時半に阪大委員会始まる。大熊氏と余と説明す。六時半頃終る。余りあつく質問議論も出ず。それより一同夕食、八時頃大熊氏のオートにてホテルへとりにかへり九時廿五分発車、大阪へ向ふ。仁田、菊池、小竹、正田、清水、八木、楠本氏など同車なり。

七月十四日(木) 朝八時五十六分着。岡谷、浅田両氏出迎へらる。直に大学にゆく。樋田だけ京都よりきたり少しおくれる。十時より敷地を見、塩見理研にゆき、小倉氏より説明をきく。それより会議室へかへり食事し、一時より会議、規程中に参考科目の試験が出来るようにする。学年割表の方をも話し、其他は余より説明し希望をのべるだけにす。午后三時頃より医学部内の借用教室等を巡覧す。午后四時より病院にゆき、医学部教授諸氏と初対面す。楠本氏挨拶す。大学の設立由来、其他諸種注意即大阪の特殊事情などはなせり。余挨拶、余の来ることになりし経過及理学部の抱負、医学部との相互関係など也。終了。楠本氏と余とより互に教授諸君を紹介し合ふ。終りて朝日ビルにゆき、十階にて日本食の饗をうける。余等数人湯に入る。冷き空気にて冷房せられ気持よき料理屋也「ミヤケ」。塩見理研の人々も来れり。最後に余感謝して引き上ぐ。タキシにて甲子園ホテルにおくられ24番バスなき一人室に入る。甚だあつし、よくねられず。

七月十五日(金) 一時四十五分より阪急にて楠本、八木、余三人石橋に向ふ。

分院にて休息、三時半頃一同宝塚、箕面をまはりて来る。一寸会議をなし、専攻生的一条を規程に入れることにする。数一、化二、物三万円以内の器物を自由になし、渡辺氏に通知することなどを話す。六時前、大阪クラブにて晚餐を一同にて食す。総長、楠本氏出席。

九月七日(水) 朝七時ホテルへつく。八〇七号室。渡辺、茂呂両氏来る。西尾、楠本、石原氏もきたる。附帯工事費予算外超過のために建築費の入札によりて浮きたる金は消えるとのこと大蔵省にて分明、甚だ失望す。楠本氏、柴田書記長にあひにゆけり。かへりおそき故に一同昼食す。其とき楠本氏婦へりきたり共に食事す。文部省にゆく(西尾、茂呂は会計検査院にゆく) 赤間専門と川原会計とにあひ、楠本氏より文部省へ寄附せる一八四万円の利子につきて問ふ。大蔵省にてそれは十一年度以後の経常費に入れある様なるが文部省にてはそれを知らぬことにして十一年度より経常費全額請求すといへり。

楠本、渡辺とともに長岡氏へゆく。先生失望す。岡谷へ余り相談すとて渡辺を叱斥せり。余は理研に約束ある故中座して出で理研にて仁田、清水、小竹氏にあふ。共にホテルにかへり夕食し、理学部買物のことにつきて議す。渡瀬氏のことを仁田氏がたのむ。岡谷氏は清水氏の買物につきて己れみるとか、又丸善に注意したとかにて清水氏不快、又岡谷氏は菊池氏が八木氏だけに計りしとて不快なりとさうて菊池氏不快のよしなどさく。それにて長岡氏叱斥の理由明となれるが如し。

(*) 眞島は前夜仙台を発つて上京。

(*) ママ赤間専門局長、川原会計課長のことか。

十月十一日(火) 文部省へゆき赤間局長に話す。阪大就任の挨拶をする。長岡総長も居られたり。阪大工学部改築のことにて申出ありたる様なり。会計へゆきたるに茂呂氏居られたり。理学部経常費の文部省に於ける内訳をきく。

(*) ホテルへ帰へり、設備経常費等につきて八木氏と話す。共に昼食す。

四時過渡辺事務官、茂呂書記官来る。種々話して案をねる。両氏辞去したる後、更に考へて案をつくり上げ食事して長岡氏邸へゆく。八木氏も来れり。余の設備費分配案及経常費分配案につきて説明す。総長も其まゝ承認せらる。之にて大に安心す。但し化学は譲歩しある形にして苦しき立場なり。八木氏は之を了解せられ居るならんと思ふ。

(*) 丸ノ内ホテル。

十月十二日(水) 楠本氏着、茂呂氏も来る。設備分配につきて了解をえたり。種々相談す。経常費は部長手許にとゞめる分を多くすることにす。

三時頃共に学士会館に至る。四時理学部関係の人々集合す、十六人ほど也。規程に関する上申、文部省にて字句の修正あることを告げ、之に任せることにし、卒業試験の合格不合格につきては更に委敷(委しき)記録を学内に留めることにしたしと述べ、次に設備費分配につきて相談し、初に各科の要求概算を聴取し次に余の案の印刷しあるものを出し算出の方法を説明し総長の承認もある故になるべくこのまゝ承認を乞ふ。結局数学に一万円を増し、物理より七、〇〇〇円、化学より三、〇〇〇円を減じること附随。一同食事し序に樋田氏を正賓として留学を送ることにし余一寸挨拶し樋田氏答へらる。食後飲談したところ九時近くに長岡総長学士院より来らる。又暫く話して散会。

〔欄外〕 助手を定員一杯にて融通出来ぬとのこと。渡瀬の件、助教授を借りること一時ならば可なり、但し文部省の了解をえて。

十月十三日(木) 朝、岡谷氏来らる。挨拶のため也。文部省にゆき赤間局長にあひ、定員以内の入学、助教授定員借りのこと、他大学より退学して入試を受けることにつきて意見をきく。一可、二可、三は不可能ならんとのこと也。理研より留学生を一名申出されたく、大阪よりかへさんといふ。

(*) 文部省の後理研に行き、大河内所長との対談。

十月十八日(火) ホテルは割合に静にしてようねむられた。朝食後、八時半頃出で大学へゆく。通勤気分を味はふ。西宮北口までゆき、のりかへて梅田に着。築港行きバスに乗る。午前一寸総長に挨拶す。八木氏きたる。小竹、清水氏も来るによりて種々協議す。入学に関する件、設備に関する件等なり。昼食を共にしたる協議す。今日挨拶廻りを明日にのぼす。五時頃終了。総長に挨拶す。八木氏は今夜帰へられる由也。

(*) 宝塚ホテル。

十月十九日(水) 朝八時半宿を出で九時廿分頃大学へ着、事務を打ち合はすところへ小倉氏来る。塩見の図書を理学部へ借りること新しき雑誌を理学部にて取ることなどを話す。自分は異議はないが理事に相談せんといへり。尚塩見の人も全部理学部の人になること、唯所長と必要の人を塩見へのこし塩見

の利子は理学部の補助となさんと提議した。午后四時―五時に来ることを約す。清水、小竹両氏と昼食を共にし、一時廿分に楠本氏をたづねて挨拶し、諸官庁其他に新任の挨拶に出掛ける。四時十分頃帰着、岡谷氏論文の推薦状などを持参す。ついで小倉氏来る。理事は書籍の大部分と機械の大部分との理学部へ持ち出しを欲せず、塩見の存在の厳然たることを要求せり。話の著しき変化に吊(ママ果カ)然たるばかり也。小倉氏も余りの変化に驚くといへり。

十月二十日(木) 九時半大学着、十時―十一時挨拶まはり、かへりて基礎医学の教授方へ挨拶まはり。十二時食事、十二時半―五時挨拶まはり。いつも寺阪書記案内に乗せり。それより魚岩に至り浅田氏より塩見の内情をきく。

十月二十六日(水) 朝ホテルに入る。九時渡辺氏きたる。次に楠本、西尾氏きたる。渡辺氏去る。別室にて岡谷氏のこと、書籍をかきぬことなどにつきて話す。午后四時前、長岡氏邸にゆく。楠本氏居り、総長は書籍は必ず理学部へとれるを以て心配せず已定の方針にて進むべしといはる。又佐多氏と余の会見を兩三ヶ月延期すべしといはる。又佐多の話はかはるべしといはる。三人同車して帝國ホテルに行く。文部大臣以下文部省の役人四十人ほど来れり。総長アイサツ。文相答ふ。総長工学部のことを長くたのみ、文相ブリーフィングの説をひき軽々しくひきうけられぬといへり。七時半終。

(*眞島は前夜仙台を出発、上京。この日朝着京。)

十一月十四日(月) 朝食事し清水氏とシルクハットを持ちてタキシにて駅にゆき阪急にて梅田に出で、またタキシにて登校、総長に挨拶し八木氏、小竹氏等と話す。小倉氏来るによりて塩見の人を今よりすぐ講師にすること、同時にこちらの理学部の人を客員研究員にするなど大体申請中の委託条件にて事を運ぶことを議す。理事に話して返事すとて去れり。

(*眞島は前日京都より大阪に入り、夙川のペインクレストホテルを宿舎としていた。)

十一月十五日(火) 八木氏と物理科のことにつきて種々相談す。人事、室などなり。

十一月十六日(水) 十一時、楠本氏をたづね(理学部室、塩見のこと、来月上旬出版のこと)、帰学小倉にあひ(佐多理事研究員を講師とし、八木氏を客員研究員とするに同意)、昼食し手紙をかき、医学部にゆき古武氏にあひ(理

学部室、日化研抄録) 三時五十八分文相を駅に送る。

十二月七日(水) 朝九時頃出で十時前着校、総長にあふ。本山夫社長にあひしこと、塩見の息子にあひしことなど話さる。塩見の本のためなり。

小倉氏来る。小倉は数学の本は出せぬといふ意志を示せり。又物理科の学生の実習をやつてはこまるといふ意を示せり。佐多氏をたづねて挨拶をなし、認可なきも管理委託の条件に従ひてやる他なかるべく、従て昭和八年度以後の人事予定を話し、詳細は後に再び書面にて申すとのべてかへり。子息を助教授にするといふたれば満足のように見受けたり。帰へりて昼食し、八木、小竹、岡谷、浅田諸氏と相談せり。また渡辺氏とも相談せり。次で病院に楠本氏をたづねて理学部の初年度の教室のことにつきて相談したり。また菊池氏の家につきても問合はせをたのめり。

(*眞島は十二月四日仙台を發ち、東京を経て六日着阪、夙川アパートに入った。)

十二月八日(木) 朝九時半頃登校。理学部の規程等印刷出来る。

正午、病院へゆき会議室にて医学部教授諸氏と会食し、理学部の建築おくれたることをのべ、教室の借用につきて辭を低くして依頼す。明日関係教授と会議決定のことにする。記念館にかへる。坂田氏、八木氏にあひきたる。息子の助手に採用のことなり。八木氏余に菊池氏の書翰を示せり。

十二月九日(金) 朝九時梅田につく。大学の自動車迎へられる。登校。仁田氏本朝到着す。佐多氏に電話をかけ、当方より伺ふといふに先方より来るべしとて来らる。由て用意したる塩見の人々(研究所長、研究員、助手、雇等)の将来の待遇につきて書類を渡し説明す。大体満足せられたる如し。小倉氏来る。物理学生の実験室を塩見の方にて都合しがたしといへり。十一時半頃医学部会議室へゆき、仁田、小竹両氏と余と村田、古武両教授及衛生と細菌との助教授と化学、物理の講義室と実験室借用につきて相談す。講義室、第二、第四を一年中貸す、薬物学生実験室と同暗室とを一年中物理学生実験室に貸すこと、ベスト菌研究室を化学分析実習室、教授、助教授研究室に貸すこと快諾さる。午后三時頃、小倉氏を塩見にたづねて物理学生実験室の都合つきしを話し、八木氏の居室だけの都合を乞ふ。

十二月十日(土) 朝七時、清水、仁田両氏と朝食し、共に大阪へゆく。鹿島運転手自動車にて迎へられる。共に出校。清水氏と数学の教室を記念館に定め

ることにする。それにて教室の件決定す。

小倉氏来り種々話す。佐多氏理学部に好意を持ちきたれりといふ。八木氏を塩見の研究員にすることになる由也。佐多重康氏をよび、仁田氏、小竹氏などと共に種々相談せしめる。中島氏をよび安心されるように話す。病院に楠本氏をたづね、教室の決定したることにつきて感謝し、塩見其後の経過を話す。西尾氏にも話して感謝しておく。渡辺、茂呂両氏に人事と教室のことを話し、委任す。化学の人々に種々のこと〔教室の仕度〔ママ〕、実験台ドラフトなどの設計〕をたのむ。

〔*ママ佐多重康氏の誤り。〕

十二月十二日（月）大蔵省の萩氏を訪ひて附帯工事入札を催促す。建築の進行予定を示さる。来年六月末にコンクリート打ち終り、十一月末に全部終る予定也。附帯工事入札は来年一月には終る由、甚だ呑気なり、閉口す。

〔*真島はこの日朝、大阪より上京した。〕

十二月十三日（火）朝八時宿を出で長岡先生の邸に至り、阪大理学部の教室の都合つきたること、塩見の人事、及来年理学部の人事、大体決定せる次第を報告し、佐多氏の書翰「十二月十日のもの」を示す。

昭和八年

一月十二日（木）長岡総長より佐多氏の中橋氏への返事といふものを受取りて見る。要するに図書を渡さぬといふことを書きあり。学士院にて之を先生にかへす。

〔*真島はこの日仙台より上京。〕

一月十四日（土）朝、清水氏と共に九時大阪着、大学のオートにて出校。佐多氏へ行き、千谷氏の件を話し塩見の書籍雑誌を理学部のもが自由に見うるようにたのむ。また塩見の予算のことをきく。

一月十六日（月）タキンにて出校、小倉氏来る。人事につきて塩見の予定をきく。図書につきて理学部の教授に閲覧の自由を与ふるよう客員研究員の名義を附し、鍵を呉れるようたのむ。図書は持ち出さぬといふておく。鍵のことにつきて小倉即答をさせたり。

一月十七日（火）十一時梅田着、大学に出る。小倉氏来る。千谷氏の手紙かへす。理学部教授を何とか名義をつけて塩見の人にすること、図書室鍵をくれ

ることは未定、予算は次回に示す由。
一月三十一日（火）登校、大阪より電報あり。余と渡瀬氏との発令を伝へきたる。

二月十五日（水）朝八時廿分出で、九時大阪着。大学に出で十時半頃より第一回教授会ともいふべきものを開く。教授四名、助教授一名、講師三名、教授候補者五名、計十三名なり。入学選抜試験、授業開始期、購入物品整理に関する件、実験用品購入に関する件、購入図書配布に関する件などを議す。時間割り制定を明日にすることにせり。午前一同と理学部の一年間に於ける授業の場所を見る。また昼食后建築の進行を現場につきて見る。予定より一月半おくれある由。人足の出まはりわるきこと、土中に昔の基礎石、煉瓦などあるためなりと。

〔*真島は在阪中夙川のアパートに止宿していた。〕

二月十六日（木）朝九時大阪着、清水氏と共に大学に出で、十時半頃より教授会継続選抜試験時間割を定め、十八日夜協議、十九日朝発表とせり。時間割表を各科主任よりもらふ。後研究報告発表の方法、研究の便宜を計るべきことなどを議し、十二時より南海ビルの高島屋デパートの食堂にて一同昼食す。教授会出席者十三名、中島講師、総長、事務官、寺阪氏、計十七名也。余の招待となす。二時頃大学へかへり、種々事務上の差図をなし、工業大学の丸沢氏来る。余の研究室につきて話す。化学の室は六月にならねば出来ぬよし。又狭そうな話也。次に工業化学の講義を依頼す。考へて後とのことなり。

タキンにて平野町堺卵楼にゆく。大阪朝日の招待による。医大と理大との教授皆よばれる。上野道輔、下村海南、高原氏その他大朝の主幹みな出席せり。九時頃散会、今村荒男氏と清水氏と余と一緒にかへる。

二月二十日（月）朝九時大阪着、清水氏と共に大学自動車で出校す。西尾氏をたづね購入手続緩和につきて議す。次に佐多氏に至り、予算のこと、図書のことなどにつきて小倉氏休めるゆへによりしく手続たのむ。佐多氏快諾。千谷氏のことも話す。大学にかへり昼食し購入手続を寺阪氏に話し主任に通知せしめる。竹中氏挨拶にきたる。阪田幹太氏来る。谷口工業奨励金を草間氏にもらふ願を今朝出せしによる。

二時工業大学にゆきて丸沢氏にあひ船久保氏にもあふ。理学部にての講義を高岡氏と分担してもらふこと、部屋のことを話し、新築中の化学教室を見

る。三時より工業試験所にゆき莊司氏にあふ。何とも人ツキの悪るきことよ。併し開放研究室を借りることは自由といふ。無暗に機械をつかはぬようにといへり。別に歓迎もせず、また拒否もせず、谷口奨励金のことを話したるにエラク吹きかけたなといへり。イヤナ人といふか、長岡式といふか不可解なり。高岡に対する悪き感じがこちらに向ふか。

三月十五日(水)朝九時清水氏と同道して大阪着、大学の自動車にて出校。

十二時一同とともに昼食す。化学の試験のことにつきて仁田、小竹、千谷三氏と相談し、口頭試問につきても大体案を定める。小倉氏来談、塩見の研究員の研究費につきて数年の様子を示さる。本日午前佐多氏より木下氏を以て理学部の人を招きたきがいづがよきかととひきたる。由て相談の上十八日夜六時より願することにし、洋食を希望すと寺阪氏を以て木下氏にひやる。向ふも洋食のつもりなりしとのこと也。旅費のことを聞くのを忘れたり。四時頃より工業大学にゆき、丸沢氏に講義をたのむことにつきて再び協議し、今年だけ九月より以後一週三時間宛とすることにす。余の研究室借用につきても化学教室出来以後一室を貸すことを諾さる。

三月十七日(金)朝仁田、清水両氏と共に出校す。十時より入学試験なり。朝、数学、化学。午后、物理。三時より化学の人だけに口頭試問。口頭試問は仁田、小竹、千谷三氏と余とてやる。硝子と硝子の着色は実物の試験なり。

朝小倉金之助氏来る。塩見の職員の仕事につきて協議し、また来年度の塩見より出す実験費につきても協定したり。諸事大によく決定してよろこべり。昼食は入学試験に関係する人のために大学より出す、一人五十銭。

三月十八日(土)朝仁田清水両氏と八時四十五分大阪駅着出校。二班に分ちたる人物考査に第一班に在りて従事、村田学生課長主査たり。物理はみな人物よし。数学は一人思想のよからぬ経歴のものあり。昼一同食事す。其前に楠本氏を病院にたづね、岡谷氏を医学部内におきて研究室をつくらせることの了解をえたり。入学試験のこと、余の移転のこと、田中敬氏のことなどを話せり。午后また人物考査、午前午後体格試験あり。午後三時より及落を決定するため会合す。数化各十二人、物十九人を取れり。午後七時掲示のことに定む。午後六時より北浜野田屋(旧灘萬跡)にて佐多氏の招待あり。洋食にて甚だ丁寧なり。食后佐多氏アイサツし、余之に答へる。八時半頃散会、清水氏とともに帰宿す。

四月七日(金)渡辺^{*}大阪大事務官来る。共に出で、理学部創立委員に廻礼す。高木、大河内、寺沢、粟屋、柴田雄次、それより新宿安田にて昼食し、堤正義氏を見舞ひ礼をのべる。次に大蔵省にゆき、大熊、萩、大田、藤井浩氏に礼をのべ、文部省に至り、粟屋、赤間、菊沢、菊池、秋田〔学務〕、河原〔会計〕、吉田、仁作諸氏に礼をのべる。

〔*眞島一家は大阪移住のため四月三日仙台を発ち、一時東京に滞在していた。〕

四月十日(月)出校、楠本氏に挨拶にゆく。佐多氏へも行く〔事務官とともに〕。会食后教授会をひらきて、明日の開会の次第につきて相談す。

小倉氏来談。

〔*眞島は四月八日朝着阪、神戸の住吉に居を構えた。〕

四月十一日(火)午前九時新入学生を集め、教授列席の上にて名をよび、訓辭をなし、後教官を紹介し、然るのち各学科主任の教授が各科を案内し、夫々注意を与へらる。島貫、村橋、金塚、金子諸氏来宅。大工試へゆく。本日より授業を開始す。楠本部長来談。八木氏本日来阪し、物理学生に注意を与へらる。夜小竹、久保田両氏来談。

四月十四日(金)恵濟団にて理学部会食し、引きつゞき一時より教授会を開く。今日より佐多、渡瀬両氏は教授会には出でぬことにす。

五月一日(月)朝八時四十五分頃汽車にて梅田へ着、大自にて出校、阪大創立記念式に出る。君ヶ代二唱の後、総長の昌平校(ママ)より帝大創設までの話あり。約一時間半、十一時頃終る。細菌の陳列を一寸見る。天然痘の病源は甚だ微小、顕微鏡で見うる極限に近しと谷口教授より説明される。

五月二日(火)今日は医学部開放につきて理学部の授業を休みとなす。

今夜、中央公会堂にて大毎大朝後援の下に阪大創設記念講演会あり、(工「造船」、理「ヤギ」、医「谷口」、長岡総長「ツナミの話」、併し出でず。

五月三日(水)午後二時より総長室に評議員会あり。終りて学部長だけの会あり。本部予算に関して也。

五月五日(金)正午会食。余十三日に学生の懇親茶和会(ママ)をひらくことを提議す。記要(ママ)(別刷をとりて之を配附する件)の委員をきめる。清水、岡谷、小竹三氏なり。次の教授会までに案をきめておきてもらふようにするなり。五月六日(土)登校。午後一時より化学雑誌会の第一回あり。余挨拶す。ひき

つゞき余がチクロデカンの話をする。次に仁田氏の話あり。

五月十二日(金) 朝九時、大阪駅着、直に出校、執務。昼、会食(一般)。其後、別刷に関する委員会を開く。

五月十三日(土) 午後一時より化学雑誌会第二回あり。村橋、佐多両氏話す。午後三時より理学部学生職員の懇親茶話会を開く。会者八十六名、約半数は職員なり。学生課長、穂積主事など来る。「ケーキ、コー茶、盛切センベイ、アイスクリーム、盛切クダモノ。」学生課より十六円補助あり。二十四円ほど余より支出。村田課長開会の挨拶。余も挨拶をのべて理学部会を開くことを話し、各科にて十八日迄に学生の委員を出されんことを乞ふ。自己紹介の後、教職の人々の話あり。五時半頃終る。

五月十八日(木) 登校。化学科職員学生の遠足会あり。

五月二十二日(月) 大熊にゆく。理学部建築に於て約四万円ほどのこるとのこをきく。講堂建築につきても相談す。大熊は九年度にかゝれるものと思へり。

〔*真島はこの日朝上京した。〕

五月二十六日(金) 午后一時より一般会食。中村幸四郎、湯川兩講師を紹介す。一時半より学生課応接室にて理学部会の規則を協議す。正田、千谷、友近、一宮、井上、若松、由上、穂積、寺阪氏等出席す。規則尚不満の点多し。細則をつくるために、正田、由上、寺阪氏を小委員とす。九日に会合のばす。尚十五日に委員会をやる。

五月三十一日(水) 午後一時より総長室にて学位規程につきて協議あり。学部長会議なり。四時退出。

六月四日(日) 渡辺事務官方にゆき大蔵省の様子をきく。結局講堂は来年にのばすことゝなれり。即ち別の予算をとるなり。由て余は東京にて大熊、萩、八木氏などよく打ち合はすことゝなれり。追加予算は出すことにする。

六月八日(木) 朝九時着阪、大自にて出勤。午後、仁田、小竹、渡瀬、佐多、千谷、村橋氏と共に大自二台にて工学部にゆき新築漸く成らんとせる化学教室を見る。四百坪、三分の一は木造也。丸沢氏案内さる。婦学して清水氏、千谷氏とよく建築のことにつきて相談す。工学部へゆく前に理学部の建築の中へ入りて見る。

六月九日(金) 朝、大自にて出勤。医学部の天野電気係と話す。昼一般会食。

建築のこと、黒板、水流し、圧搾空気のことなど相談す。午後一時半より由上、一ノ宮、正田、寺阪、余と五人の小委員会にて理学部会規則案(穂積氏による)を議す。少し改め大体その案の如くきまる。三時より工学部の望月教授、久保山電気係、浅田氏、渡辺、茂呂両氏を会して理学部の電気を如何に購入するやを議し、結局工学部に大体ならひ市電と宇治電とよりとるといふことに決定す。

六月十五日(木) 午後一時より理学部会第二回委員会の相談あり。之にて会則出来たり。印刷に附することにする。

六月十六日(金) 大学より電話あり。茂呂氏より文部省より電話にて大蔵省にて理学部の設備費の繰下げを中々承認せざるよし申し来る。こまつたことと思ふ。

六月十七日(土) 登校、大自にて。朝総長室にて要談。大蔵省にて繰り延べにつきて難色ありとのこと故或は来週出京の必要起るかも知れず。十九日夜全学職員にて総長をよぶことにする。前によばれし御札なり。市電より電力料金につきて返事あり。十一時より学生一同、教授、助教授一同を集めて今日にて講義をやめることにつきて余より其理由等を説明し、理学部会のことにつきて説明す。

六月十九日(月) 夕方恵濟団にて大学教職員の懇親会あり、余挨拶す。本夜渡辺事務官上京す。理学部設備費繰下げの件につきてなり。

六月二十日(火) 理学部建築の設計変更につきて相談す。一般会食数学教室にて行ふ、会者十七人。午后も設計変更につきて協議す。市電、宇治電の返事ありたり。

六月二十一日(水) 狩野氏来る。二事業家より電気をとるも室外配線の距離八ケましくなしとのこと也。昼化学会食。設備購入につきて相談す。仁田氏細かき調査をせられたり。

楠本氏来り長岡氏辞意ありとて困れる様なり。余に東京にて長岡氏に逢ふてくれと依頼せり。午後七時廿分発上京。本日昼の燕にて長岡総長帰京せられる。

六月二十二日(木) 朝七時、丸ノ内ホテルに入る。渡辺氏に電話し九時半共に文部省にゆき会計課に佐藤予算掛長をたづね予算繰下げにつきて了解を求む。繰上げてくり下げたのだから議事に説明六ヶしとのことなるが漸く緩和せり。

高田学務課長に逢ひ、在外研究員を依頼す。昼、上野の風月(松坂屋前)にて昼食し、大蔵省に引きかへし大熊氏、秋氏にあひ、設計変更等につきて了解を求める。再び文部省にゆき予算くり下げにつきて会計課長の了解を求める。夜八時頃長岡総長邸へゆき総長に来年三月迄の留任を依頼す。九月一月巴里の電気単位を定むる会に出られる由。午后九時二十五分菟帰阪の途につく。

六月二十四日(土) 茂呂氏来る。市電より料金まからぬといひきたる。結局一事業家即ち市電のみより電力をとることに決す。

七月八日(土) 登校大自。朝楠本氏にあひ、理学部校舎タイル張の件につきて協議す。午后教授、助教授室、図書室、講義室の器具につきて見本図をとりて大体の型を定め、之を室に合はせて画かせることにする。講義室のは大高浪高を調べて刑務所にてつくらせることにする。

七月十日(月) 朝新橋にて下車シタキシにて山王ホテルに入る。

文部省にゆく会計課長室に已に楠本、丸沢、渡辺、茂呂の諸氏居たり。余十分ほどおくれたり。来年度の予算につきて説明せり。理学部のためには寄附金利子のことにつきて話出で之は昭和十年度の設備費にまはすことにつきて主張す。次に吉田氏にゆきて在外研究員のことをたのむ。年度末ならば出来そうなり。専門(ママ)局長は京大総長来れるために逢へず。余独り大蔵省にゆき秋氏にあふ。階段教室は大学にてやることになれるを確む。大熊氏にゆく。タイルは総務部の方にて金が残るたるといふことならば不可といふ故に大学より申請ふといふこと也。学士会館にゆき楠本、丸沢、渡辺、茂呂氏と昼食を共にす(楠本私)。丸沢氏東北大学金研支所を大阪に置く予算を出すことにつきて齋藤大吉氏など大反対、阪大工学部も反対といふ。楠本も同様云へり。楠本、丸沢と余とは長岡総長を理研に訪ひ、余はタイルは金のこりし故に亦美観と建築上のために張らんこと工学部の主張にして余も同意也といふ。総長はモット必要なるものあらんも教授等賛成なれば可也といへり。丸沢氏は大に東北大金研のことの反対をのべ、総長も同意せり。それより丸沢氏と余と学士会館にかへり柴垣氏と三人少し話す。遠山氏居たり、之とも一寸話す。それより神田針久に八木氏をたづね、タイルにつきて諒解をもとめおく。風月室にて夕食して大熊にゆく。タイル総長同意につき上申するが工学部の申出を総長にいふことをたのむ。

七月十三日(木) 朝九時帰着、大自にて出勤。

事務官にあひ、タイル張りの件につきて総長の承認をえたることを話しそれを大蔵省へ上申し設計変更のことにする。

(*東京より夜行で帰阪。)

七月十四日(金) 理学部の建築へタイルを張ることにつきて教授諸氏の同意を求める。異議なし。

三時半頃より予定の如く自動車丸甲四台(内一台大自)に分乗し、十四人の理学部職員(教職員12、事務員2)石橋より伊丹緑ヶ丘に出で、そこに住宅地の事務所に休み説明を聞く。場所はよろし。それより自動車分れ分れになりて別々の途より宝塚に向ふ。六時頃着。旧温泉に入り湯に入り夕食を共にし、八時半頃迄話して阪急にて帰宅す。阪神間の人八名なり。

昨年始めて揃ふて大阪へ来りしときは今日なりし故、其記念の懇親会也。

七月十八日(火) 登校、午前十時より教授、助教授諸氏をまねきて教官室の家具につきて設計したるものを見せて承諾を求める。午后木村監督と種々打ち合はせる。

七月十九日(水) 登校、総長額の書「雲蒸龍変」をくれる。

七月二十日(木) 阪大工学部堤正義氏やめ、丸沢氏部長となる。

八月十日(木) 登校、茂呂氏、木村氏、寺阪氏等と協議す。化学実験台、塗板、講義室椅子、階段教室、暗幕につきてなり。之を大学にて注文し木村氏等に取付けてもらふ也。

九月七日(木) 上京するにつきて木村氏とよく打ち合はせる。また寺阪氏を茂呂氏宅(休める故)にやりて打ち合はせをなす。また楠本氏に会い高岡氏のことの諒解をもとめまた内規制定の打合はせをなす。之を八木、丸沢氏にあらかじめ知らすことにす。由て後に塩見にゆき八木氏に之を通じたるに同氏は内規制定に反対、天降り式を継続せよといふ。甚だ不思議の説なる故に楠本氏に通じ、明日楠本、八木両氏を会見せしめることす(ママ)。丸沢氏には告げず。

(*総長選挙内規。)

九月八日(金) 朝七時十分頃新橋着、タキシにて山王ホテルに入り食事散髪して文部省にゆく。虎ノ門に新築せらる、立派なり。二階の右方の会計課にゆく。河原課長にあふ。阪大の講堂、理学部設備など通過せり。

九月十一日(月)登校、木村氏、渡辺氏、茂呂氏とあひ出京所理(ママ)したる要件につきて協議す。

午后、楠本氏にあひて八木氏と話せる結果をきく。楠本氏は更に小沢、和田両氏にあひて其意見をもきける由、結局医学部は天降りは異論あるべしと由て小数の協議員をつくり、其決定の結果を教授会にはかる程度にせんといふことになる。長岡総長には余より通知を出し評議員会を開くことをやめてもらふことにする。

(*真島は九月十日東京より帰阪した。)

九月十八日(月) 理学部第二学期開講。

九月二十二日(金) 一般会食、恵済団にてやる「十三人ほど集る」。色盲者入学は許すと甲南へ通告することにする。医学部の聴講者は当分希望の先生にことわりてきくをう「得方」とす(講師、試講、助手、副手、大学院学生、学生)。講義室の椅子机につきて神戸商大の新校舎を見にゆく。清水教授、松生書記と共にゆく。机、イス、寿屋のものにて充分なること明になり。

九月二十七日(水) 三時より恵済団の理学部会臨時役員会に臨む。会の事業と予算とにつきて種々相談す。五時頃散会。

九月二十九日(金) 総長室、応接室家具を見る。階段教室の椅子机につきて寿屋の設計を吟味す。一般会食、理学部会のことを報告す。次に十月一日は理学部官制発布の日なるによりて祝賀をすべしといふことになり、そのときに任命されたものが皆をよぶことになる。新しき学士会クラブにせんとて清水、小竹両氏とそこを見にゆく「大自にてゆく」。食堂にも交渉す。

十月二日(月) 朝登校、午后八木氏来談。四時半頃より学士会クラブにゆく。理学部開設一週(ママ)年を祝する小会を催ふせるなり。総長は近親に不幸突発して欠席されたり。塩見の小倉氏等出で事務の人を合して二十人ほどなり。甚だよき会合なりき。食堂にて余挨拶する。后学士会の室を借りたるところへ集りて話をする。

十月四日(水) 登校、楠本氏来談「総長センキョ」の事など也。昼化学会食「セントラルプラット、ベリヒテを買ふことを申出で皆に承認をうけたり」。食后一同にて建築を見にゆく。大分進捗せり。十一月末には内部一通り終了すべしとのこと也。午后三時より運動週間のこと、及び来る十四日の理学部会創立祝賀会の準備につきて協議するために主任の人に参集を乞へり。十月卅日！

十一月四日迄やすむことゝなれり。十四日には文芸部の会を最初にやり、後に祝賀会をやることにせり。岡谷氏の意見による。

十月十四日(土) 三時半恵済団に向ひ理学部会創立祝賀会に臨む。初めに文芸部第一回の催ふしあり。レコードコンサート、東朝高原氏「漱石の思出」の話あり。五時より祝賀会に移る。余挨拶、丸沢氏祝辞、村田学生課長祝辞あり。食事にうつり、后食卓をはなし円卓的にしたところより一人づゝ年長者の話を乞ひ、終に理学部会の万歳を余、大阪帝国大学の万歳を丸沢氏に述べてもらふて終り尚欲談せり。楠本氏は医学部に会ありて来らざりし。

十月十六日(月) 登校、茂呂氏に理学部敷地内に官舎を建てる件につきて話し、其位地の変更と家相悪しき故その変更とを協議す。同氏は之をやめると言ひ出せり。渡辺事務官をよびて更に相談しやめることになる。

十一月四日(土) 登校。十時より評議員会。学位規程「理学博士除外」、工学部規定改正案「学年制を科目制とす」、運動週間を来年より十月十六日より一週間とすることなどきまる。余職員懇親会につきて提議し、紀元節、天長節は十一時よりとし昼懇親会、明治節は大坂商工祭とカチアフ故に九時より祝賀式を行ひ懇親会は運動週間の初めに夜行ふことにする。

十二月一日(金) 登校、一般会食、教授会を開く。学生募集要項を主題として建築の報告などをする。浅田氏よりニウトン祭をやるうとの提案あり。やることになる。正田、浅田、渡瀬氏委員となる。

十二月十四日(木) 大自にて出校。今日は軍教の査閲あり。十一時頃よりそれをきゝ恵済団にて昼食を共にす。長岡総長、学部長、学生課の人々等となり。午后三時よりまた其講評を総長室の隣にてきゝ四時過ぎに茂呂氏の来年の予算査定の結果をきゝ来れる報告あり。

十二月十五日(金) この日阪大より賞与もらふ。但し目録也。多大にて驚く。十二月十六日(土) 賞与現金受領。

楠本氏をたづねて総長の辞意のことを協議す。

十二月二十日(水) 三時より理学部会の臨時委員会をひらき来年度の予算案をつくる。又理学部会名簿をつくることにする。

十二月二十三日(土) 午後三時より医学部講堂にて皇太子殿下御誕生奉祝遙拝式あり。楠本氏総長代理をやる。午後四時より記念会館三階に理学部のニュートン祭をやる。学生すべて司会。余最初に本会の由来をのべ、アインシュ

タインの手紙を見せて其由来をのべる。八木氏の研究者の態度などの話あり。スシ、シルコ、オデン、ウドンなどの御馳走、果物もあり、又数学学生の詩吟、化学学生の踊（教師銘々伝）、物理学生の踊（大阪音頭）などあり終る。余の発声にて天皇、皇后、皇太后、皇太子殿下の万歳を三唱して散会。

昭和九年

一月一日（月）十時より長岡総長臨席せられて新年祝賀式を医学部講堂にてひらく。終りて恵済団四階にて新年の名刺交換あり、スルメ、ミカン。鯛一尾大なるを焼きて持ちまはりて少しづつ食す。最初総長箸をつける。総長兩階下の万歳、楠本氏阪大の万歳をやる。余長岡総長の万歳をやる。二度だけにてやめんとして三度やりたり。

一月八日（月）五時より大阪ホテルにて理学部教授、助教、講師諸氏と本部の渡辺、茂呂氏などをよべるに出る。新年祝賀会なり。余挨拶、八木氏答辞。食後、八時半まで話して散会す。

一月十八日（木）⁸⁶にて出校、総長に挨拶し講義二時間。午後木村氏と寺阪氏とにて理学部各室の番号「エナメル、木村」、名札「ヨテイ通木」、鏡前「教授、助教授室ラッチ式に変へる」、玄関に於ける本部と教室名、設立由来銅板等の位置につきて協議す。后実地を見る。

一月十九日（金）午后五時より総長招待の会あり。三学部のもの皆集まる。総長挨拶、丸沢部長答辞。后総長より重き水の話あり。丸沢氏、上野氏の会社にて電解の水のながくかへぬものあるを語れり。

二月二日（金）茂呂氏に來室を乞ひ理学部倉庫につきて事務の使用のものを二階、三階と定む。昼一般会食。後教授会。新建築へ移転のこと、図書室のことなどにつきて協議。田中敬、木村氏臨席せらる。三時半頃までかゝる「建築移転委員、理学部互助規約決定」。

二月七日（水）午后二時より建築移転の委員会をひらく。八木、浅田、仁田、清水氏集る。寺阪を之に入れ、四時頃迄議す。木村技手出席さる。リノリウムが遅れることは移転のために最も重大のことなると知れたる故に余東京に出でたる序に督促することに決す。其他種々の協議をなしたり。それより一同にて建築を視察す。

二月十四日（水）十時頃文部省にゆき高田氏に在外研究員のことをたのみ、数

学の夏期講習のこと、川合眞一氏のことを話しなどす。

二月十五日（木）朝九時帰阪、大自にて登校。十時より二時間講義。化学会食。大藏省の様子を木村氏と事務官に通ず。午后三時より理学部会役員総会を開き本年度の支出報告、来年度の予算につきて協議す。

二月十六日（金）正午一般会食。一時より教授会。学生の入学に関する件を議す。本年は入学希望者定員に満たず、撰抜試験はせぬが、体格試験、人物考査をやり、化学は其上に口頭試問をやることにす。期日は三月十七日なり。聴講生、専攻生のこと及び修学申請に関するなどを議して四時過までかゝる。

二月十八日（日）終日在宅。

阪大理学部玄関に掲げる設立の記、原稿をつくる。

二月二十一日（水）午后四時病院へひきかへし、楠本、丸沢両氏と要談し、理学部落成式を五月下旬に行ふべきこと、そのときに工学部の編入披露をも併せ行ふべきことを協定す。

三月三日（土）^{*}午后武内教授に阪大理学部創立の記を訂正し漢文にすることを依頼し、二週間位の内にしてもらふことにす。藤瀬氏と余の室や他所々に於ける余の標本、図書などにつきて大阪へおくりてもらふものを仕わける。
〔*東北大学の出来事。〕

三月六日（火）登校。丸沢「工学部編入披露（ママ）」のことを教授会へはかりしに一同賛成したりとのこと、よって理学部編成式を同時にやることにす。楠本氏来られ「長岡氏に例の件を話せしことを告げられたり五月初めより支度にかゝることに申合はす」八木氏来られ雑務の話あり。

三月十二日（月）午后三時より岡谷、仁田、清水三氏の來室を乞ひ、木村技手にもきてもらひ、移転の時期に関する打合せを行ふ。本部や理学部事務に本月末日より一日にかけて引きこしてもらひ、図書棚、家具等は本月廿日以後に入れ、教室の移転は八日以後とすることに決定す。入学の人物考査は十七日に行ふがそのときの役割につきて相談して予定をつくる「化学一組、数学物理一組。友近、南雲両氏の送迎茶話会を十六日午後一時より恵済団にて開くことにす。

三月十三日（火）田中敬氏に理学部の図書館規定を仁田氏がつくらせたる案を田中氏持参す。

三月十四日(水) 総長室へゆき挨拶す。総長選挙のことにつきて余は総長よりの天降りを一案として主張す。

二時より総長室に学部長会議あり。村田氏死去につき後任学生課長として鉛氏を推すこととなり、宣誓式、落成式のことなどにつきて話す。

三月十五日(木) 午后理学部建築を見る。松生氏と仁田氏と共にゆく。仁田氏来談、渡辺氏来談。落成式は三学部成立記念祝賀式とするを提議し、エハガキを主張す。

三月十六日(金) 長岡総長と会見、種々話す。選挙せず、総長より評議員だけにはかり、楠本氏を決定することをすゝめる。昼一般会食。一時より南雲氏歓迎、友近氏送別の茶話会を恵済団四階にて開く。余挨拶、両氏挨拶。後名乗りをやる。三十分位にすむ。

三月十七日(土) 九時より入学生的人物考查をやる。十二時半過皆すみて試験関係のもの皆昼食を共にす。三時より教授会。教九、物17、化16の入学生を許可す。

三月十九日(月) 午後一時より教授会、学生の学修に関する件、専攻生聴講生に関する件を議了し、其他新築へ移転に関する件、雑件、来学年を四月十六日に始めること等々を議す。

三月二十四日(土) 10.00より卒業式あり。昨夕総長来られ、今日出らるゝが風邪気なり、甚だ気の毒に思ふ。総長告辞あり。文部大臣、知事、市長などの祝辞あり。式后記念館三階にて冷肉にて簡単なる昼食を出す。

三月二十六日(月) 十時二十五分、京大化学の教授諸氏八名来らる。記念館にて小憩後、理学部の建築を案内する。再び記念館にてやすみたる後、ガスピルへゆき、別室にて休み、昼食を共にす。主客十四名なり。それより茶話会をもとの別室にて開く。一同名乗りをなす。其前に仁田氏挨拶し、佐々木申二氏答えらる。茶菓の出方おそく四時頃迄かゝる。

本日長岡総長気管支少しわるく逗留静養せらる。
三月二十九日(木)* 長岡先生へ電話にて安否を問ふ。看護婦をやとへりといふこと也。

三時頃長岡氏邸を見舞ふ。腎臓結石にいたみたるらしく、胆汁を吐きたるよし。今日はやほど快方の由。

〔* 眞島は三月二十七日より上京中であつた。〕

三月三十一日(土) 工学部へゆき、丸沢氏に総長の長々居らぬだろうことを話したるに甚だ憂色あり。

四月二日(月) 本日事務(理学部と本部と) 移転を始め、大体終りたるようなり。

四月四日(水) 出校、新校舎に入る。暖房未だ備はらず。電気設備も工夫多く出入して乱雑なり。

四月六日(金) 学振より電報あり。十日秩父宮殿下大学に於ける学振補助の研究御視察の趣なり。それにつきて二時より協議す。

四月十日(火) 朝7.31にて出学。池田と共にあり、昨夜つくりたる説明図を貼附て用意なしたり。9.00殿下御附武官一名、桜井先生、山本主事を従へ御来学。

楠本総長代理御先導貴賓(ママ貴賓室カ)に入らせらる。三学部長、関市長、川田学長、渡辺卓郎氏拜謁す。それより余の化学総覧、商大の出版物を台覧あらせられ、余御先導申上げ玄関へ御送りし、直に塩見へゆく。其間医学部を御覧あらせらる。塩見にて余御先導し、浅田氏の研究を御台覧あり。御先導申上げて玄関に出で、御伴して工業研究所より工学部へ向ひ、終りて再び本部貴賓室に入らせらる。時に十二時に近し。御小憩し後会議室にて御昼食を供し奉る。陪餐者昨日の如し。料理は甲子園の出張也。殿下はそれよりゼ子ラル、エレクトリック、モーターズに向はせらる。三学部長は甲子園にゆき御附の宮内官に御礼を申上げ御機嫌奉伺をなし、桜井先生を見送るために大阪駅に向ふ。二時三十五分にて先生は京都に立ちよりて今夜10「ママ10時」頃の汽車にて帰京せらる。一度大学へかえり直に帰宅す。

〔* 秩父宮殿下。
* 桜井錠二先生。
* 桜井錠二先生。
* 大学三学部長、渡辺事務官、関市長、川田商大学長、商大事務の人、渡辺卓郎氏等(四月九日 日記)〕

四月十一日(水) 本日より各教室のおくれたところの移転を開始せり。事務関係の人々は数日來の多忙にて気の毒に思はれる。

四月十三日(金) 昼、新会議室にて会食。午後一時より教授会。聴講生、専攻生のことにつきて協議し、後図書室の規定をも議す。其後余の研究室にて出版委員会あり。別刷集の名称を田中敬氏の案、並に諸大学等の例につきて撰定せり。種々雑談す。

〔* 眞島は三月二十七日より上京中であつた。〕

四月十六日(月) 10. hより新入生のために大講義室にて入学式をやる。初めに学生の名をよび、余訓辞をなし、理学部会のことをつけ、後順次に各科の教官の起立を乞ひて之を終り、次に各講義室にて学修に関して主任教授より注意せらる。午前、小倉氏に塩見理研借用につきて感謝をなし、序に雑誌、バックナンパー限定借用の申込をなす。后タキンを拾ひて佐多愛彦氏にゆき同様感謝と雑誌のことをいふ。いづれも自分はよいが協議してといふことになる。如何なる返事があるべきか?。午后医学部の長崎、梶原、古武、中田諸教授と記念館の

〔空白ママ〕氏に長く教室、実習室の借用につきて感謝す。

四月十七日(火) 二時半頃、病院に楠本氏をたづねて校舎借用の礼をのべる。三時より化学教育会議雑務を議す。

四月十八日(水) 第三講義室にて初めて講義したり、一時間。昼、主任会食して雑務を議す。渡辺事務官より電話あり。長岡総長病氣入院とのこと也。腎臓結石也。十四日夜のこと也。宣誓式延期せらる。内山、狩谷両氏をまねきて電力、動力、蓄電池関係の事項を主任の集まれるところにて聞く。寺阪、浅田氏などをよびて皆よく諒解す。主任会議の雑務大略片附く。午后三時より化学教育会議、雑務を議す。之も本日にて大略片づく。

四月二十日(金) 駿河台三葉病院に長岡総長を見舞ふ。□が結石となり尿道をふさぎて困られたるが、石をこはして出し出血ありし由、今もカテーテルにて排尿さる由、地震観測所のことなどを話す。

〔*眞島はこの日朝上京。〕

四月二十三日(月) 文部省へ電話したるに秘書課の阿部廣吉氏文自にて迎へに來られ、共に法制局にゆく。理学部学年進行の官制は未だ審議せられずといふ。由て今から少くも二週間はかゝること也。即ち京大教授会にて浅田氏の論文を通過したるときは直に文部省の認可をうればよきことゝなる位也。而て書記官は成るべく内規をくづしたくないといへり。

四月二十五日(水) 木村技手、奥村技師をつれきたる。理学部の設計者の由也。小竹氏接待したり。昼一般会食、后教授会、聴講生、大学院入学のことなど也。塩見の図書、官制のおくれたこと報告す。其后主任教授だけにのこりてもらひ、昭和九年度の経常費配当をなす。昨年と殆ど同じ率による。尚設備費の不足を補ふために追加予算を提出することを話す。

五時前になりて自動車來りて和田、西尾両氏(と)ア、ノ駅にゆき、楠本

氏をまち五時廿分発和歌山にてキシヤのりかへ、八時三十五分白浜口へつく。それより自動車にて白浜大浦荘へつく。

四月二十六日(木) 九時より温泉療養所に寄附するという白浜土地会社の候補地二ヶ所を今朝船にて來着せる栗本勇之助社長等の案内にて見る。

四月二十八日(土) 午后一時より総長室にて部長会議あり。余は理学部落成式を併せて三学部成立祝賀式を行ふことを主張してそのようになる。絵ハガキも七枚を主張す。

四月二十九日(日) 医学部会議室へゆく。少し待ち合はせたる后、式始まる。余総長代理をやる。勅語をよむ前に最敬礼を忘れ注意をうける。次に恵濟團にて宴会、また余挨拶をさせらる。天皇皇后兩陛下と阪大の万歳をとへる。館教授のためにも乾杯す。1. 頃迄話し合へり。

五月一日(火) 大学記念日にて休業なり。

五月三日(木) 四時より理学部会を記念館三階に開らく。余挨拶し、岡谷氏音楽の話、南雲氏婦朝談、小竹氏ヨットの披露、大橋氏ヨットの説明、ヨットの映画などあり。八時に余等だけ少し早くかへる。

五月四日(金) 杉山書記、本日京大へ出張、理学部夏期講習のことを調査す。

五月五日(土) 大自にて夙川の海岸までゆき、スカルハウスの近くにて理学部のヨットの進水式をやる。余挨拶する。命名もやり、進水もやり、酒をへさきへかけた。学生試乗をやる。

五月十日(木) 昼前楠本氏にあひ設備費不足のこと、講座(コロイド)のことなどを話す。昼化学会食。佐多氏にコロイド講座につきて理由書下がきを要求す。仁田氏に追加設備費の大体綱目を要求す。

五月十六日(水) 昼化学会食。佐多氏より膠質学講座設置理由書受領。

五月十七日(木) 本日学生野外軍事教育「四条嶽」のために午前は休めり。来年度の設備費不足追加要求、収入支弁事項の予算、膠質学講座設置理由書及其経費などにつきて考慮し書き上げる。

五月十九日(土) 午後一時より部長会議。大学の祝賀会及理学部落成式は総長病氣のために延期することゝなる。其日取は本月末に事務官上京してきめることにする。

五月二十六日(土) 楠本氏と会見。同氏東京にゆき、佐谷氏を伴ひ長岡総長を診したるに已によほどよきが尚撰護腺全くよきはならず、安静にするを要す

る由也。故に宣誓式は六月二日に行ひ、落成式は五月二十日の間に行ふことにし、総長は宣誓式にはきたらず、落成式には成るべく来ることを希望する程度になすことにせりと。又余が丸沢氏に会見して長岡氏の辞意とそれに対する所置とを話しよく相談することを希望せり。余と丸沢氏とは多分東京へゆくこととなるべし、長岡氏と会見のため也。

五月二十八日(月) 丸沢氏を電話にてよび、長岡総長の辞意をなし、楠本氏を推す意志総長にあることを告げる。由て三十日夜余と共に東京して総長を見舞ひ、直接に聞くべしといふことにする。事務官をよび宣誓式を六月二日に総長なしにてやることにする。総長告辞は刷物として后に渡すことにす。

病院に楠本氏を訪ひ、三十一日に丸沢氏と東京することなきめたることを話す。田中氏に別刷集のことをたのむ。コンテントをつくり、表紙をつくり印刷せしめ製本すること也。テニスコートの費用を体育奨励費にて払ふことにつきてそのようにとりきめる。

五月二十九日(火) 古武教授より荒木学習院長来れる由告げきたる。十時頃来らる。理学部校舎を案内す。総長室にて休む。楠本氏をも呼び、魚岩にて昼食を喫す。渡辺、茂呂両氏も共に列席せり。

五月三十一日(木) 丸沢氏と三葉病院に長岡総長をたづねる。よほど快方に向はれたり。室内を散歩一キロ半に及ぶと。今日は初めて外出せらるる由。総長辞意を述べらる。由て其段取にかゝることを約す。成るべく速にとのこと也。六月十三日頃には下阪しうべしといはるゝが、落成式にも出るつもり、学生にも話すつもりのようにいはる。落成式は二十日にしたらばよからんと思ふと丸沢氏いへり。総長別に異議なし。

六月一日(金) 正午一般会食。午后二時より総長室に楠本、丸沢両氏参集、余と共に。総長辞意あるにつき其後事を議す。四日評議員会、七日各部教授会と定める。七日夜余渡辺事務官と共に東京のこととする。

六月二日(土) 十時より宣誓式あり。楠本氏司式。各部学生に自署せしむ。其間部長は之を監視見分す。十一時過終る。

六月四日(月) 三時総長室にて評議員会あり。余より総長の辞意の沿革、後任者を楠本氏とする総長の意志をのべ、諸氏の賛成を求める。皆賛成也。由て明々後日の教授会に於ける次第を協議し、また七日夜余東京すべきことを述べる。

六月七日(木) 仁田氏に長岡総長の辞意をのべ、本日の教授会にて楠本氏を選挙することを話しおく。一般会食、午后一時より教授会。専攻生入学の件、互助会にて貧困学生をたすける件などを議したるのち、長岡総長の一件を余より詳しく述べ選挙に入り、十一票悉く賛成となる。工学部二十五票、医学部二十一票全部賛成となれり。医学部長は小沢修造氏、病院長は和田豊種氏となれりとのこと也。

六月八日(金) 長岡総長を西片町の邸に訪ふて選挙の結果を報告し、辞表を署名捺印せしめる。総長一寸病院へゆかる。其間夫人と談話す。総長帰宅す。昼食を御馳走になる。午后自動車にて文部省へゆき、新学務課長にあひ、后に専門局長赤間氏に総長の辞意と後任選挙の結果を述べ、其ように取はからはんことを乞ふ。菊沢秘書課長にゆき同様にし、親任待遇のこと、賞与のことをたのみ、又発表時期を廿二日閣議に呈出してきめることとす。次に粟屋次官に逢ひ、同様のことをなす。之にて使命了はりたれば長岡総長宅へゆき復命し、大学正門前にて事務官と分れ余は理研へゆく。

〔*眞島はこの日朝東京。〕

六月十四日(木) 朝七時十八分帰阪。

十時より学部長会ギを恵済団にて開き、廿日の会のこと、長岡総長の送別のことなどを議す。それより食事を共にし一時より八木氏の送別会を同所にて開く。余挨拶す。午后四時より理学部会文芸部会を理学部の大講義室にて開く。医学部の梶原教授フランス人の話及びフランスのレコードをかける。余は疲れたる故に早く帰へる。其後に鉛教授の独乙の話あり甚だ面白かりし由也。

六月十八日(月) 総長昨朝来阪につき挨拶にゆく、元気なり。理学部内を供覧することに於て順序などを取りきめる。午后三時より全学生を医学部大講義室に集めて長岡総長の話あり。部長と評議員とだけ列席す。読書の法は内容、目次をみて要所を見、要点をつまむべきこと、富、学問、名誉をうる心得などなり。

六月十九日(火) 午后二時より恵済団にて総長送別茶話会あり。教授、助教授、講師など出る。余挨拶し、総長辞職の挨拶あり。暫時して丸沢氏長岡先生の万歳を三唱して散会す。四時より医学部の教授、助教授を理学部へ招き、教室を觀覽せしめる。六時より北浜野田屋にて前記医学部の人々を招きて理学

部開設前後並に昨年来の援助に対して謝意を表す。

六月二十日(水)^{7.30}にて出校。フロック着用す。雨天につき来賓を直に医学部に入れ、特別の人だけは医学部会議室と部長室とに入れる。天気不良にも拘はらず沢山の来会者あり。四、五百名也。高等学校長十三名を其中に算す。其他直轄学校長二十五名位もありたらん。式るとき総長式辞のつぎに余の式辞(落成式の)あり。うまく朗読したるつもりなり。其後記念館にゆきて一、二、三階にて皆冷肉の宴をひらく。総長の挨拶、東郷政務次官の答辞などはラウドスピーカーにて各階へ通じたり。其后来賓を案内す。中山太一氏はこれによく案内したり。

六時より平野町堺卵楼にて医学部創立の功労者及来賓、大学代表者などをまねく。長岡総長と三学部長とでなす。盛宴なり。

六月二十一日(木)長岡総長親任官待遇となれる由新聞に見ゆ。

六月二十二日(金)昼一般会食。余より塩見家の人々を招待することを提案して一同の賛成をえたり。岡谷氏より名古屋松阪屋に話して明年ボーア招聘の金を出さしめるために大阪大学理学部へ寄附せしめるといふ。また雑誌の二重コピーを買ふためにも向ふ何年間か相当額の金の寄附をせしめるといふ。之も理学部へ寄附するなり。余は賛成しおく。塩見家は廿八日(午後)の意三時より理学部へまねき、五時より南浦園にまねくことにする。招待状案も余つくる。三時より大阪クラブに長岡総長送別茶話会あり。関市長挨拶し、長岡総長答へらる。地震と津波に言及せられて長かりし。

六月二十五日(月)午後五時より楠本新総長のために全学教職員の祝賀懇親会を開く。丸沢氏挨拶し、楠本氏答へたり。本会はまた小沢医学部長、和田病院長のために祝したれば両氏も挨拶ありたり。后余、楠本氏の万歳を唱へる。楠本総長大学の万歳を唱へる。

六月二十六日(火)朝事務官と一寸話し、午后楠本氏と話す。膠質学講座のこと也。

六月二十七日(水)楠本氏とワイマルンのこと、理学部官制のことにつきて要談す。

六月二十八日(木)午後三時より塩見高年、竹原八郎「塩見家女婿」、高見氏、貴志氏、吉田氏を招き、教授、助教総出にて案内す。三階部長室にて休憩、五時過自動車にて一同南浦園「八聯隊南門前」へゆく。支那料理也。佐多氏を

れにのみゆきて待てり。八時半過無事終る。余挨拶、佐多氏挨拶。よき集会なりき。

今日にて理学部創立関係のこと大体一段落となれり。気持ち軽くなる。

七月三日(火)午後一時より評議員会。前長岡総長を大阪帝大名誉教授となすの件を楠本総長より提案あり。一同賛成す。

七月十八日(水)五時半より綿業会館にて楠本氏のなせる総長就任披露に出る。大学よりは各部長、病院長、事務官等のみなり。二百五十名以上招待して百五十名余来れり。楠本氏挨拶、県知事答辞。余は大毎記者と八馬兼介氏との間に座せり。八時頃終了。

七月十九日(木)寺阪氏師団へゆき理学部の防空演習時の心得をきく。午后一時より仁田、清水両氏(岡谷氏来らず明日つたへることにす)と防空に關して寺阪氏の説明をきき、三越に於ける防空の展覧会を見にゆく。午後六時より北浜花外楼に於ける住友の小倉氏の招待にゆく。楠本氏以下医学部の人々の交送を機とし、臨床の教授と理工両学部を招きたるなり。小倉氏アイサツ、楠本氏答へる。九時頃終る。

七月二十日(金)今夜理学部にて燈火管制の予行をやる筈。

八月一日(水)数学夏期講習会本日始まるにつき初めに余挨拶す(大学の対外的使命、人の生命の短きこと、夏の利用、各自の健康を注意す等)。

八月十一日(土)十一時二十分頃数学夏期講習終了したるにつき同三十分頃修了証書を余より授与す。続て余より挨拶す「講習終了ヲ祝シ課程ノコト、程度ノコト、手ホドキタル事、講習ヲ毎年高ヤルトイフコト、健康ノ事、修養ノ事」。総代ノ答辞アリテ閉式。

八月十八日(土)銅版を玄関左手にとりつけるためにタイトルを除去す。清水、浅田、仁田諸氏と話す。明後日文部大臣に見せる場所のことなど。仁田氏と理学部の対外の仕事、夜間講義、夏期講習などにつきて話す。

大阪駅にて燕にて御来着の東久邇宮第四師団長殿下を奉迎し、来賓室にて単独拜謁を賜はる。

八月二十日(月)^{8.07}発大阪にて^{8.56}着の文部大臣を迎へる。総長はさきに工学部を見せ、次に理学部にきたれり、十時前なり。小憩して茶菓を出す。それより余図書室、仁田氏の室、八木氏の室「光線電話、赤外線電話」、浅田氏の紫外線などを見せる。

5. 頃より朝日ビルみやけにゆき松田大臣歓迎会に出る。大臣は朝日の野球の最終の日に臨席するためにきたれるなり。昼は朝日にて甲子園にて昼食を出し、総長はそれへゆけり。夜の会には誰も挨拶せず。

8. 大臣の帰京をおくりて帰へる。

九月十一日(火) 楠本氏の室にゆく。工学部現地改築を茂呂氏に調べさせおれり。

夜、理学部官制開議通過の由、渡辺氏より電話にて知らせ来る。

九月十七日(月) 阪大理学部の辞令本日漸く出る。八木、菊池、浅田、千谷の四氏だけ新聞にて見たり。朝文部省渡辺氏よりも電話ありたり。

九月二十二日(土) 9h頃大学着。種々準備をなす。古川氏きたるによりて寺阪氏と共に検分す。正午総長等と少しおくれて記念館へゆく。風水害のために来会者大に減少し百名余となれり。食后新入会者及余等の紹介あり。余挨拶し、片岡氏之に次ぎ、楠本氏之に次ぐ。之より理学部にゆき、玄関より入りて三階大講義室にて清水氏「実用数学の話」、菊池氏「原子破壊ノ話」、千谷氏「重い水の話」あり。四十分にて終り、実験室を案内して供覧す。二時半終了す。

〔*大阪工業会見学団。〕

九月二十七日(木) 財部大將学術振興会の用にてきたらる。学術の力にて将来水、風害を絶無にせんといはれる。総長少しおかれて来れり。階段にて大將と総長話せり。

九月二十八日(金) 朝、木村朝日記者来りて種々話せり。地球物理学講座をつくること、また朝日にて災害防止委員会をつくることの計画などと語れり。

十月六日(土) 午后二時より東区豊後町に懷徳堂をたづね、其記念祭に列し記念講演を聞く。小西重直氏の「人間性に就て」の話なり。有名なるところを見て甚だ愉快に感じたり。講演も有益なりき。信、愛、敬の三徳を重要とせり。

ガスビルにては長岡氏を中心とせる晩餐に列する機会を得たり。続て同氏の「津浪の話」を聞く。七時半頃終りたる后一時間別室にて話す。

十月八日(月) 木村記者来り長岡氏をも中央气象台大阪設置に反対せぬようにしたとて喜べり。

二時より総長室に部長会議あり。風害により政府に提出する予算請求〔第

二ヨビキン□と追加ヨサンと〕書とを議す。また医学部助手増給を今度だけ認める。理学部開学記念講演をやること及講習会をやることを話し了解をえておく。清水氏廉価の雑誌あるによりて買ひたしといふ、楠本氏に話す。記念講演会のことを三科主任に話して演者をきめるように依頼す。

十月十三日(土) 三時頃气象台の岡田氏をたづねる。大阪に完備せる气象台をおくことにつきて話す。大に賛成なり、三十万円にて建て、寄附すると早しといへり。また理学部に地球科学科をおくことについても議す。

〔*眞島は十月十二日東京していた。〕

十月十八日(木) 三時頃文部省に至り、山川会計課長、赤間専門局長に阪大理学(ママ)設備追加予算につきて依頼す。未だ大蔵省の様子は少しも分らぬよし也。よく／＼たのみおく。

十一月五日(月) 文部省にゆき大蔵省の査定をきく。理学部の設備追加の削られしをきき、復活を依頼し理研にゆく。途中にて大阪に打電し総長に復活をたのむ。

十一月六日(火) 朝54大阪着。

総長及事務官にあふて理学部の設備費追加の大蔵省にて削られたることを話し運動を乞ふ。小沢氏出京し医学部病院新營のことを議する序に理学部のことも同情的に話すことを依頼す。東大高木教授来講につき、面会挨拶す。

十一月八日(木) 四時より京大独乙語の成瀬教授理学部会文芸部の催ふしに來講の筈なりしが急に風邪にて不能となり、岡谷氏が医学部長橋教授をたのみ來られレントゲンの生理作用につきて話され興味ありたり。岡谷氏開会の辞、余終りに挨拶す。

十一月十六日(金) 朝54大阪着。

大学にて長岡前総長にあふ。八木氏に災害研究所といふようなものゝ案をつくることをたのめり。そんな出来る(か)否か分らぬものゝ案は他にいくらもつくる人あるべきにと思へり。ラングミューアに陪して長岡氏は大阪城、天王寺公園などへゆけり。

十一月十七日(土) 五時頃ラングミューア来る。青柳氏つきて来れり。貴賓室にて総長、八木、長岡氏と余とだけにて八木、長岡氏頻に質問せり。それより大講義室にて講演「ステアリン酸の単分子フィルム生成」を話せり。電気に関する質問あり。長くかゝる。終りてから八木氏、菊池氏の研究室へ導け

り。余は寒かりし故に早くかへれり。総長も余より先に退却せり。

十一月二十一日(水) 十二時半より記念館三階に於て八木氏の帰朝歓迎会を開く。医学部長、青柳氏なども来たり。余挨拶。八木氏挨拶。午後一時四十分朝日会館へゆく。会場已に殆ど満員也。二時開会、岡谷氏司会。余開会の辞、清水氏、菊池氏、千谷氏、八木氏の話ありて終了。四時半頃也。

十一月三十日(金) 学生講義に来らず。工学部の査閲の方へゆけり。査閲には清水教授をたのみて余の代りやりたり。昼一般会食。食後物理と化学との教授にのこりてもらひ物理と化学との講習会をやることを提案す。物理よりは菊池氏、化学よりは仁田氏と小竹氏とがやることになる。来年一月十四日―三月十九日迄の十週間毎週一回月、火、物と化と別の日にし二時間宛午後四―六時聴講料参円、両方ならば五円といふことにする。午後^{5.30}より北浜花外楼にて伊藤忠兵衛氏の招待あり。総長、三部長、病院長、西尾事務長、鈴八木、香阪氏、阪田、木間瀬氏など来れり。一流の妓舞踊す。常盤津、三保松、清井名寄、次に十才と十二才との大和屋の雛妓ダンスをやる。九時辞去す。

十二月三日(月) 楠本総長来室、余の東京にゆく話をき、しきりに引きとめる。明後年のことながら尚大阪に止まらんことをすゝめ且つ乞へり。理学部のためにならぬといへり。

十二月六日(木) 午後五時よりガスビルにて理学部会新旧役員の慰労会に出る。廿人位の人なり。和気ある会合なりき。酒を出さず。余挨拶に之をのべて一昨日の旧友会に言及し、飲酒者の早く死せるを話す。名のりなどをさす。八時頃散会。

十二月七日(金) 昼一般会食。午後二時半頃より一時間以上総長室にて楠本氏と余の進退につきて議せり。総長は大阪に止まらんことを請へり。

十二月十二日(水) 余も大阪に仕事を集中し理研などやめんかと思ふ。

十二月十四日(金) 一般会食、今年は科学祭をやらぬことにする。其代りに学生30名、助手50名、教授―講師^{1.00}を集めて同情週間に寄附することにす。楠本総長来談。由て余の大阪に永く止まる決意を告げる。同氏も喜べり。

十二月二十一日(金) 昼一般会食。理化講習会申込の件已に三十五人位あり。科学祭をやめ同情週間に寄附^{1.00}。学生³⁰。備人心附俸給二百分の一を徴収して事務より各科主任に渡す。備人一名一、五〇名割合となす。

十二月二十二日(土) 五時惠済団へゆき楠本総長の教授、助教授招待会へ出席す。出席者多く盛会なり。支那料理にて御馳走甚だ多し。楠本氏挨拶す。文相の総長招待のことにつきて話せり。医、工両学部長欠席せる故、余答辭をなす。楠本氏の常任の総長にして大学の興隆完成を一念に苦心せらるゝことをたゞへたり。八時頃散会。

昭和十年

一月一日(火) 医学部大講堂に於ける新年祝賀例年の如し。次に惠済団四階にて名刺交換会をやる。楠本氏挨拶し、阪大の万歳をやる。丸沢部長楠本総長の万歳をやる。それより理学部へ寄り新聞をとりて出で、大自にて師団長官邸に参賀す。上りて屠蘇をいたゞく。阪急にて帰宅す。

一月八日(火) 午後五時前、渡辺事務官、小竹氏など大自にて大阪ホテルにゆく。余が理学部の教授、助教授、講師を招待したるなり。事務官、田中「敬」、宮尾氏などもよべり。茂呂氏は来らず。食后福引をなし、尚長く談話し九時頃帰宅。

一月十九日(土) 朝十時大阪着登校。雀部氏来る。理学部隣接地を売りたいといふ人あるによる。

一月二十二日(火) 赤堀、樋田両氏来校。正午化学会食、二時頃迄種々要談す。小竹、赤堀二氏と三時より授業の分担につきて議し、尚赤堀氏と人の分配につきて議し、余の方に田村、島貫、村橋三氏をのこし、岡原、金子、中田、谷、北浦氏を赤堀氏にたのむことにする。谷、北浦二氏にいひわたす。両氏承諾す。

一月三十日(水) 大学に帰り仁田、小竹両氏に講習会の講義の出版につきて承諾をうける。八木氏にあひ、来年度予算に設備追加要求を八万円とし、他の寄附金利子を大学本部の建築に提出することにつきて承諾をうける。

二月一日(金) 教授会を三時に延ばしたるに三十分遅刻し皆不満の色あり。支那、満州国の学生の入学に関する件、無試験検定の教員資格に関する件などなり。

二月十一日(月) 朝九時半より紀元節の祝賀式あり。式後服部兵次郎少将の「戦場に於ける国旗の光」と題する講話あり。満州事変に於ける同氏の転戦の跡並に将卒の日章旗をめぐる種々の武勇談あり。壮烈勇武君国のために死

を見る帰するが如き幾多の美談に感奮し且つ泣けり。恵済団にて会食し新任者を紹介したるに欠席者多し、午后理学部にて朝日の木村記者来り、新市長（加賀美氏の筈）に対する注文をいへといふ。科学博物館と宛明天才の助長をいふ。

二月十九日（火）午後一時より東久邇宮殿下台臨につきての打ち合はせ会を総長室に開く。三学部長と事務官也。鉛氏も来れり。四月末頃にして全学を御覧になる由也。よって二日とす。医理一日、工一日となす。其他どれを御覧に入れるかを各学部にてきめ、三月二日に再び会合することとせり。

三月一日（金）午後三時より記念館に村田故学生課長の記念式あり、参拝す。

三月二日（土）午後一時より学部長会議あり。師団長官大学に台臨のときの台覧プログラムをつくり七日迄に出すこと、五月一日に本年は医理両学部を開放すること等定まる。

八木氏に台覧のこと、開放のこと、助教授任命のことなど話す。午後五時半より恵済団にて理学部化学科学生と総長、理学部長、鉛学生課長などの座談会あり。ランチを食してからやる。学生側からも大した希望もなし「運動場、寄宿舎」八時半頃散会。

三月五日（火）午後五時半より理学部の教授、助教授連、余のために甲陽園播半支店にて余のために還暦の祝賀会を開かる。八木氏挨拶、余謝辞。九時迄居たり。新婦朝者の歓迎の意をも寓せる会として余は出たり。和気ある集まりにしてまことに感謝に堪へざるものありたり。

三月六日（水）化学会食、工業博覧会へ化学よりの出品をきめる。工業博へ理学部よりの出品につきて同会の事務員に返答す。

三月七日（木）五時半より恵済団へゆき数学科学生の座談会へ出席す。化学のときよりも尚従順のごとし。八時散会。

三月十六日（土）午前九時より化学入学者の人物考査、昼までかゝる。午後三時より教授会。入学試験の結果を審議して入学者をきめる。五時に終り直に発表す。

三月二十日（水）午後一時より教授会、学生の成績につきて審議し、二次募集の試験委員をきめる。

三月二十五日（月）午前十時卒業式。総長訓辞、後祝宴「オリヅメ」。午後一時工学部工業クラブ会館にゆき、祝賀会に列す。総長挨拶をやり、余も感想を

のべきゝれた。

四月三日（木）朝九時頃一寸出版して佐多氏をたづねて小倉、中島の講師給を約束通り上げられぬことをいひ、其代りに下給の雇員などを同額（二五〇〇）だけ引き上げるべしといふ。大体賛意ありたり。

四月十一日（木）九時より化学科学生の始業式をやり、余話し、次に仁田氏話し学生を案内す。十時より教授会、入学試験のことをきめる。

四月十二日（金）数学、物理の二次募集の入学試験今日より始まる。化学は今日より全部授業開始。

四月十四日（日）この日数学、物理両科の第二次募集学生の入学試験の結果を発表す。

四月二十日（土）災害科学の委員会あり。財部大將なときたれるが余は関係なし。

四月二十二日（月）朝九時、教物新入生の始業式をやる。午後工学部へゆき講義二時間。

寺阪氏を小倉氏にやり、三日に余が佐多氏に話したことの結果をきかしめる。小倉氏はそれをきゝ居りて、木下に返事せしめたといふ。併しこちらには通じて居らぬことを知りてあやまれりと。小倉氏は雇傭人に対する案を別にたてゝきたが当方より其通に出来ぬ理由をのべてやる。結局四月は駄目、五月より実施となる。

四月二十五日（木）五時半より美津濃七階にて催ふされた化学新入生歓迎会へ出席し挨拶だけをして帰へる。

四月三十日（火）*文部省に向ひ、学務課長（専門学務局の）にあひ、理学部の官制のことをたのむ。

〔*眞島は四月二十八日より三十日まで東京に出張していた。〕

五月七日（火）九時半より医学部大講堂にて宣誓式あり。総長告辞あり。学生宣誓署名せり。右終りて十一時半より記念館三階にて工学部新入学生の懇談会あり。余も挨拶せり。

五月八日（水）朝九時半登校。佐多愛彦氏来る。四月三日余のききたる返辞なり。遅きこと、小倉氏と連絡なきに驚く。

午後五時十五分より恵済団にて理学部新入学生のための懇談会あり。自己紹介、感想などに九時過ぎまでかゝる。

五月九日(木) 午後二時十五分より山下海軍大佐「帝国海軍の現状」と題する話あり。学生課の催ふしなりとて学生課長紹介などをやる。原少将の予定なりしところ上京にて変更せり。三時半より山下氏のための茶話会医学部会議室にてありたり。

四時十五分より恵済団にて医学部新入生のための懇談会ありたり。余も挨拶す。

五月十三日(月) 朝六時半宅を出で、七時半登校。八時二十分、玄関外に整列(総長部長など) 東久邇宮殿下を迎へる。来賓中に羽生経済部長、阿部房次郎、上野精一氏などありたり。九時より御先導して御案内す。十一時頃すむ。十二時頃会議室にて御食事、殿下の右にて陪食す。一時殿下を御送りする。午後三時半より記念館三階にて理学部会開催す。京大独文の成瀬清(無極)教授「人間学と自然学」の話をされる。終て茶菓、教授「寺阪、岡部、樋田」学生各組総代約九人の話あり。六時半散会、盛会なりき、新入生歓迎のためなり。

五月十七日(金) 朝九時登校、十時半より工学部へゆき、五十分御着の師団長宮殿下を御迎へす。御伴して参観し昼陪食の光栄を再びせり。安井知事の隣に居たり。午後一時半より講義し、三時終り、再び御伴して少しく参観して帰学す。三時半より主任の人々と明日の準備の様子を見て指図す。

五月十八日(土) 此日理学部開放せるが雨天のため参観者約千名位なりといふ。医学部も開放せり。

五月二十七日(月) 正午微研の人々新聞記者をアラスカに招く。余も出席す。

五月二十八日(火) 午前十時より来年度予算打合せのための部長会議あり。午後四時より微研へゆきたり。見学の暇なく直に北浜花月へゆく。山口玄洞氏を主賓として微研の感謝の宴を開く。山口氏七十三才とのこと、其子山口三郎氏余の隣に在り。平素玄洞氏は五時にね、朝三時におき、大声読経すといへり。仏寺は建築して寄附するなりと。菊池恭三、其他富豪数名来り居たり。七時頃には終れり。

五月二十九日(水) 高橋清氏来る。金研を阪大へ附設のことを話せり。

午後一時より工業奨励館へゆき、セルロイド櫛の規格委員会第一回に出る。二時半引きかへして大学の評議員会へ出席す。予算(来年度)を議せるなり。理学部より出る新講座五ヶの中膠質と纖維とを引きこめることにする。

六月四日(火) 総長出京の結果、理学部の膠質と纖維の二講座をまた出すことにする。

六月五日(水) 佐多氏より夏期講習会の案をもらふ。杉山氏に準備をたのむ。六月二十二日(土) 朝渡辺事務官と共に八時に長岡氏邸にゆき、阪大職員一同よりの記念品を贈呈し、種々話したり。

六月二十四日(月) 午後五時より数学三年学生の就職懇談会ありたり。恵済団にて行ふ。打ちとけたる有意義のものと思へり。

六月二十五日(火) 五時より恵済団の物理科三年学生の就職懇談会へ出る。

六月二十七日(木) 午後五時より化学科三年生就職懇談会をやる、八時頃終る。七月三日(水) 化学会食。通俗講演「赤堀氏にかはる。樋田氏やめたしといふ故也。」岡谷氏に通俗講演の会場をたのむ。

七月五日(金) 午後二時より学部部長会議、総長選挙規則(内規)の案をつくるためなり。

七月六日(土) 佐多氏と講習希望者42名につき19名を淘汰し、23名をのこす。杉山氏を県庁「ママ府庁カ」にやる。数学講習の通知を出したるかを知るため也。出した「い欠カ」が数学が毎度あるので学校で出しにくいとのこと也。

七月九日(火) 文部省に服部会計課長をたづね、理学部の予算につきて依頼しおく。阪大医学部につきて服部氏はよき感じをもたぬを知る。余も之につきてつい失言して後悔せり。専門局長不在故名刺をおきてくる。

七月十八日(木) 梓弓会とて医学部教授夫人の会あり。八木氏何か話せり。二時より貴賓室次室にて部長会議あり。総長選挙内規原案出来す「ママ」。

七月二十三日(火) 朝八時出校。「田工部長」丸沢、「新工部長」鉛両氏挨拶に来らる。

七月二十九日(月) 楠本氏海軍航空廠長等来学の件を話せり。次で紡績キカイ製作者桑田氏が纖維の物理的研究に寄附金十万円を出すことにつきて話あり。八木氏之に関係せるによりてよべり。財団法人にする由なり。后八木氏に余の室にて勲記を伝達し、且つ右の寄附の話や海軍の人々の来観につきて談せり。

七月三十日(水) 朝八時五分前着校。八時より数学の講習会始業の挨拶をなす。十一時膠質化学実習会の修了証を授与す。

八月十日(土) 数学講習会本日終了するにより修了証を授与し挨拶す。十二時

前より会議室にて一同と会食す。こゝにてもまた挨拶す。

八月十九日(月) 吳君と纖維科学研究所(八木氏のやれる)のことなどにつきて話す。

理学部の藤棚出来上り、運動場地ナラシも出来上れり。

八月二十三日(金) 九時頃登校。十時半頃楠本氏来る。余は本学年一杯にて退き、講師となりて研究に専念したしといふ、丸沢もかはりたる。余も少しも健康なる内に研究に最後の努力をしたし、理学部も創立は完全に了りたる故にこゝらで代りたるがよからんなどの理由による。楠本氏は別に不賛成でもなく、八木氏と協議せんことを乞へり。

八月二十四日(土) 十時頃八木氏来る。三階部長室にて懇談す。同氏は尙当分余の在職が理学部の平和のためにも又対外的にも必要なることをいへり。また同氏は今何か発明的のことをやらんとせる由にて部長などにて時間をとられることを好まず、また同氏が工科の方なる故表面的に一寸具合わるくも思へるらし。其他種々のこともあるべく想像せられる。余も之より研究に努力したればとてそれがより若年の八木氏の研究よりも多くの効果を挙げうるやは疑問なり。是に於て元來余が大阪へ来たことは初めより犠牲のつもりなる故に或は現職に尙あるも已むをえざるかと考へるに至れり。

九月四日(水) 纖維科学研究所のこと新聞に出る。谷口奨励賞を請求する書式草案を総長に出す。たのまれたる故也。総長と八木氏との余の進退に関する話をよくきかんとせしが時間少し、もつとやるかといふ位にて別れる。

九月六日(金) 災害科学研究所のこと新聞に出る。

九月十七日(火) 午後二時半より評議員会、総長選挙内規につきて也。任期五年を四年にする。投票による。実施の日に選挙せられたるものと見做すことにする。

九月二十一日(土) 午後一時―二時半迄大阪財界の重立ちたる人々理学部を来観せられる。化学三、物理十種ほどのところを、即ち一部の設備を供覧す。

五、六人宛に供覧せぬ教授等を案内役としてつける。それらの世話を余がやる。三階貴賓室にて皆一寸休憩せり。三十一人來れり。重立ちたる人のみなり。理学部終りて、工学部へ向ふ。同所にて一寸茶菓を出し、更に案内す。六時過ぎ迄かゝりたるよう也。此日八木氏及総長に余の決意を告げる。即理學部長選挙内規をつくり、それによりて選挙をやることを実施すること也。

十月二日(水) 午後五時、和具に行きし学生を集めて総長が座談会を開く。余も正田氏も出でず。小竹氏に出ることをたのむ。運動部長なるを以て也。

十月五日(土) 午後一時化学コロキウム、同二時より懷徳堂記念講演へゆく。新村出君漢字の話をやれり。

十一月二日(土) 午後一時津村別院に解剖体祭あり出席す。

十一月三日(日) 明治節

午前九時半登校、祝賀式に列す。

十一月二十五日(月) 午後一時より評議員会あり。主なる用事は来年度の予算の模様を知らせしこと、総長選挙内規に関する事なり。

十二月二日(月) 数、物、化の講習会を開く。

十二月三日(火) 午前九時より軍事教練の査閲あり。松村少将来る。総長留守、余遅刻にて気難わるかりし由也。

十二月六日(金) 午後一時より教授会。科学祭をやることとなる。主用は総長選挙内規なり。評議員会案に異議なし。即ち本日をして確定となり即日施行となれり。

十二月七日(土) 午後五時より理学部会新旧評議員達を美津濱に招待す。

十二月十日(火) 恵済団にて大市の支那料理にて教官懇親会ありたり、盛会なり。九時半発上京す。

十二月十一日(水) 文部省にゆき会計課長に予算の御礼をいふ。理学部の屋上室増設の予算通れる故なり。

十二月十六日(月) 数学講習会にてアイサツ。

十二月十七日(火) 物理講習会にてアイサツ。

十二月十八日(水) 化学講習会にてアイサツ。

十二月二十一日(土) 午後二時より記念館三階にて科学祭をやる。理学部の学生大よるこび中々やれり。一階は模擬店もありたり。

昭和十一年

一月一日(水) 十時より医学部大講堂にて祝賀あり。それより恵済団に於て名刺交換会あり。楠本総長珍らしく長き方針演説をやれり。

一月八日(水) 化学会食、屋上へ建増につきて協議す。講義室をおくがよからんといふことになる。

五時半より大阪ホテルにて新年の宴会を催ふす。例年の余の招待なり。二十八人の出席あり。福引中々よろし。八時散会。

一月十日(金) 仁田氏と話し建築課長とも話す、化学建増につきてなり。

一月十一日(土) 事務のもの新年会を催ふすにつきて二十円をやる。

一月二十七日(月) 阪大へ留學生一名を文部省より呉れた。

一月二十九日(水) 后二時より総長室にて相談があり、部長会議なり。留學生を来年度の一名くり上げて本年度に一名、大阪から出せるとのこと、協議の結果、理学部より出すことゝなれり。次ぎに十一年度に医より一名出す。その次ぎに工学部にきまれり。

理学部の留學生を渡瀬氏と定め、同氏に知らせる。

一月三十日(木) 后四時半より恵済団にて支那等の留學生の会をやる。総長、各部長出席、懇談をやる。

二月一日(土) 学部長選挙内規の案をつくることを渡邊事務官に依頼す。

二月五日(水) 正午一同会食、長岡先生のために金曜日のをくり上ぐ。二十五人の出席あり。一時より物理談話会にて長岡先生の昨年の欧米巡廻談あり。これまた満員、三時近くまで話さる。

二月六日(木) 二時より理学部会役員総会を行ふ。本年度の予算決算と来年度の予算の承認と。卒業生送別につきて議す。之は二年の委員に一任となる。

二月八日(土) 文部省へゆき、服部会計課長にあひ、理学部の予算の新規の分につきて依頼す。

〔*眞島はこの日上京。〕

二月九日(日) 五時十分頃片山氏宅にゆき余の一身上のことにつきてはかる。結局学部長選挙内規をつくりて一度選挙をなし、もし当選したらば一年だけやることにし、其間に停年制をつくることゝせり。

二月十五日(土) 二時より評議員会あり。創立五年の記念祝賀式のこと、名譽教授の内規、医学部の学課々程改正につきて議す。

二月十七日(月) 午後一時より教授会。入学者、教6、物22、化28。化だけ撰試をやることにす。数だけ二次募集をする。この日理学部長選挙内規案を示し其審議は各科主任に一任す。

二月十九日(水) 午后一時半総長と定年制のこと、余の退職後のことなどを話しまた災害科研長を八木氏好まざるにつきて岡田か波多野かまたは他の海軍々

人かといふことにつきて議す。

二月二十九日(土) 后五時より大ビルにて理学部会の卒業学生送別会を開催す。余興多く盛會也。余挨拶、一年生、二年生送別の辞、卒業生答辞などあり。七時半頃終れり。

三月四日(水) 化学会食。支那学生彭松雲、丘聊をよびて共に食事し懇談し、勉強をするようにすゝめる。

三月五日(木) 丘聊をよびて十六日の選抜試験に加はることをすゝめる。よければ正式學生にする、よくなければもとの通りといひ渡す。

三月九日(月) 午後一時より教授会。學生の卒業につきて議せり。理学部の学部長選挙内規原案の通り決定。実施を本年十一月一日よりとせり。

三月十七日(火) 午前九時に出校。化学入學者の人物考査をやる。午后四時より教授会、入學者をきめる。数学は二次募集をやることにする。

三月二十日(金) 化学会食。評議員の選挙を無記名連記二名(学部長を除く)にて封筒と用紙を送りて行ふことにする。午後一時より化学三年生研究報告會あり。五時よりガスピルにて送別謝恩會ありたり。余も挨拶(女子の結婚と男子の社會へ出るのを同じと見て話した)、諸先生の話あり。

三月二十五日(水) 午前十時より卒業式あり。余文相祝辭を代読す。記念館にて折詰弁當を出せり。俸給受領。

四月九日(木) 前〔午前の意〕十時―正午迄文相大學を視察す。

四月十一日(土) 伊太利交換教授セヴェリ氏夫妻來學す。正午新大阪ホテルにて昼食を饗應す。

四月二十二日(水) 前十時宣誓式

四月二十七日(月) 后五時半、ミツノ七階に理学部新入學生歡迎會をやる。

四月二十八日(火) 理学部會歡迎會。

四月二十九日(水) 前十一時天長節。正午恵済団に祝會あり。

五月一日(金) 前九時大學創立祝賀會。夜五周年の内祝を総長と三学部長でやり、新大阪ホテルに功勞者を招く。

六月二十二日(月) 物理學生就職講談會、十六人。

十月七日(水) 理学部會通俗講演會を朝日會館にてやる。仁田、岡部、呉三君の話なり。階下は一杯なりき。

十月十一日(日) 阪大にては今日より十七日迄体育週間也。

十月二十七日(火) 后一時、和田豊種教授理学部学生のために精神病の社会的關係につきて話さる。同時に工学部にては小沢修造教授、工学部学生のために医学者の学訓の歴史的回顧といふ話をされる。

十月三十日(金) 商工大臣、文部政務次官、理学部を視察す。特に纖維の研究を見る希望なり。政務次官山本氏の存在稀薄となりて気の毒をしたり。夜文部政務次官を鶴屋に招く。少し機嫌直れるごとし。

十一月二十四日(火) 部長会議、定年制につきて也。

十一月三十日(月) 昼、文芸部にて絵画の展覧会ありし。受賞(ママ)をやり共に昼食す。

十二月一日(火) 医学部大講堂にて「自然科学の研究と日本精神」と題して二時間講演す。

十二月七日(月) 朝十時查閲開始。医学部講堂にてやる。昼食を共にす。午后までかゝる。今回は大に当大学をほめたり。査閲官松村少将。

十二月八日(火) 后四時半より美津野(ママ)へ理学部会評議員達を招き、評議員会を開き、規則の改正をやり、夕食を共にす。余が費用を出す。

十二月十四日(月) 沢井氏に逢ふてよく聞き、直に谷口工撰へ全額補助を乞ふ。八千、八千、六千と三年にのばして補助することになれる様也。

十二月十五日(火) 后二時、部局長会議、定年制に關して也。后五時より工学部にゆき、大学職員懇親会をやる。出席は余り多からず、支那料理を食す。

十二月二十四日(木) 災害科学研究所の規程案等を議するために総長、八木、鉛氏と協議し、晩水会に出席出来ず。昼食を共にして午后に及ぶ。

十二月二十八日(月) 災害科学研究所開設準備委員会午前十時より大学に開かれる。東京より財部大将、波多野中将など来る。午后四時迄つゞく。

昭和十二年

一月八日(金) 夜、理学部職員招待、大阪ホテル。田辺南陵、越海勇藏といふ角力ノ話、漫才、会者卅一人、盛会なり。

一月十四日(木) 午前十一時より災害科学研究所の常議員会あり。昼食を共にして分れる。予算(十二年度)のことに別に相談なし。午后六時より新大阪ホテルに於て小倉正恆氏の災害科学の常議員の招待あり。本日の右の会に八木氏出席せず。

一月十六日(土) 評議員会定年制につきて議す。八代氏議論あり。昼の食事を共にし二時半に及ぶ。その後楠本氏に八木氏が災害科学をやる意志なきことにつきて注意す。楠本氏、八木氏と話してまた来り話す。帰宅七時過。

一月十八日(月) 総長きたり八木氏に余より如何にすべきやと聞きくれといふ。一月十九日(火) 正午八木氏と大ビルに食事す。災害のアドバイザーとなるといふ。四時頃より鉛氏と八木氏と来り、六時半頃まで種々災害科学研につきて協議せり。

二月二十二日(金) この日の大朝紙に大学の停年制(ママ)のこと出で、余の年齢などをもかゝげたり。

二月二十三日(土) 午后一時より医理両学部学生のために日本文化講義あり。穂積重遠法博「人と家と国と世界」といふ題にて極めて該博の話あり。中々話なれて上手也。

二月二十七日(木) 午后教授会。定年制のときに至りて八木氏にたのみて退席す。四時半頃終り、三年の猶予をつけ余に十五年三月迄留任せしむといふ、満場一致の決議となれりといふ。

二月六日(土) 十二時半評議員一同会食。一時より評議会定年制を議す。よく話し合ひたり。その前に各教授会の意向を報告したり。委託学生規程とりきめる。

二月二十四日(水) 夜、理学部会の学生送別会あり。八木、岡部両氏の受賞祝賀をかねて氣勢を上げる。余挨拶。

二月二十六日(金) 午後二時より大学評議会あり。工学部の提議により定年制研究委員会をつくることにする。

三月三日(水) 昼、一般会食。后、教授会。定年制委員清水、岡谷、小竹三氏となる。

三月十七日(水) 午後三時、理学部会役員会あり。予算、雑誌のことなどを議す。

三月二十日(土) 午後一時より卒業学生研究報告会あり。午後六時よりミツノにて雑誌送別会あり。

三月二十五日(木) 前九時より医学部前庭にエルメンスといふ大阪へ最初に来た蘭人医教師の碑を中ノ島公園より移転する式あり。午前十時より卒業式。楠本総長訓辞。文部大臣の祝辞、余代読す。片岡安氏だけ祝辞をよまず演説

せり。

四月十二日(月)物、化の新入学生に訓辞。

四月十九日(月)数学新入生へ訓辞。

四月二十二日(木)大学にて新入学生の宣誓式あり、午前九時始まる。

四月二十三日(金)后二時教授会。理学部会にて新入生歓迎会やる。

四月二十九日(木)前九時、天長節拝賀式。総長に代りて勅語をよむ。大礼服をきて出る。后三時、正田教授神戸出帆につき見送る。

五月三日(月)午后五時より北浜野田屋に大学職員懇親会あり。

五月十二日(水)朝ボートを迎へに天六へゆく。ボート講演あり、医学大講堂「ママ」。昼は新大阪ホテルにて昼食をもてなす。午后理学部へ来り研究視察。

〔この年の日記はこの後八、九月の満州、朝鮮旅行日記を除いて空白〕

昭和十三年

一月二十五日(火)午后一時半、天満駅発理学部学生職員式百名程、石清水八幡宮に参拝す。二時着、二時半徒歩にて頂上着。今本殿改築中。仮殿にて祈禱文を上げ、玉串をさぐぐ。余と学生総代となり。昨年末の科学祭にかはる行事なり。余より当神社の由来、亀山上皇蒙古襲来のときの御祈願のことなど及び八幡様の由来を話す。三時過終る。歩みて降り、また貸切車にて四時過発大阪へかへる。今橋大阪ホテルにて理学部職員を招待す。本年は余興福引を省略す。二十三人位の出席にて事故欠席の人多し。余挨拶し岡谷氏答へらる。

二月五日(土)正午災害科学研究所常議員会開かれ、財部大将来られて議長をせられた。一時半より医学部講堂にて同所の講演会があったが余は出なかつた。

二月十五日(火)五時半、大ビルに着。理学部会の理学部学生送別会已に始まり。今年は余興に朝日のニュース映画をやる。終に愛国行進曲と天皇陛下万歳とをやる。

二月十七日(木)午后一時より教授会。入学に関する件。学位審査、湯川(秀樹)、村橋(俊介)通過。

二月二十四日(木)朝日と阪急とより人來りて国産宣揚大会に理学部より参考品の出品を乞へり。

二月二十五日(金)朝日、阪急の国産展覧会へ参考品の出品につきて八木、浅田、岡部、千谷、呉諸氏へたのむ。

三月十六日(水)朝、大学より電話あり。楠本氏東京よりかへつた、早く出よといふ。直に登校。十時総長室にて八木、鉛氏事務の人々あり。総長産業科学研の予算五十二万円余通過といふ。内二十五万円政府支出、残りは民間の寄附、右は大蔵大臣が認め、追加予算に出すといふことになった。其運動につきて話せり。

三月二十五日(金)十時より卒業式、十一時前終了。理学部を見せる「キクチ、アサダ、ヤギ、ゴ」。

〔眞島は三月二十九日より九月十二日まで歐洲に旅行す。〕

九月十六日(金)本朝、楠本氏東京よりかへり初めて会見、挨拶した。しかし時間少くよく話すひまはなかつた。渡辺事務官から総長、学部長、教授の選挙によらぬ詮衡案なるものを見せられた。

九月十九日(月)楠本氏と話す。産研をひきうけやうかとも思ふがと話した。いやであり、不適任であり、停年であるから無理だが一の家であつて、おさまりはよい。初めをチャンとしたらよせばよい。

九月二十八日(水)昨夜十二時頃、渡辺事務官より電話あり。今日部局長会議を十時からやると。即ち午前十時よりあり。例の文部省の総長選挙制の問題を議す。十二時半頃にすんだ。総長上京のことになつた。文部省「ママ」より早く各大学より具体案を出せといふから「まだきまらぬが上京すと」打電して上京した。

十月一日(土)十時から評議員会、総長選挙問題。

防空演習本格的に行はれ、飛行機より爆弾、毒ガス等の投下を演習す。

十月三日(月)午后三時より理学部創立記念の講演会を朝日会館でやる。余開会の辞をのべる。渡瀬、佐多、沢田の三助教授がやつた。雨天且つ防空演習下であつたが八、九分の入場者をえたのは幸であつた。

十月二十二日(土)朝四時半起、五時半に南口発車の電車にのり込み、六時に大阪につき、大自にて上六の大軌に至る。六時半発車、樞原神宮に向ふ。職員約二百名、学生約八百名、合計一〇四名、蓋し近來の盛事であつた。建国労働奉仕也。種々の式をやり、午前に正味一時間十五分、午后にまたそれだけにて合計二時間半の労働をやる。スキ、モッコ、天秤棒、クワなどを貸

昭和十四年

してくれ地ならしのための土はこび、地盛り、溝をほることなどをやる。余はスキにて土をとる役をやったが雨の翌日とて土がしめり、おまけに粘土にてやりにくかった。此日天気晴朗にて気持ちよし。此の勤行は精神的の修養に資し、国家的観念と農团的気分とを味得するに適するらし。三時に終り四時前榎原発帰宅したるは六時頃なりき。夕食後湯に入りたるときの気持ち甚だよかりき。

十月二十五日(火) 午後三時より総長選挙問題の委員会があった。

十一月十一日(金) 今日余の辞表を総長宛親展書として渡辺事務官に托した。総長上京中なるが故なり。十四日には総長は之を見る筈なり。日附は十二日附とした。十三日は余の誕生日なる故なり。

十一月二十一日(月) 午後一時より繊維科学研究所の第一回講演会あり。理学部大講堂でやる。余閉会の辞をのべた。夜五時半より新大阪ホテルにて桑田氏、八木氏、小林氏、梶原氏、呉氏夫妻と余と十一人会食す。妻は欠席した。それより通俗講演があった。楠本氏欠席のため余開会の挨拶をやった。七時から始まり十時過ぎた。

十一月二十五日(金) 后二時より教授会。余辞表を出したることを告げ、学部長の任期満ちたるにより後任推薦したしといふ。併し推薦内規が未だ確定とはいへぬといふ説出で、其定まる迄待つべしといふことになる。極めて不愉快な状態なるが併し余の辞職には別に反対もなきによりて之は気持ちよし。いづれにせよ一、二ヶ月の我慢なり。京大総長きまりたれば東大のがきまりたらばそのときに文相より例の推薦内規につき説明あるものと信ぜらる。即そのときに学部長教授助教授のがきまるならん。

十二月七日(水) 今日査閲があった。

十二月十五日(木) 産業科学研の相談会があり、総長より今日迄の経過の説明があった。

十二月二十日(火) 午後二時産業研創立委員会。余総長より委員長となれといふことなり。別に反対せず。素直にうけることにした。

十二月二十七日(火) 午後二時より産業科学研の創立準備員会(ママ)あり。何等進展せず。上野誠一氏は余りすまらず。高松亭氏は考慮するとのこと、気は大にある由。

一月一日(日) 十時より大学の式あり。終りて名刺交換会恵済団に行はれた。右十一時頃に終った。

一月十一日(水) 東工業大にゆき、林、上野両氏と会食して要談す。午后三時に理学部へゆき、片山氏にあふて大阪の産業研の人のことを話す。それより所長にあふために日比谷美松にゆく。産業研に援助を乞ふ。大阪に來られたるときに一度來觀を乞ふ。人のことをたのむ。

(*眞島は一月十一日と十二日、東京に滞在。理学部とは東大理学部のこと。)

一月十三日(金) 午後二時より評議員会。通則改正、理学部規程改正。次に委員会にて総長選挙規則の改正を議す。

一月十八日(木) 朝、岡谷氏に電話して后、九時出校。岡谷氏を新大阪ホテルにゆかしめ、田中館先生を迎へ來らしめる。先づ貴賓室にて休み、数学教室、屋上、物理化学の仁田、千谷研究室を見せ、次に物理の岡谷、菊池、浅田研究室、サイクロトン(ママ)、八木研究室、呉君の室などを案内した。正午心斎橋の播半へ岡谷、菊池両氏と共に先生を案内して昼食をもてなした。工学部へゆき風洞と災害科学第二部とを見、次に御勝山の中央氣象台へゆき災害科学第一部をも見た。和達所長居た。先生を新大阪ホテルへ送りおきて帰宅した。

二月二十八日(火) 午後一時半高橋清氏來り、共に大目にて産業研の建築場を見にゆく。今日は快晴にて建築地より金剛山が見え、景色よし。已に建築は大分進捗した。二階へ上り、階上、階下を一巡す。高橋氏と堺市役所へゆき、市長、其他と会見した。高橋氏、道路、水道、瓦斯につきて産業研への連絡の速ならんことを請へり。

三月六日(月) 登校。楠本総長來室。午后四時より理学部会役員会を大ビルに開く。終りて後に五時頃より一同食事す。

五月二十五日(木) 久保田勉之助君と同行して川口の燃研にゆき伴所長にあひて堤繁氏を大阪へもらふことを依頼した。來年四月ならではといふのでそれに譲歩した。尚代りに航空研の山口氏を取つてもらふことにし、それを少し早く取りたいといふことになった。

〔*眞島は五月二十四日より二十七日迄在京。〕

六月一日(木) 午后堺、産研へゆき準備打合せをやる。

八月一日(火) 朝、堤、吉村両氏来る。余堤氏と理学部を出て新大阪ホテルノ「ママ」吉村氏をさそひ地下にて天王寺に出で阪和にのり堺におり、バスにのり五ヶ荘村にており、歩いて産研にゆく。ゆきて身体をふき涼む。理事片岡安、森「平」、木間瀬、中山「太」、庄司「乙」、中根「一」(空白ノママ)、小畑林「安」、伊藤「竹」、山口銀行ノ人など来てくれる。つなやの仕出しで食事し、産研研究員を余が紹介した。食后一寸建物を見て理事会を開く。余も説明。二十六万五千円の協会よりの支出の承認をえた。再び所内を案内し、理事達を送りかへす。三時過から準備打合せを開く。ガス配給のことにつきて営繕課長より経過の報告あり。次会は九月四日と定めた。今日八木氏病気にて欠席。

〔この年日記に空欄多し〕

昭和十五年

一月一日(月) 九時宅を出て、山口助教と電車であった。十時少し前につきしに已に式始りたり。和田教授等と後門より入りたり。勅語の中程なり。恵濟団にて一同うちより例年の如く祝ふ。それより理学部へゆきてから帰宅した。十二時少しすぎ也。

一月十日(水) 産研へゆく。産研のガス工事は今月一杯かゝるらし。途中にてもるところをなほし居れり。水道の管も今裏門のところをつけかえ居たり。

二月二十一日(日) 産研今年度の予算につきて考へる。

二月二十二日(月) 八時半出で九時四十分大阪着。理学部へ行きてから堺へゆく。十時五十分着。堤氏着してあり。早くつきし人と共に食事し、午後二時より会議、予算につきて本年度と明年度につきて話し、本年度の残りを上げた。建築につきて来年度の計画をつげて話し、また電気、化学、燃料の附属屋敷地につきて相談し、実地を見てきめる。終りて一同今橋の大阪ホテルにゆきて夕食す。余の饗応也。出席者二十三名。林龍雄氏出京のため欠席す。余アイサツし八木氏答へた。食后別室にて自己紹介をし研究所の将来などにつきて雑談す。八時半頃散会、九時半帰宅。

産研のガス土曜に通じた。今日点火して見る。

一月二十三日(火) 十一時から部局長会議。海軍々事講座につきて議す。一同昼食、后二時より産研委員会ギ、ガスの出たることを報告し、昨日所員会ギをやりしこと、附属小建物ノ位置を報告す。来年度十月以後三科目増すときには建物関係、精機関係の人を取ることにし、他の人は未定としておくこと、林喬氏を協会より研究員に嘱托することの賛成をえた。建物五百坪につきて営繕係長と相談して案をきめることにした。

一月二十九日(月) 三時頃より楠本氏と産研のことや、大学と実業界との関係につきて種々話す。

二月二日(金) 産研へ行く、二時半つく。小田氏と要談。四時から岡部、雄山村橋氏と茶をのみ五時頃まで話す。研究問題をかき出してもらふこと、文部省の研究費をとること、日常の研究用品を理学部を通じて買ふ方早く納めるならん。理学部へ納める品を自動車ではこび支払は産研でやるのがよからんなど話した。

二月五日(月) 十時卅分着阪。石崎氏来る。産研四小屋新築のこと及来年度五百坪ほど建増のことにつきて話した。后者の三案后よりおくり来た。

二月七日(水) 一時過産研に向ふ。その附近に至りて途わるく、車をおりて歩み、靴泥まみれとなる。産研廊下におくベンチを注文せり。また中庭の設計を見る。

二月八日(木) 渡辺事務官産研建増しの六〇〇坪の図面持参した。

二月十六日(金) 産研委員会を開き新に六百坪の建物を協会に建て、もらふことを議決した。

二月十九日(月) 産研建坪六〇〇坪委員会にて皆其必要を認めたりと告げ、協会へ出すやうにたのむ。

三月八日(金) 林喬氏に産研の辞令わたした。

三月十二日(火) *三葉病院に楠本をたづねた。静臥して居る。夫人と長女の人らしきが看護して居た。余り元気でもなかつた。原因は果して心臓だけか心配に思ふ。

〔*眞島は三月十一日土京、十六日帰阪。〕

三月十四日(木) 一時出で学士院へゆき文部省の科学研究費の委員会に出る。

研究費の削減などをやる。化学は堀場、喜多、柴田、眞島の四人也。五時過までかゝる。今村明恒氏委員長をやり、各専門の人きて居た。理学部長など

をやった人多かった。

三月十九日(火) 二時半より部局長会議。年度末の判任官と雇員⁷⁰以下に月給半ヶ月分出すこと可決。大学新聞のごときものをもっと研究することになった。引きつづき五時より産研委会議。堤氏の待遇の不足は協会よりとし助教授とすることになる。特許につきては種々審議して意見をきき、それを参考として案をつくることにした。六時散会、七時過帰宅した。

三月二十八日(木) 堺にゆく、二時半着。大隅氏と産研敷地の周囲をまはり大和川の堤に上り、浅香山に出で会館の予定地をへて帰所す。それより助手二名の任命のこと、産研敷地の標柱を三ヶ所にたてることなどを命ず。中庭の植樹大に進む。今日はダットサンにてゆく。大自にて梅田へ帰る。

三月二十九日(金) 田中敬氏と共に産研へゆき、図書海外はらひを工学部航空に融通するか(¥三、〇〇〇)又は理学部に(¥一、五〇〇)をするかのいづれかにする。あと¥一、五〇〇は物理で、買った未払のもの、図書を産研に引きつづく(ぐか)にかした。

三月三十日(土) 田中敬氏と再び産研図書海外払のを以て理学部に役立てることを議した。

四月一日(月) 朝日記者、化学工業時報記者等産研の様子をききに来た。産研にて外国払ひ図書の残金を融通して数学の外国雑誌一部を支払ひやり、それを産研の有とすることを議し、そのやうにし来年返還をうることにする。岡部氏と産研の研究の振興につきて話した。来週より毎水曜正午に会食(所員、研究員)することにきめた。

四月六日(土) 十一時より部局長会議。文部大臣十日に御下間に答へる用意に阪大に於ける著しき研究二、三を挙げよといふことに対して議す。理学部菊池、岡部、医、古武、木下、工、中村だけを挙げた。右すみて直に産研にゆきて昼食した。化工時報の記者渡辺きたる。そのまへに大隅氏と売地といふを見る。畑の中にて土地低く好ましくなし。高橋氏の問題のところをも見、今建設中の新道を歩みて阪和線までゆき、之にのほりて見る。橋、暗渠なども出来て居る。それから浅香山住宅地を見た。

四月八日(月) 十二時新大阪ホテルにゆき昭和報公会の評議員会に出る。田中芳雄氏も出た。先づ昼食し、一時半より昨年度の決算、本年度の概算について議した。補助事項も審議に時間かゝり四時になった。角谷の旅費も通り、

菅谷氏のエレクトロン顕微鏡も一年分認められた。伊藤忠氏、産研のクラブや寄宿舎(室内の家具は協会からに願ふといへり)は大林に余より督促せよといへり。又エレクトロン顕微鏡は不二越でも助けるといへり。精密機械のことなど話した。産研へはついに行く時間なくなった。

四月九日(火) 堺にゆき昼食。敷地標、楠木植場、道路などにつきて指示し、村橋氏と話し、三時半帰途につく道にて大隅氏にあふ。案内、特許などの原稿受取った。

会館、寄宿舎、研究室たてましなどにつきて産研から石崎氏と電話し催促した。セメントにつきて大友氏に話さんと思ふ。

四月十日(水) 十一時半着阪、直に産研に向ひたり。けふは始めて会食した。食后講堂で雑誌会あり余クーンの生殖学と性決定素とを話した。

四月十二日(金) 十時出で三楽病院に楠木氏を見舞ふ。血色がよくなった。食欲も出た由、喜ぶべし。種々話して辞し、十二時理研につく。

四月十五日(月) 朝八時四十五分大阪着、直に登学、実験室の人々と要談す。石崎氏来り建増しにつきて修正案を示さる。少し改め予備室をつくりたり。セメントの配給も商工省がやるらし。文部省をへてたのみ共販組合をへるものらし。府にはセメント配給なしのこと也。

小田氏来るにより、来年度の予算につきて同氏の持参したる案につきて議した。

四月十六日(火) 朝六時起床、七時半出で、八時半大阪着。直に産研に向ふ。九時十分頃つく。小田氏と来年度予算につきて検討した。十時四十分発十一時十五分理学部へつく。部局長会きあり。軍教実科教練のことなど種々とりきめた。昼食し二時より産研委員会あり。道路の状況、予算のこと、人事のことなどを話した。四時頃終る。

石崎氏産委に出席説明。

四月十七日(木) 九時半着阪直に産研にゆく。十時到着。小田氏と各部局へ研究費の分配につきて審議し、余より案を出し、それによることにす。昼食一時より雑誌会、雄山氏超音波につきて話さる。其後図書費の分配につきて村橋、小田氏と話し、余より案を出す。呉君と共に大自にてかへり、四時十五分頃大同ビルに吉野孝一氏を訪ひ、産研本年の予算につきて話し建築せんとする新研究室につきて説明す。吉野氏昨年度の六万門を本年度も引きつづ

き認めることは大学の誤解につき説明書の提出を求めらる。山口厚生病院に茂呂氏をたづね、産研の予算につき質問し、及び吉野氏の談を伝へ説明を出すやうに乞ふた。六時半帰宅。

四月二十二日(月) 十時四十分、産研着。中庭出来、池にも水をたゝへた。中々よくなった。今日は八木、高橋、林氏来られぬかも知れず。堤、吉村、呉三氏は来られず。由て会議は五月六日に延ばすことにし、今日は岡部、雄山村橋、西山、内藤氏等と昼食す。その終りしときに高橋、八木、林氏来られた。由て一同にて内藤氏の話を聞いた。可鍛鉄の出成理論の実験の如きものなり。自らの研究也。香阪、山口、上野三氏も来られた。この三君を案内して所内を見せたる後、三君に各助手一名位にて何か研究を始められんことを請ふた。小田氏と予算につき協議した。

四月二十七日(土) 十二時半産研着。協会へ本年度予算経常ヒに更に六〇、〇〇を出してもらふことにつきて要求書を書き、理由を十分のべたつもりだ。五月六日(月) 朝九時半着阪、理学部へゆく。研究室の研究を見る。松田、東京よりかへり楠本氏来月にならねばかへらぬやうに言へり。こまつたことだ。呉君と大自にて産研にゆく十二時十五分つく。会食けふは岡部氏超々短波(「メートル位」)強力のもの、応用につきて話さる。其後、八木、岡部、西山、村橋、呉、堤君等を所長室に迎へて今年度の予算につきて説明し、経費の分配を行ふ。其後、村橋氏、小田氏と化学の昨年度設備費の不足につきて議し、其緩和を計った。構内に道路をつけるに当り、先づ土地の測量をなすべしと主張し、都島工校にたのんだらよかろうとなつた。五時産研発、六時四十分帰宅。

五月七日(火) 朝九時着阪、理学部へゆく。

茂呂氏に産研の予算に関するにつきて話した。来年度請求の部門を分け撰定した。一時佐谷氏来談、三時に及ぶ。主題は総長の健康問題也。要するに大阪へ帰へりは六月下旬とならん、また其後も従来如き活動は出来なしといふ点にして之を次の部局長会ぎにて発表せんかといはる。余は総長の同意をうるまで待つ方よからんといふた。今日はおそくなりし故、産研ゆきをやめた。五時半帰宅した。

五月十日(金) 昼、ロタリーへゆく。大林氏居たから伊藤忠氏の産研寄附建物即ち会館寄宿舎などの建築を早くやうてほしいとたのんだ。理学部へかへ

りて会計課長に産研に講師をおくことにつきて話した。黙認? といふこと也。営繕課長に産研構内の高価測量遂行をたのんだ。以上二件電話也。

五月十二日(日) 午後五時すぎ三楽病院に楠本をたづねた。床の上に起きるといふことだが、見たところ余り改善したとも思はれぬ。困ったことなり。来月には帰阪の由。

(*真島はこの日に上京、十六日には帰阪。)

五月十六日(木) 八時五十分大阪つく登校。十時より部局長会議。来年度予算につきて議す。新規要求のみなり、其他あつた。昼食を共にし、二時より産研委あり。予算のこと、来年度に出した5ヶの部門を説明した。田中氏に精密器械のことにつきて相談した。堤氏今日発令ありしと文部省より電あり。同氏に直に打電した。

理学部学生が総長が余り軍部や資本家に迎合的だといふた(卒業送別会にて)と八木氏に聞いた。

五月十八日(土) 正午産研へゆき昼食。副食物殆ど野菜のみ也。一時半船橋文部政務次官来る、案内す。大高校長、上田化学教授などついできた。船橋氏は阪大の出来るときに好意を有した人なりとか、京大出の堂上華族也。同氏を案内して后、かねて招待したる理学部職員達をまたしおきしを三時頃より案内した。四時頃終る。皆一応講堂に招きて産研の地理等を話した。天気よく皆よろこんで居た。ケンモチ、肉桂モチを一人2ヶ宛つゝみて御馳走した。

五月二十日(月) 正午船橋政務次官理学部へきたる。一同昼食した。洋食にて上等也。午後二時産研着、大隅氏居た。協会の吉野氏三十日に理事会をやるから余に出席を求む。又七月に百人位をよび産研を見せたと吉野氏いふから其ときは講堂で会をせんと思ふ。五時今橋のつるやにゆき、大学部局長、事務の渡辺、茂呂、白江三氏と右□大校(高カ)、葉山外語校長がきた。

五月二十二日(水) 産研へゆく。河盛堺市長以下、堺の町村長が二十人ほど産研参観に来た。

五月二十四日(金) 二時半産研着。堺のさきの浜寺の町会議員達が二十人ほど見物に来た。二十二日のときのやうに案内した。右了りて立ち六時半帰宅した。

五月二十五日(土) 今日工学部の先生達十三人来る。学会などにて差支へ、きたる人減じたるなり。理学部のときの如くに最初余より説明し、次に研究

室を案内した。茶菓も前回と同様也。

五月三十日(木) 十二時五分まへに大阪クラブの産研協合理事会へ出た。伊藤忠、成瀬達、森平兵衛、古田信之助、坂田、木間瀬氏だけ也。之に吉野氏也。余は小田氏と茂呂氏とをつれて行った。昼食后理事会皆忙しき人にて吉野氏の説明にて承認となり、来年またこんな協会の負担とならぬやうに軍部に後援でもえられるやうに運動することにした。

六月四日(火) 午后二時過から産研へゆく。三時頃つく。林喬氏にあひ、共にゆきたり。同氏の設備三万円余になるのでおどろいた。実状をはなし壱万円に切りつめることにたのむ。

大隅氏の談に楠本氏快方になり、二十三日にかへるとぞ、そのとき大隅が上京して世話する由。セメント八月迄来ぬために少くとも建物もおくられるとか。五時半産研を出で六時四十分頃帰宅。

六月五日(水) 午后一時過出で小田氏と自にて産研にゆく。途中大丸に立寄りパン、ベントウ、サンドウィッチなどを買ふ。二時過産研着。雑務を見、勉強す。牛乳二合、ベントウなどにて夕食す。中庭の草を少しむしる。蚊はまだ来らず。九時過ベッドに入る。静なる故によくねむれた。

六月六日(木) 朝五時半起、七時頃牛乳持ちきたる。パンにて軽食、八時頃中庭の草をむしる。図書室を見などす。雑務所理。こゝにて昼食す。器物少しよくなりたれば気持ちよろし。

六月八日(土) 朝五時半起、身支度す。朝食牛乳二合とパン也。食后敷地内を遠く北方へ散歩す。道場の留守人、麦三、四百石出来るといへり。楠をうへたところにも草はへて茫々たり。朝の内講演原稿七頁書く。林喬氏の室のキカイ、器具を村橋氏より借りて少しくすへつけた。午后二時頃より医学部の教授十三四人来られたり。今日は医学部の職員に見せる約束の日なり。今日はサイダー、ケン餅を出して歓待した。案内も中々丁寧に行った。設備も少しづつとよんでゆくためもあらう。谷口腆二教授も来られた。よき人なり。中田教授も見えた。大自にて近くの駅まで送迎した。

六月十日(月) 朝十時半着飯、理学部へゆく。香阪氏給仕位の少年ある故、之を入れて産研のために無煙炭の脱灰分を研究してカーボンボールなどの原料となさんといふ。大によるこぶ。尚上野、山口兩氏にもたのむやう□□ふた。十二時四十分過産研着、直に食事す。会食日也。食后雑誌会、西田氏のX ray

による研究の話ありたり。林喬氏と話し、森氏を研究生囑托といふことにした、無給也。石崎氏来られたれば道路のこと建築のことなどを話した。セメントを商工省に運動する必要があるものゝ如し。昨年の鉄と同じやうだ。大隅を堺市役所におくりて理学部により実験を見る。六時帰宅。

六月十八日(火) 十時十五分着飯。丸沢氏に電話し、二十日理学部にてあひ、産研へ案内することにした。十一時、石崎營繕課長来り、伊藤氏の寄附建物の本極り図面を示した。すぐ始める由。十一時十五分部署局長会議に出る。六月特別賞与が出る由、十五年予算配当のこと等なり。一時半頃余は早退して研究を見、二時小田氏と共に産研へゆく。小田氏は府庁よりセメント146袋切符をうけたりとタンクの基礎用也。高島屋にて食料を買ひ込む。産研に和達清夫氏より電話にて土曜に参観したといふ。電気関係の方、同日皆留守也。故に月曜にかへてもらふ。

六月二十三日(日) 本日特急富士にて楠本氏帰宅す。布施氏つきそふ由。

六月二十五日(火) 十時半着飯、直に産研にゆく。

午后二時頃大林組の人きたり伊藤氏寄附の会館と寄宿舎との繩をはりたるところを石崎氏と検分した。建物の床のたかさ、家屋の高さなどをも聞いた。それでよしとして早く建てることを乞ふた。

七月一日(月) 賞与産研より一ヶ月分の俸給と同額出る。

七月十日(木) 朝、芦屋の楠本氏宅をたづねる。阪神の芦屋駅から歩む。書室に床をのべてねて居て話した。古武氏を講師にするが年限をつけるか否かといふことであつたが余は年限をつけぬ、少くも当分はつけぬといふ説を持ち、そのやうにすることにした。

七月十一日(木) 十時半着飯、直に工学部にゆく。十一時二十分頃仲井間文部参与官来る。医学部長、病院長などついてをる。共に参観した。一時食事す。小竹氏理学部長代理に来た。産研にゆく、二時着。こゝにてゆつくり見学する。四時頃までかゝる。茶菓出る。古宝といふ菓子を出した、体裁よし。五時半頃理学部へかへる。

七月三十日(火) 朝九時半着飯、直に産研にゆく。書類に捺印するも多し。建物大分進行した。此頃研究室の方は休みにしたが、堤、村橋兩氏は居た。堤氏は吉村氏のことを話し、村橋氏は田村氏のことを話した。また小田、大隅兩氏とは研究費不足の分は簡単に理由を書きて小生返出してもらひ、小

生に於て決裁することにする。金はあるが、それは用途がきまりあり。併し中々つかひきれず残りあり、納入おそきため也。一時之を流用しておき、後に理事会の承認をへて支出を請ふことにすることにした。

七月三十一日(水)産研にゆき二時十分頃つく。新道出来て早くなった。

八月一日(木)朝十一時七分着阪、部局長会議。最近の総長会議の様子を八木氏より報告ありたり。要するに専門学務局長が大学の予算を増し、自然科学方面の学生大学院を増し、研究費をも増さんとの意見なるよし。

午后二時より産研準備委員会。八木氏年四、五万円を出してもらひ大に研究せんといふ。但し同氏の陸海軍関係事項也。余は理事会は承認はするだらうといふた。

八月二日(金)朝九時半着阪、直に産研にゆく。大隅氏居た。浅香山にゆき会館建設地を見る。明日地鎮祭といふゆへ也。けふ松の木を切り居たり。また材木を運びきたれり。

十二時二十分頃ロータリーにゆく。

吉野氏と産研の来年度予算には大に奔走せんと約した。科学振興益盛となりたれば也。

八月三日(土)午后一時頃産研に行く。鉛石もきた。石崎氏は早く来て居た。

二時半過、浅香山現場にて地鎮祭あり。附近の神社の神主がきてやつた。

八月八日(木)朝十時半着にて出阪、久保田権四郎氏と同社の工場長や専務の人と谷村氏と産研へゆく。先づ工場を案内して種々話した。久保田氏は此際大に運動して政府より建築や設備に金を取らねばいかぬ、機を逸して重点主義とかにて他へそれでは何も出来なくならぬかといへり。兎も角、今や重大の好機だといへり。社の人々は堺の工場に用ありとて去り、谷村氏のこった。同氏に堤氏を紹介した。谷村氏は当分九州にて人をさがし研究をし、そのスタッフをもちてこちらへ移りたしといへり。またこちらにてやるならば五十万円では不足、二百万円位のものが必要だ、また早稲田の石川氏の鋳物研究所が最もよくなって居るからそこよく連絡してやりたしと。同氏を産研所員を嘱托することにした。併しそれは人をよく捜し九月中旬以後に確なる返事をするとのことであつた。

八月十日(土)朝十時半頃出で、芦屋に楠本氏をたづねた。依然として二階の書斎に床をのべてねて居た。まだ階下へは降りず、湯にも入らぬが、室内を

歩むことはよく出来るやうだ。米井知事に礼に行つたこと、産研の近状、及び久保田権四郎氏や九大谷村照氏のことを述べた。産研のための運動については文部省などに対しては八木氏と、寄附金につきては吉野氏と相談してやつてくれとのことだつた。一度吉野氏をつれて来やうかとも思ふ。

八月十二日(月)産研に講師及副手をおさうることになりしを實行することゝなつた。

八月十九日(月)朝九時半宅を出て十時過芦屋楠本宅をたづねた。昨日湯に初めて入りし由、また階段を昇降したと。戸山氏の診にては心臓血管が細くなるものならんとのこと也と。産研につきては金を集めにくいから浪費を極力つゝしみ(協会の金の)出来れば谷口の金をつかひ協会の方はいつでも産研のためにつかへるから残しておく方がよいといへり。余は協会の金もつかはぬとドシ／＼仕事は出来ず、結果が出にくい、金もようつかはぬやうでは金のあつまりも悪いことになるだらうといふた。楠本氏は金が無駄につかはれるやうでは協会に金をあつめてくれなくならうなどいふた。併し之は疑問だと思ふ。楠本氏は伊藤氏の寄附の会館等は伊藤会館といふべしとの意見也。また寄附建物には其ことを記したるタブレットをはめよとのぞめり。

けふ産研へ古雑誌寄附した。

(*伊藤会館とは仮りにつけられた名前であつた楠本会館のこと。)

八月二十三日(金)大自にて午後二時半産研につく。けふ朝理学部に高橋、西山両氏より新設金属部門説明書の原稿を受取つた。之と燃料関係の分とを産研にて打写させる。堤、村橋両氏と今度新に出来る三棟の方へ化学、燃料とがひきこし、精密器械も其一に入ることになるときめ度しとのべ、其建物内の模様、電気配線、水、ガスの位置、間取につきて考へるやうにたのむ。

八月二十四日(土)午後二時頃大自をやりて吉野氏を迎へ、共に楠本氏を芦屋の宅に訪ふ。楠本氏今日は少しも横臥せず椅子にかけて一時間半ほど話して主として産研の予算を今度は大に運動してとらふといふこと、寄附金を集めること、特許を如何にするかといふことなどなり。十月末になりて楠本氏出られるようになりたるに産研に大阪の財界人を集めて見学させやうといふことなど也。道路につきて話したところ、前知事池田氏と前土木部長とに礼状を出してくれと楠本氏いふた。

九月十八日(水)十二時に小田、大隅両氏と大自にて産研にゆく。一時半にな

りて昼食した。大毎記者来る。現状を話し、伊藤忠氏の寄附建物を見にゆく。已に基礎のコンクリートは出来て居り、今月中には上棟するといへり。

九月二十七日(金)朝六時起床、身支度し、七時半牛乳にて食事、八時浅香山、伊藤会館建築地迄散歩する。小田氏より産研一覽原稿を受取る。要を得て居た。協会の吉野氏に産研へ実業家を招待する日取を相談した。

十月三日(木) 部局長会後、産研準備委員会を開いた。余、近頃の建築進行状況を話した。また今度出来る産研の講座の担当者などを説明し、村橋氏を教授にすることにつき了解を求めて之を得た。八木氏産協より年五万円宛五年間特別研究費を得たといふ。且つ已に之を直接吉野氏へ出した、且つ理事長へも書面を出したといへり。我は顔(ママ)なる遣り方かなと思へども何も言はず。皆も賛成した。右終了後余の室にて田中氏より十三万円精密器械の設備入用とのこととなりしが差当り十万円と言ひ、あとは本月中に金属(化)と高分子の方とを見合はせて出すといひおおく。呉氏来りて応化卒のものをとるにつきて待遇をとへり。産協の研嘱として七五円出すといふた。

十月四日(金) 二時頃石崎氏と共にダットンサンにて産研にゆく。村橋、西山両氏と石崎氏と共に新築の研究室の模様替について談じた。両氏の希望通りになる。唯附帯工事を一部設備にまはして金額の多くなるのをさけることになった。右終りて村橋氏に村上氏のことを話し、来年更に同氏きてもらふとして同氏の設備費は若干三万円位つかふことが出来ると話した。西山氏にも金属の設備の不足を今回二万円以内位考へられたといふた。之れで大体片づいた。

十月十日(木) 朝九時渡辺事務官来る。共に歩みて文部省にゆく。専門学務局長永井氏に逢ふ。井原課長もやつて来た。産研の来年度予算につきてたのむ。企画院に行きて重点主義といふことについて聞くが如何といひしに、企画院には行かぬがよし、今あそこでは大学につける研究所を大学から放さんとして居る。そして大阪の産研では協会も大学もそれを希望して居るといふて居る。それに対して文部省では今、大に争ふて居る。此際大学と協会から書類を出してくれれば大によいといへり。渡辺氏協会には一、二そのやうな人あらんも大学にはなし。協会でも政府が建築や設備に金を出さぬから企画院にゆけば可ならんと思ひてのことならん。由て来年は是非設備建築に少しでも出されたしといへり。午后有光学務課長に行き、産研の官制につきたのんだ。

企画院関係のことものんだ。

十月十四日(月) 九時文部省にゆき、柴沼会計課長に逢ひ、産研の予算につきてたのんだ。

十月十五日(火) 午後一時廿分頃、渡辺氏と大自にて芦屋、楠本氏宅へゆく(楠本氏は昨日初めて大学へ出た由、階段の昇降にこまる由にて病院の新館へ室を設けたる也)。八木氏已に来て居た。鉛氏は鼻の中に何か出来たとて休み居る由。総長初めて自分の病気の経過を詳述した。また大阪実業家を大学のことと共に力(ママ)してもらつた要領を話した。産研の企画院に關することは渡辺氏より取り敢へず十日に余の申した通りが大学の考へだといふことを局長に電報し尚廿三日に渡辺氏上京することにした。

十月十九日(土) 吉野氏を産研につれてゆき、そちらを見せた。実業家をよぶのを来年にするにことにした。車中、片岡、吉野氏と語りて矢張り両氏は企画院にくつつけん并希望せるを知つた。両氏は大学とはなれても企画院のはからひにて大きな中央組織が出来ればうまく行くと考へ居るものゝ如し。余はそこに入るべき人は大学より取らねばないといへば、十年位かゝりてやるなどゝ片岡氏はいへり。吉野氏はこゝ二、三ヶ月様子を見なければ予算などとうなるかわからぬ。即企画院の計画がうまくゆかねば産研の金はとれないとの意見也。吉野氏は八木氏の研究費もそのなき(りカ)行きをまちてきめんといへり。

十月二十一日(月) 十二時少しすぎ産研につき一同と昼食した。十一月三十日に講演会を産研でやることにした。又特許を産研でとることにした。已に若干とるべきものがある。又産研の研究報告は大体は別刷集とし、独自の出版をもなすこともあることにした。

十月二十三日(水) 朝九時五十分大阪着、理学部へゆく。十一時半石崎氏と大自にて堺産研へゆく。そこで共に昼食してから、構内の道路及ブルの位置を考へて之を定め、先づ中央に三間の道路を寄宿舎に向てつくることにきめた。それから会館と寄宿舎の建築場に至る。村橋氏、西山氏と話した。西山氏四万八千円の器械の注文を申出でた。電子顕微鏡の一万五千円を他日にゆづること、疲労試験機、オシログラフなどは已に工学部や産研にあるから如何かと思ひしが再調せられんことを乞ふた。高橋といふ堺脳病院長、産研の人のため貸家十軒をたてることを承諾した。林、大隅両氏が往て話したの

である。家賃三〇―五〇円也。

十月二十八日(月) 十二時産研に着し一同と食事を共にした。后十二時半より協議を始め、産研記念講演会を十一月下旬にやることにきめた。電気二人(内一人林君、金属二人、化学関係三人やつてもらふことにし、一時半より四時迄とし、来月一日迄人と演題とをきめてもらふことにした。次に特許は研究所でとるのを原則とすることにした。次に別刷集を一年一回出し、他に独自の研究の出版をもやり、此は其時々に出すことにした。

十一月一日(金) 朝八時三十分着阪、直に大阪駅に至り、菊池文部次官の来るを迎へる。八時五十分着きたる也。総長の意をつたへて産研を見て欲しいといへるに幸に承諾された。由て直に大自にて余と渡辺氏と同乗してゆく。茂呂、八木氏等別の大自にてきたる。車中にて大体の説明をなし、尚現状(場カ)にて研究状況の視察と広き土地とを示した。十時半発し理学部の前を通りて病院新館に案内し、楠本総長と会話し、産研につきて尚話した。昼食を共にした。鉛氏、佐谷氏、西尾氏なども出た。一時頃次官は教育勸語に関する講演会に行けり。

十一月十八日(月) 永井専門学務局長来学初め理学部に迎へ直に病院に楠本総長をたづねた。余は一度理学部にかへり、工業会の吉野氏をたづね、谷村氏の件を話した。あちらに一万円でバラックをたてるのは難色ありしが、それもまたこちらにてやるにしても全体の計画をさきにて、其一部として二十万円なりまたバラックも出して欲しいといへり。理事会にかけるため也。産研にゆく。一同と昼食した。高橋、西山両氏に谷村氏のことを話した。なるべく近き内に会合して相談してもらふことにしたと思ふ。四時頃永井局長産研に来たる。直に化学の方から案内して見てもらふ。相当充実したのに感心して居た。

十一月十九日(火) 上野氏青氏といふ無機の人を産研に推薦した。また氏の研究の一を産研のものとしてもよしといへり。

十一月二十一日(木) 朝、浅香山の方の会館寄宿舎などの建築を見にゆく。よほど進捗し、年内には出来、壁の上塗りだけがのこる位にならうとの事であった。

十一月二十二日(金) 朝十時十五分頃着阪、理学部にゆく。更に総長室にゆき、今日産研講演会あり、其通知を余の名にて出し総長名にしなかつたことゆ

きちがひを了解求めた。然るに講演会を知らなかつたのは不行届であつた。大隅がこの頃不熱心なるためと思ふ。呉氏がそこに居たので共に大自にて産研にゆき、そこにて共に昼食した。吉村氏来て居た。同氏の機械の資材を買ふことにした。「一万五千円位」。古武氏も来た。一時半開会。余開会の挨拶をした。講演は七人で高橋氏閉会の辞をのべた。会合者、外より来りしもの百五十人位、会場は殆ど一杯であつた。四時に終りてから二隊にわけ、高橋岡部両氏で案内せられた。先づ盛会だつた。

十一月二十六日(火) 朝十時頃文部省にゆく。専門局長も学務課長も会議中で会計の予算課に茂呂氏が居た。同氏の談に本年の予算査定は中々六ケしく、大阪は工学部の銜接だけが通り、京都の繊維学科が通つたとか、産研の講座添加は今のところ六ケしいとのことであつた。

(*眞島は十一月二十五、六日上京した。)

十一月二十七日(水) 大隅氏きた。十二月二日夜、産研懇親会を堺丸三樓でやることにした。会ヒ三円ときめた。不足は接待費より補ふ。

十二月二日(月) 十一時より病院新館にて部局長会議。楠本氏出席す。渡辺事務官感冒にて入院せり、肺炎にならぬやうに注意せりと。学友会改組につきて話あり。本大学にはまだ大学一般の学友会なし故に改組でなく、新設ともいふべし。楠本氏四方拝、紀元節にはまだ出ぬ方がよからんと余は注意した。丸三樓にゆく。全部で十七人来た。少しおくれ香阪、山口、上野三氏はきた。八木氏は最後にきた。林喬氏の大政翼賛会参与となつたのにつきて話が湧き、また八木氏が評議員会にて理学部が新態制をやるといふことにつきて了解をえたと話したことも話がはずんだ。八時散会。電車でかへつた。

十二月九日(月) 余は文部省にゆく。有光氏にであつた。産研は来年度3講座通り、工科の銜接はつづれたとのこと。

(*東京にて。)

十二月十九日(木) 林喬氏きたり産研の新しき建物十七日棟上后風強く吹きて倒れたといへり。鉄物の買入れにつきて奔走せんといへり。そのまへの下調べも手つたふといへり。

産研にゆく。道路大分出来た。風で倒れたところも見た。

十二月二十三日(月) 朝九時四十五分頃宅を出で、梅田より地下鉄、阪和によりて十一時四十分頃産研に着く。けふ始めて少しも自を利用せず。昼食会し

産研のマークを譲し、大体の案を定め、生駒にたのみて図案にしてみらふことにした。また特許弁護士の手数料なし、成功のとき百円といふことにして話をしておくことにきめた。

昭和十六年

一月十二日(日) 九時過宅を出て、十時頃楠本氏の宅へつき、産研のことについて種々相談した。谷村、三ヶ島のこと促進すること、片岡氏などの産研に対する案は多分つぶれたらうといふこと、企画院のすることについて上京注意してほしい、また文部省へ官制促進をしてほしいといへり。

一月十三日(月) 文部省へゆく。伊藤勇学務課長に逢ふ。産研の官制促進をたのみ、且神戸女学院の校長を早くきめることをたのんだ。企画院の研究

次で永井局長も来たから会い、同じことをたのんだ。企画院の研究所統一はもはや不可なるを知ったが、何かよき方法で統制を考へて居るやうだと言った。

〔*眞島は一月十三日から十六日まで上京。〕

一月十八日(土) 朝十時前宅を出て直接に産研へゆく。

堤氏と話し学士院へ千円研究費増額を依頼することにした。産研に聴講生をおくことにつき電話で事務官と話した。官制につきても何か話あり。明日更に協議することにした。

一月二十日(月) 朝十時十五分理学部へバスでつく。直に渡辺事務官と産研の官制について法制局の質問のありし点について考慮して返事を写真電送した。電車で産研へゆき十二時半ついた。一同会食、林喬氏も高橋氏も来た。産研マーク、依托研究生のこと、林氏翼賛会庶務部長たること、大西氏をやめさせること、そして養生させること、産研マークのことなど協議し、尚鉄の配給につきて運動することを議した。

一月二十四日(金) 夜、渡辺事務官より産研官制改正と任命出たと通知して来た。

一月二十五日(土) 本朝の新聞に産研の教授任命が出て居たので十時過着て理学部へ行く。

一月二十八日(火) 正午医学部会議室で災害科学研究所常議員会があり、それへ出た。財部大将、小倉正恆、坂田幹太、木岡瀨策三氏など皆来た。先づ食

事をしてから議事に入る。研究報告、予算審議あり。今后二年後にこの研究所を如何に処分するやにつきて定めるための小委員会をつくることにし、その指名を所長に托することにした。理学部へかへり大隅氏にあひ、所員会議につきて相談した。

一月三十日(木) 朝十一時頃理学部へ出る。小田氏東京よりかへり商工省の模様を報告せり。ガス鉄管の方は殆ど配給不可能とのこと、セメント管でやるかヤミでやるか、水道と暖房の方はやるとのこと也。

二月一日(土) 朝九時半宅を出て十一時十五分浅香山へつきたり。会計のことで小田氏と話して増設三部門のために保留した予算の分配について考へた。金が余れば協会からの十一万円は全部取らぬやうにすればよい、また来年からは政府からの金の分配と特別研究費からの分配とを別途にすることにしやうと思ふ。

二月三日(月) 産研へゆく。昼会食してから所員会議をやる。其前に三戸氏の極超短波発生の話あり。二時頃から会議した。第三回目也。定員増加の官制出たのでやった。上野、香阪、古武、呉氏なども皆来てくれた。厚生省の割当の工学関係学校出身者の需要人員のこと、研究費を他から取ること、報告出版の件、産研のマークの件などを議した。林龍雄氏無線装置許可の件、林喬氏鉄資材運動の件報告あり。余は経費分配の件につきて話した。それから有志の人と寄宿舎やクラブ、研究室増設工事などを見て、岡部氏と八木氏が協会へ研究費請求の件を話し合ひ、石崎氏と研究室増設の件などにつきて話した。

二月六日(木) 理学部へかへり、八木氏と同氏の経年五万円の請求につきて話した。気焰万丈当るべからず。総長と正反対の意見也。今度の理事会に其通過を計りて見やうと思ふ。また右は経常費とはちがふといふこと也。兎も角余り自信強すぎ余にはむしろ不快にさへ感ぜられた。

二月二十六日(水) 大自にて大隅氏と産研へゆく。自にてクラブハウスの方へ走りゆきて見た。落成した。山上まで途ついた。

三月二十八日(金) 大自にて産研に十一時着。種々用事につきて相談した。大隅氏、そごうの〔空白ノママ〕氏と協議した。明日右に關する五委員が集まることにした。

四月十四日(月)朝十時宅を出で十一時四十分産研へつく。今日より昼食支給なし、米の配給なければなり。小田氏協会に出す予算につき、茂呂氏と相談し案をつくりて出し、本日向ふにて努力せることを述べたり。八木氏の研究費の要求の取扱ひ方につきは所長を経ずして出したことはよろしくないが理事會にて説明した方がよからんと思ふ。理学部へ五時頃つき、大隅氏とまたこのことにつきて協議した。

四月十五日(火)朝三時半頃尿におきてから八木氏要求の処置につきて熟慮しねむらず。遂に三万円五ヶ年継続に余が査定し初年度は研究所経費より二万円捻出して五万円とすることにし、同氏が一度会よりさげて余の手より出したことにして今度の理事會にて追加予算として提出することにした。かくせざれば所内の平和保たれずと考へた。由て九時半會計課長と相談して其方針にて進むことにし、十一時四十分頃総長を説き承諾をえたられば十二時半頃吉野氏を大阪クラブにたづねて之が了解と援助とを求めた。そして同氏と大自にてかへり大同ビルに同氏をおくり理学部にかへり食事した。それから八木氏に右の趣を話して了解を求めた。かくて準備全く成りたれば大阪クラブに三時半からゆきたり。余は説明役になつた。茂呂氏、小田氏、大隅氏も出た。総長は理事として出て居た。報告、予算等を議し、最後に追加予算として右の八木氏を通した。八木氏なら軍から全部出すべきだといふ人多くあり。唯山内氏は八木氏のいふ通り五万円出してもよいではないかといへり。之にて余の痛心も取れ去つた、万歳。理学部に立寄り八木氏に名刺にかきて氏の室におきて出で帰宅した。

四月十六日(水)文部大臣橋田氏来るといふにより迎へに朝八時四十分頃駅に行く。いつの間にか駅長室に行き、皆おどろく。由て駅長室にゆきて面会した。大臣は生魂社に詣し稲田氏より茶をよばれて、産研に着す。余と総長は先に産研にて待つ。十時十分前頃に着す。由て本館を限なく案内す。十時半立ちし。工学部にゆき風洞を見、無水アルコホルの製造を見、理学部に行きサイクロトロンを見、微研にゆき谷口教授の標本とラヂウム貯蔵の場所を見た。それから医学部で昼食、大学の評議員も出た。

四月二十二日(火)二時半頃より産研委員会あり。余、理事會のことを説明し研究所の政府よりらふ予算、協会よりらふ予算、協会の資産を説明し、年度の増加三部門に対する余の案を述べて承認をえた。即雄山氏首譽、谷村

氏製治、村上氏有合也。別に青氏セメントは谷村氏兼任なる故に教授にとれることになつた。尚建築委員会として元の委員会に營繕、會計兩課長を入れてやることにした。

四月二十八日(月)けふは専任の所員集まれり。昼食后本年度の予算を分配することにつきて余の試案を示し、之に一同異議なし。二時半より大林組の人員、營繕課長、小田氏と集まりて会館の家具、小田氏が高島屋に注文したものを大学の他部へうつし、こゝには大林組の人が考へたる山の家にふさはしきものをに入れることにやり直すことにした。

五月九日(金)大阪(ママ)理学部へ着きしは十一時なり。大隅氏にあひて要談し、共に楠本総長にあひにゆく。ホルモン注射をやつて居るところだつた。高橋清氏への八万円の寄附金願書を示したり。大いによろこんだ。

五月十九日(月)十二時に総長室にゆき部局長會議に出た。十六年度予算分配実行予算、学風會改組のことなどを議した。昼食を共にしてから四時半になつた。

五月二十日(火)大自にて林龍雄氏と産研にゆく。二時半を過ぎて文部省の伊藤専門学務課長来る。医、理、工を見、産研に来る也。よく案内し四時半頃去つた。

五月二十六日(月)朝日新聞社にゆく。楠本総長、八木、鉛、佐谷三学部長と余と五人招れた。余は三時といふに三時四十五分位になつた。新聞に対する科学の常識的なる意見、注意、希望などを述べしめられた。上野社長が出て居た。村山氏も一寸出た。社員も沢山出た。六時頃になつた。それから北浜の花外楼へよばれて夕食の御馳走になつた。総長と鉛氏とは他の用事があつてそれへ出て、こちらへは来なかつた。

五月二十八日(水)大朝記者きたりて技術院のことにつきて意見をきくといへり。余はよきこと也、大学から研究所を引きはなさずして唯統合連絡して研究の便宜を計るならば大によろしといふた。

六月二十日(金)理学部へゆき、直に病院新館にゆき、部局長會議に出た。楠本氏が総長会ギに出た話、御前にての言上のこと、其他の話をやつて時間がつぶれた。来年度の予算の提出するものゝ説明、科学研究費の分配などの話があつた。三十日に評議會をやることになつた。

七月八日(火)朝五時半起。身支度し朝食す。産研の設立由来記、大隅氏のも

のを改訂した。

堺筋有恒クラブへゆく。けふは藤直幹氏の「禪と武士道」といふ題にて鎌倉、足利時代に禪が支那僧によりて伝へられたることを述べらる。併し低声と早口にて聞き取りにくかった。

七月十二日(土) 強雨の中を九時頃帰宿したら谷氏より呉君応召の電あり、驚いた。

(* 眞島は七月十二日より十四日まで滞京)

七月十三日(日) 朝、堤氏召集された電がきて驚いた。堤、呉氏両氏に電報し更に大隅、小田氏に電して運動すべく命じた。

七月十四日(月) 朝大隅久留米師団へ堤氏のためにゆくと電が来た。

けふ工学部学生の満州で実習は土曜日に皆取り止めの命があったといふことを牧氏から聞いた。日露開戦の前の約四十年前の情景を感じるものがある。

七月十五日(火) 午后上中氏堤氏来る。入營のことにつきて話した。樋田氏も召集されて居ることを知る。

七月十六日(水) 産研へゆく。大隅氏かへりきたる。林龍雄氏のところの内藤氏を召集されたのを運動して之を免除してもらつた由。それには余の名をつかつたとのことであつた。謝状をも余の名で出す。西山氏助手の件で村橋氏亦同様の件で話があつた。谷氏もきた。

七月十七日(木) 産研に向ひ三時半頃つく。堤氏帰還の電報がきた。皆よろこぶ。

朝近衛内閣総辞職の報あり。夕大命再降下。

七月十八日(金) 病院新館の総長をたづねた。吉木学生課長が居たから外でまち、共に金曜会にゆきたり。けふ会にて吉野氏二十六日に産研協会の理事会ある故、余にも出るやうにいへり。また会館に入用の額、掛物などの寄附をたのむから書き出せといふ。また二十九日に工業会の午餐会を理学部でやりたしといふ。総長や八木氏は承知したやうだつた。それで大隅氏に之を話した。また大隅氏は産研の敷地にとて協会が買って持ち居る東部の地所内に方五十mを陸軍で使用するといふて来た由、高射砲をすへるためだとのことだ。

七月二十二日(火) 朝八時過産研を出で東側を散歩、軍用地として徴用せられたる場所を見る。已に畑をつぶして地ならしが出来て居た。東北の方の門から入り、山上の会館に入りて待つ。大隅氏来るにより、額、置物などの大き

さ、品数などを書き出す。研究所にかへり伊藤忠兵衛氏に対する感謝碑文を訂正した。

七月二十六日(土) 朝十一時過、理学部につく。大隅氏と共にやるやに行き産研協会の理事会に所長として列す。昼食を共にしたるのち理事長小倉氏の後任に古田氏を推し常務理事に伊藤忠、及竹西氏とも一人誰れかを挙げることにした。理事評議員改選も大体旧の通りとする。それから現況報告をやる。建物、人、研究とわけて簡単に説明し、研究としては唯特許を主とし之に軍関係の秘察(密カ)特許を示した。特許につきて研究所の規程をきめることが重視せられた。依託製品も規程が入要だ。次に産研クラブに置物、掛物などの寄附を乞ふことにした。大分出そうであつた。二時頃散会、また理学部へかへり南海鉄道へ出す浅香山停車場増加要請の手紙を書いた。林龍雄氏已に鉄道局へゆきて話し、本日より和歌山ゆきは普通をとめて居る由だ。産研の未来の図を想像して見た。

七月二十八日(月) 九時十分宅を出で梅田から大自で工業会に吉野氏を迎へ、更に呉羽紡に伊藤忠氏をむかへて産研に向ふ。十時半頃つく。先づ山上のクラブに案内した。こゝで昼食をやり「松田晴の料理」、そこ「□木」、大毎「小林」氏等もきたり、下で昼食後二階で暫時展覧会の話をやる。それから浅香山のクラブ附近を一寸見、寄宿舎に上りて見、研究所を一巡してもらひ貴賓室に少憩してから大自でおくりかへした。

八月十八日(月) 九時十分頃宅を出で十一時前産研へつく。昼食を共にし、時局につきて話した。二号館、三号館への移転は大分すゝんだ。ガスは二、三日中に通じる由、夕方現地を見たが、器具を入れると狭苦しくなりてあつくるしかつた。講堂には兵隊廿三名をとめて居る。けふは産研にとまりしが夕方より無風、空かすみ蒸あつくなつた。

八月二十日(水) 十二時少しまえ、ソゴウ百貨店にゆく。大阪工業会午餐会をやつた。八階特別食堂でもり切り洋食に氷水、コーヒールなど。食后吉野氏今の午餐会には米を状袋に入れて持参することにすといへり。八木氏科学と技術とにつきて話し、阪大の性格が大阪的なるを指摘して其独自の性格をもつために人文科学の方の学科の必要を説いた。産業科学展覧会を見る。七階には会社の出品、六階には産研の指導出品、后者には所員も中々骨を折つたが、品物を盗まれはせぬかと恐れる。市の電気科学館が第二会場で電気の方

はそこにあつたが、それには行かず。

八月二十二日(金) 東風が出て、少しは涼ぎよかつた。山のクラブまで散歩した。繊維科学研究所設立由来を叙した。大隅氏の文を訂正した。楠本氏に繊維研の由来を渡してよむことを請ふた。

八月二十九日(金) 朝食后山の方まで散歩した。山の方へ更に西よりの道を二間幅にてつづけること、硝子細工室を別にたてることにつきて岡部氏と小田、大隅両氏と語つた。建物の図等のつけ方を唯①②、③④とすること、建物内部にどここの寄附で何時出来たかといふことを記しておくことなどを議した。けふ本件は金曜会で八木氏や楠本氏に話して諒解をえた。

金曜会に十一時頃についた。高岡氏がやすんだので何か話せといふので八木氏にたのみ同氏が「帝大の事務の特異性」といふことを話した。

九月二日(火) そごうにゆき展覧会を見た。大毎の小林氏や高橋清氏も来た、奇遇だつた。産業科学展をも一度よく見た。今は整頓してよくなつて居た。明日限りといふことで惜しいと思つた。

九月六日(土) 武内義雄氏へ産研、会館及繊維研の寄附由来書の漢訳などを依頼した。

九月七日(日) 朝、楠本氏へ電話しておき、九時半過ぎ芦屋に同氏をとふた。通信病院々長となつた松岡氏がアイサツにきて居た。全氏去りてから産研所長として余は明後年四月迄を最長期としてそれまでのうち適當のときいつでもやめたいといつておいた。楠本氏も学生報国隊などが病軀には重荷にすぎたらばやめるかも知れぬやうに言つた。産研開所式をやめて会館の落成式をやらふといふことになつた。その点につきては更に吉野氏など、打ち合はせることにした。

九月十九日(金) 会後、産研西隣土地三万坪ほどを大学敷地として買上の件につきて伊藤氏、吉野氏、古田氏、楠本氏と協議せり。住宅営団よりそれを使用したしとの議あるを拒否のため也。八木氏と余とも列席した。

九月三十日(火) 午後二時過合成繊維の研究室建築の地鎮祭をやる。東京より協会の奥田氏来、渡辺事務官、営繕課長もきた。産研の人も多く出た。東京より理事長代理をやつた。式后、酒宴、菓子と折詰べんとうが出た。事務官と余は早くかへつた。

十月二十四日(金) 金曜会へ出る。けふは香阪氏の話あり。合成燃料につきて

話されたが、けふは阪大の文化講義に東大文学部の平泉澄氏来るによりて、楠本氏とそれにゆくために一時十分頃退出。医学部講堂にゆきて先哲を仰ぐといふ話を聞いた。橋本左内の話であつた。緒方洪庵の塾に学んだこと、山崎闇斎の流れのことなど面白い話であつたが聴く人は割合に少かつた。

十月二十九日(水) 産研に向ふ。十二時前半時間位につく。けふは浅香山から歩む。営繕課長が居たので昼食を共にし、建物に対する番号、標札及大理石説明版をつける位置をきめるために構内建物を見てまはつた。

十一月十八日(火) 理学部へゆく。渡辺事務官と呉氏のことにつきて話す。大宇よりは呉氏のために何もしてないことが知れた。総長、最近理学部へ出るやうになつたので隣室へ立ちよつたら八木氏が居た。八木氏は大学から呉氏のために召集延期が出してあるとのみ思ひこんで居た。それは文部省からそれを出せといひきたりしは呉氏等召集された後なりしたため事務官は召集されたるものは詮なしと思ひて出さざりしたため也。そこで至急に出すことになつた。

十一月二十一日(金) 産研に向ふ。明日の準備につきて吟味してまはる。楠本会館の標札、生駒でよくつくつてくれた。金剛寮も同様也。会館内部敷物、がしけて立派になつた。研究所の方も皆表札、其他がついてよくなつた。すべて準備がよく出来た。

十一月二十二日(土) 朝まだき雨つよくふる。段々あがりたり。午后日が出た。谷村氏来られた。総長、松田氏とやつて来たので共に大自で楠本会館へゆく。すべき(ママでカ)よく出来て居るのでよろこばれた。大隅氏もついて来、日本間で四人で昼食した。鶏のスキヤキとこまどとれた新米とをたべるのだつた。林タツオ氏も来たが食事はせず。一時近くなつたから一号館へかへる。一時四十五分位になりて大分人が集つたので開会した。余開会の辞、久保氏、林龍雄氏、谷村氏の談をやり、八木氏閉会の辞ですんだ。予定より一時間もおくれたので見学のとき日がくれた。其前休憩のときに構内に出来たサツマ芋を出した。楠本会館へ行き所員一同スキヤキ会をやつた。皆立派になつたのに驚いて居たし、食物にも満足のやうだつた。酒も充分にあつた。新米が少しやわらかくたけて欠点だつた。それから谷村、高橋、西山、小島、四氏と余と二階の小室で冶金研究室の建築を検討して工作場のことにつきて工作課長をつくること、余の提案で阿部氏の予定の寄附金で事務所をつくるのを

やめて工場を冶金の近くにうつし、そこに集め、現在の工場は研究室にする案に殆ど落ちついた。十時半頃帰宅。湯に入りやすむ。産研も昨年よりは一段と進展を示した。

十一月二十七日(木) 学生課に立寄り宮尾氏から海軍予備学生の書類を受取ってきた。五時過アラスカ別室の楠本氏全快祝に出た。同氏同家族と大学の主人々楠本氏知人等にて二十数人だった。少しヤミの御馳走だった。開宴の始に楠本氏アイサツ。デザートコースに入りて余祝辞と乾杯した。神戸の戸山医師も見へて居た。布施氏や看護婦長も来て居た。

十一月二十八日(金) 宮尾氏から学生の軍部技術将校たる手続等の教示をうけた。

十二月三日(水) 理学部の手まへで大隅氏に逢ったので共に総長を病院の室にたづね、産研の寄附金をもっと集めねばならぬことにつきて話し、青氏の研究室の要求を示し、中山悦治にはかるべく乞ふたが、吉野氏にたのめといへり。そこで大隅氏は産研の金をしらべたりしたが、一三万余円であるので余は少くも部長だけは話すべきだと考へた。

十二月四日(木) 理学部に行き、事務官と話し合協協会よりの呉氏の陳情書は大学宛に出すことにきめ、また大学より呉、樋田両氏に対する陳情書の文部省及各部隊長宛のものを見たりした。

十二月八日(月) 朝十一時頃産研へつく。浅香山に大隅氏居て英米と開戦の報を初めて聞いた。今朝五時頃宣戦せられたもの也。

二時半病院の総長室にて評議員会を開き、余も出た。総長より本部を病院にうつすこと、当直のことなどにつきて話があった。

十二月九日(火) 午後一時大学にゆき総長室にゆきしに配属将校が種々要求して居た。二時になりて産研委を開く。

十二月十六日(火) 朝、十一時理学部着、茂呂、仁田両氏と大自にて産研へつく。楠本会館にて評議員会をやり、産研準備委員も皆来りて先づ昼食を食堂でやった。牛肉と鶏肉と白米と卵と豆腐と皆大隅氏の尽力によりてあつめるものなり。一同満足のやうだった。余と田中晋氏とは下で休息した。三時頃評議員会すんだ。

十二月二十二日(月) 産研へゆく。昼食。来年一月六日(火) 初会食、汁粉を出そうと約束した。楠本会館使用内規を示し、小島、谷、両林(ママ)二人の

林氏の意)に検討をたのんだ。

十二月二十六日(金) 卒業期繰上げでけふは阪大の卒業式だったが出す。

昭和十七年

一月七日(水) 朝十一時理学部へつく。病院総長室へゆき新年の挨拶をした。白江氏より産研の官制が出たことを聞いた。まことによろこばしい。総長は産研横の土地の買収につきて意中を余に洩らした。またもう任期一杯はやらぬらしいことを聞いた。

一月十五日(木) 二時理学部へつく。渡辺事務官に逢ふて来学年産研へ三講座ふへらしと聞いた。

一月二十五日(日) 十二時半宅を出で、一時半心齋橋十合に至り、余の塑像を見る。京都から塑像が来て居た。要するに写真によりてつくりたるを余を見直ほす也。三時頃迄かゝる。

一月二十八日(水) 十一時野村ビルに大自で熊田克郎氏を迎へ共に産研へゆき、工学部から上野、香阪両氏に来てもらひ、村上、林(露)、村橋、堤、谷などの諸氏と共に南洋の産業につきて聞き、結局急になすべきことは過剰のゴム、錫、サトウの利用法といふことになった。其他は恒常的に研究すべきであらふ。熊田氏をおくりかへし、余等は尚将来化学の方ではことに何か眼に見へた結果を早く出したきことを述べて皆の関心を請ふた。

二月四日(水) 会計課長来り来年度の予算が追加ヨサンで通り、九ヶ月間のヨサンで三講座が通った由、また産研の講座など全面的に建て直しを文部省でも望んで居るといふことだった。それも考へて見やうといった。三月中旬にやらねばならぬ。

二月九日(月) 朝十時頃宅を出で新大阪ホテルにて災害科学研究所の理事常談会に出た。財部大將会長として西氏をつれてきた。十一時半より開会し報告其他あり。一時頃になりて食事となりたり。此日災害科学研の昭和十七年以後の□后委員さま。二時過散会した。

二月十日(火) 朝、構内散歩、中々寒し。防空兵が駐屯して居て構内を我物顔にふるまふのでこまる。

(*産研にて。)

二月十七日(火) 余は歩みて病院の総長室にゆき、一時過部局長会議の終り方

に一寸出でた。つゞいて産研委員会あり。来年度の協会へ請求の予算、開所式のこと、産研研究項目の改変修正に関する協議をした。最後のものは刷物としてわたし来月までに考慮を乞ふことにした。

二月十八日(木) 九時に梅田へつき、大自にて産研へゆき、九時四十分頃つく。十時より職員をあつめて講堂で昭南陥落祝賀式を行ふ。宣戦詔書をよみ式辞をのべ英才をとなへ、一同徒歩、護国神社までゆきたり。〇時三十分につきたり。二里はあらん。風ふきてさむかった。神社は住吉公園の西数丁住ノ江公園のほとりにありて不便なり。大鳥居、石トウロウ立派なれども社殿は假のものらし。それから大自で中ノ島へ向ひ大学の祝賀式へのぞんだ。

二月二十三日(月) 石炭なくなりて産研暖房やめとなりてさむし。夜泊まった。来年の産研予算などにつきて相談した。

二月二十六日(木) けふ産研の三教授、青、村上、雄山新に任命された旨、新聞に出たので雄山氏、理学部で余に挨拶した。

二月二十七日(金) けふ金曜会で吉野氏、伊忠氏(ママ伊藤忠兵衛氏のこと)に産研理事会のことにつきて話し、之を開くまへに有志理事に一度産研へ来てもらふことにした。

二月二十八日(土) 朝、直に地下で浅香山に出でダットサンで産研へゆく。けふは弁当を持参した。午後一時大阪府下職工学校の電気科教員が来て見学した。会議室で初め余が挨拶し説明し、雄山氏に超音波の話をつたのみ、後に余が案内して限なく所内を見せ、終に楠本会館にて休ませ、そこで散会した。四時過也。

三月四日(水) 十日に会館びらきにとて産研協会の理事監事達、昼産研で会食することになった。そしてそこで来年度の予算につきてあらかじめ諒解を得ることにしたいと思ふ。

三月十日(火) 朝キリがかゝって居たが構内を散歩した。正午近くなつて段(ママ段々カ)晴れて来た。十二時前に已に伊忠氏来られたと知らせて来た。余はラヂオを聞きてから山上へゆく。小倉正恆氏等十数名の理事が来た。二階でやすんでもらひ、食堂で食事した。酒あり、ゼンザイあり。鶏肉あり、野菜あり、純米があつて皆満足された。食堂で伊忠氏アイサツ、楠本氏アイサツ。吉野氏協会の会計、余は産研の職員数などを話した。要用の人は数名去られた。伊忠氏と小倉氏とは余が案内して寄宿舎、い号室、燃料研などか

ら大阪管を見せた。鉛、佐谷、茂呂氏などは長くのこつて飲んだ。鉛氏は尚青氏、茂呂氏、小田、大隅氏などをつれて大浜で飲んだやうだ。余は真直に帰宅した。伊忠氏の会館開きであったが、食糧の奔走は産研でやった。

三月二十三日(月) 朝、九時四十分頃東大、安田講堂北側会議室にゆき、学研の科学研究費の分配の下相談にゆく。大体去年のに従ひて少しく減ずるために按分に減ずることになった。余は新しき学部や研究所に対して考慮すべきを主張し来年よりすることになった。昼頃すむ。

鉛氏へ電話して産研へ少しでも余計に分けてほしいといふた。

三月二十四日(火) 朝九時四十五分頃上野学士院へゆく。余は理学部会にて昨日の主張をなし、来年考慮ありたしといふた。鉛氏特別委員会のところへ来り、一七、一六〇円を工学部の方で産研へ分配し、工とあるのへ継続も新規も適当にわけたといはれた。由て余は二八、〇〇〇円の理学部の分を工となる以外のものへわけけることを即座でやり、継と新とへ各一四、〇〇〇やった。后各委員へ分配を報告した。お互に其分配を報告し多少の変更をした。

三月二十五日(水) 朝九時過東鉄道ホテルに楠本総長をとふて八木氏東京工業大学長になることを聞き驚いた。

けふは快晴だったが、八木氏の件には驚愕した。

三月三十一日(火) 朝、産研より大自にて新大阪ホテルにゆき、市の発明表彰式にのぞんだ。式后、会食、食后発明者と市当局や審査員やらの対談があつた。余も終りに発明者に苦心談の発表を乞ひ、市当局に大阪に科学博物館の造営を乞ふた。

四月六日(月) 産研へゆき、会食した。其后、産研開所式に關して相談を重ね、九月中旬にやることにした、電気クラブを講演会場とし、十八日金曜にやり、十九日土曜に開所式をやることにした。

四月十八日(土) 朝八時前宅を出で大阪駅に八木氏を見送る。電車で仁田、正田氏に一しょになった。八木氏つばめで出立した。大隅氏も来た。仁田氏の車で理学部へゆき、事務官と岡部氏の件で相談し、菊池氏と話した。要するに産研の定員増加まで少くとも岡部氏を理学部へまはされぬといふた。菊池氏の腹では林氏を産研へとり、岡部氏と交換したきなり。余はそこまでは考へて居らぬといふた。産研へ大自でゆき、構内を見廻りなどした。久保氏と話した。二時半大隅氏と工学部へ向ふ途中、市内防空に活動せるをみると

しが、工学部につき、敵の空襲ありしことを知った。東京、名古屋、神戸など。産研のこと、平井氏のこと、厚生省割当のこと、技術院のことなど。五時宅へ帰着した。夜、灯火管制。

四月二十七日(月) 正午総長室にて産研準備委員会あり。鉛、仁田両氏と総長と欠席。それでも昼食后開会した。機械からまだ候補者を出してくれない。予算がつきても総長に異議あり。そのやうに修正しやうと思ふが、問題を他日にのこすことになりて困る。会后、渡辺氏より大隅氏が満州へゆきたしいふ事情を述べらる。之も已むなきものと思ふが、こまったことばかりだ。後任につきて話しあり。之も仕方ならんか。

四月二十八日(火) 朝、十時半頃、理学部へつく。総長来らず。渡辺、茂呂両事務官と相談し、兎も角昨日の決定の通りにして協会へ予算を出すことにした。大隅きたるによりて満州行きの事情を聞いたたりした。山崎といふ其后任に擬せられた男にも逢った。

八月十日(月) 産研へゆき開所式の準備委員会をやった。

八月十七日(月) 朝、理学部へゆき、林、植月両氏と同乗して産研に向ふ。昼食。后、開所式の準備の相談。けふは技術院次長和田氏開所式に来らるるとの報あり、皆よろこぶ。当日は研究成績品を陳列すべきことを余より提議して皆賛成した。

〔この年以後空白〕

昭和十八年

〔この年の日記二月二日まで空白〕

二月三日(水) 朝の新聞に楠本総長親任待遇の辞令が出たが、午后一時頃新聞社の者理学部の余の室に来り総長の辞令が出たといひて写真などを取ったりした。暫くして文部省秘書課長より余に電報が来た。一等一級といふことであった。有光課長へ謝電を打たせた。

楠本氏の室に行きて種々打ち合はせ、挨拶状の文案(余のは昨日つくり、已に初校が来た)楠本氏のをそっくり直した。事務引つぎがすんだといふことにした。明日兩人で挨拶にまはることにきめた。運転手は東野にしたいといふこと、松田氏をそのまま秘書としたいことなど渡辺氏に話した。出京は十一日夜ときめた。評議員会は八日。

二月四日(木) 朝十時電車で着校、総長をまでと来らず。十一時になり余だけ本部事務、学生課長などの人を集めて就任のアイサツをする。

〔欄外〕 本部事務官ニアイサツ。私は助手から初め大学ののみを終始して今日に至った。部長などもやったが常に研究室に両足をつけて居た。それでも職責をつくせたのは事務員の御蔭だ。之からそういふことではいかぬ。大に事務を勉勵するつもりだが、何としても新任だから充分に援助を乞ふ。尚超非常時局下であるから平和的とはことなつた心構へで奮闘する必要がある。其積りで御精勵を願ふ。

終りし頃、楠本氏来る。同氏も挨拶した。木間瀬、高岡、北沢、川合、本莊の諸氏祝に来る。学生課長にも初めて挨拶した。前総長と同車して大阪クラブに行き昼食した。佐多、江崎等々の人々と挨拶した。楠本氏、松田氏と同車して中軍司令部、師団司令部にゆき後宮大將や参謀長やにアイサツし、県庁(ママ府庁のこと)に其さきにゆき知事にアイサツした。それから市役所に市長と三助役、住友本社にも名刺をおき、朝日、毎日、大阪の三新聞社にゆき、其各にて暫く話した。

〔欄外〕 朝日飯島氏談。大原氏の労働研が大阪から東京へうつるときに高野岩三郎氏の骨折りで第一回欧州戦后やすく(二十八万円位)買った本が他日大阪帝大に文科方面をつくるためのとて安井知事に話して買って天王寺近くに蔵せられる。之の書を大学へ早く寄附を受けるべきことをいはる。

終に海軍監督庁にゆきて大学本部にかへった。仁田部長アイサツに来る。退位、就任のアイサツ状を校了した。文部省次官へ謝状を出し、出京予定をも告げ大臣へ取次をたのんだ。

二月五日(金) 朝十時二十分頃着校。住友本社から祝の使者来る。海軍監督官等もきたる。会計課長から其事務の要点を報告させ、書記嘱托を紹介された。楠本氏も登校した。少しおかれて金曜会理事会へ出た。楠本氏を特別会員とすること可決された。食後楠本氏と余とのために祝ひの拍手を受け、楠本氏の次に余も挨拶した。(三代目といふのは甚だ大切であるが凡庸の私で心配だ。その上に超非常事だ、どうか前任者同様御援助を願ふとのべた)ニコノ箱羊を入れた。一時半頃退出して楠本氏と松田氏と大自で商業会議所控訴院、造幣局、砲兵工廠、武長、塩野義、田辺五、伊藤忠、同竹、鴻ノ池、

工業会、佐多、大阪商船、通信局へ行った。上ったのは控訴院、伊忠、工業会、大商船だけで三時半本部へかへった。それから四時工学部へゆき鉛氏に本月下旬に産研を兼任のこと本省の人を招くときに出席のことなどを乞ふて承諾をえた。医学部へ行き、中村院長へ挨拶し、今村微研所長にも同様にし、楠本氏を同所の研究囑託とすることなどにつき相談をうけ賛成した。5時本部へかへり本省の人々招待のことを渡辺氏と打合はした。

二月六日(土)朝十時頃出校、学生課長、営繕課長、庶務課長及図書館より所管事務の要点を聞き取った。

二月八日(月)正午より部局長会議。前総長優遇、適塾使用、学生貯金組合のことなどを議した。一般の新旧総長交代式二十六日やる。配属将校に整備費四〇〇〇円やることにした。会食。二時より評議員会にて新旧総長が挨拶した。楠本氏は大学創立の難局切抜談。余は学内の和、研究の協力などを説いた。総長優遇に名誉教授スイセンを可決。其他は部局長会ギでの決定を報告した。終りて楠本氏と竹尾、岡、久保田、日本生命、東洋紡、大林組に挨拶まはりをし、大自にて帰へる。

二月九日(火)朝十時半本部着、医学博士の学位記を六人の人に渡す。梶原教授だけ陪席した。医学部へゆき佐谷部長にあひ、学風会の主事と大阪学徒報国会との主事につきて同氏に適任者あれば譲りたきらしきを以てその意中を聞いた。当分はやつてもらふことにした。医学部大講堂に行き十一日の式につき打合はせた。それから渡辺事務官とつるやへゆく。同氏は風邪の気味也。財部大將来り、片岡、森、成瀬、江崎、小畑、知事、市長など出た。食事の後災害研常議員会を開き、研究報告あり。事業会計報告あり。之を航空科学研として財団法人とすることにつきて議し、異議なし。三時に松田氏と大自で産研へゆき教授会を開き余アイサツし、后任は二月末に発令のことを告ぐ。特許実施に関する契約(協会との)の確定を告げ所内に於ける同上規定を金研にならつてきめることにした。寄宿舎の規則、林氏案をきめた。同氏に監督をたのむことにした。

二月十日(水)朝九時四十五分大阪駅発、省電にて十時三十五分頃京都駅着、京大の自きて居た。十一時頃大学総長室へつき羽田総長に挨拶す。工、理、医の三学部長来たり書記官も出た。大学のことや戦争のことなどを話す。大学の連絡(ママ絡カ)や総長会議のことをも話した。十二時過昼食を一同と

共にした。此日渡辺事務官肺炎となり入院したので松田書記だけを帯同した。一時半頃辞去して大自を借用して山口玄洞宅、住友邸をたづねた。

二月十一日(木)十時十分前医学部へつき、教授其他の人々に挨拶した。十時挙式、学生課長司式、新総長挙式の旨を宣した。白手袋をはめて勅語をよんだ。無事終った。学生課長閉式后新旧総長交代式を廿六日中島公会堂でやることにつきて予告した。速見学生主事やめて実業界へ入りたしとのことを平沢氏より聞いた。賛成し后任につきて議した。松田氏と楠本氏宅につき同氏懇一等に叙せられたことを質した。東京で挨拶にまはるところにつきて協議して帰宅して昼食した。

二月十二日(金)*文部省より電話あり。五時に迎へにくることだった。用意して待つ。やがてきたるにより松田氏と共に叙勲係の人と文部省の車で大臣官邸にゆく。二階応接間で待つ。六時頃大臣室で橋田氏より辞令を受取る。十分位話して辞去した。尚一人属官のりきたる、ホテルまでおくられた。

(*眞島は二月十二日より十七日まで東京に滞在。)

二月十三日(土)九時過ホテルよりハイヤで文部省へゆく。専門教育局長、大衆教育課長、会計課主任、建築課長、教化、教学、国民教育局、図書館、総務局にも皆アイサツした。十一時になり文部省の自動車を借り宮中に伺候し東御車寄にて任官の御礼記帳した。それから議会にゆく。貴族院の方に文部省の政府委員室があつた。伊藤総務課長が居られた。食堂にて昼食してまた再び往く。文部次官、総務局長にも逢ひアイサツした。文部省では秘書課長不在だったが阿部主任にもあつた。宮中にゆくに門鑑が入用、議院へゆくにも徽章が入用である。皆文部省で借用した。

(眞島は二月十四日より十七日までに総長就任の報告、挨拶のため、雜司ヶ谷墓地に恩師池田菊苗の墓、染井墓地に桜井鏡二の墓、谷中に坪和厚昌の墓、麻布の東久邇宮家、原田積善会、洗足池の船橋子爵邸、高輪の高松宮邸、東大の平賀総長、中野の柴田善三郎宅、新大久保の小倉正恆邸、長岡半太郎邸などを訪問した。)

二月十七日(水)余は二時半頃に川出の自にて技術院へゆく。和田場長、岡田第三部長などに会ひ挨拶した。文部省が科学と技術との研究の密接なる関係を解せず、科学の基礎的研究者を窮屈にとりこみて困るといふやうな話があつた。科学技術省議会は其方面の重要国策の諮問に應ずるものにて技術院が世話して居る技術院の諮問機関といふやうなものではないとのことだ。本年

の補助は近日出す。已往の研究をそれにふりかへてやったことにしてよろしとのこと也。こうして本年内につかふべしといへり。また阪大工の熊谷教授からも超音波の研究の援助申込あり。少し出す由也。

文部大臣官邸にゆき大臣と話して待つ間に時來り大臣より楠本氏の親任官の辞令と勲一等の勲章とを代理として受領した。

二月十八日(木) 九時一分大阪へつく。直に本部へ出る。学生課長と要談。正午佐谷医学部長室へゆき、共に恵済団の教授会へ出る。昼食后余より新任の挨拶をした。学位審査が始まった。少し居て渡辺事務官を見舞ひに本部へかへる。午后四時頃から大自にて松田氏と楠本氏宅へゆき、代理にて受取りきたりし辞令と勲章とを楠本氏へ伝達した。

午前十一時、医学博士の学位を六人の人に渡した。

二月十九日(金) 朝十時前本部にゆく。十時後宮大将来学、空襲の危険急迫につき学徒報国隊大阪支部にて大阪市内の三百ヶ所に貯水池を掘るやうにしたのむとのことであつた。快諾して其手管をとるのことにした。平沢学生課長、宮尾氏など尽力す。

学生課にては大に尽力して府下の専門学校以上に知らせ、明夜中軍司令官の饗応をつるやと定めた。学部長、学生主事などを集めて今日の顛末を話した。

二月二十日(土) 午后一時前、工学部へ行く。教授会に出席して余就任の挨拶をした。それから傍聴したが科学研究費のこと、貯水池掘りのことであつた。鉛氏の室にて談し、四時近くになりつるやに行く。後宮大將の招待にて大阪府下の専門学校校長を集めたる也。会議終りし頃後宮大將来る。5時半頃に開宴、中々御馳走也。大將は和服で来られた。酒はのまれず、小さいが頑強な体格にてシャツを着られず。大將また昨朝のごとき話をされた。諸校も承知し廿二日に連絡会議を開くこととなつた。八時頃辞去した。

二月二十一日(日) けふから兎も角臨時医専で一ヶ所の貯水池を掘ることとなり、江戸堀北通四丁目にて着手す。十時頃行き見て見る。けふは西尾事務長の国民服を借り、東野に巻ゲートルをつけさせた。本部できかへて行く。市長も見へた。大將と参謀とが来た。新聞社のものも来た。学生中々元気でよく掘る。市からも挺身隊とて土方の人々も来た。この人々が指導する訳だ。大將は訓辞を与へ、食事をとるところを見て帰へられた。余と学生課長等も学

生と同じベントウを食べ見る。大なる握飯3ヶであつた。

二月二十四日(水) 朝十時半頃本部へ到着。国民服に着かへて学生課長、南大路氏、呉氏、萩原氏と二台の自に分乗して理学部学生一ヶ所、工学部学生五ヶ所をやって居るところを見廻はる。呉氏は理学部のやれるところに止まられた。他のものは工学部の学生が味原町の内でやって居るところにゆき其のところで握飯と味噌汁との御馳走になり昼食とした。

二月二十六日(金) 朝十時過梅田へつき大自にて本部へゆく。学生多数公会堂へ向ふに会ふ。楠本氏愈来らぬことになつた。併し容態は好いとのこと也。公会堂へゆく。国民儀礼、佐谷氏欲送迎の辞、中村氏前総長告辞代読。次で余、新任挨拶と訓辞とをやる。相当しつかりやつたつもりだつた。それから恵済会館へゆき学内教授諸君の余等を招かれたる昼食に出た。一円五十銭とかが中々御馳走があつた。余アイサツをした。産研と微研との教授をして自己紹介してもらつた。

二月二十七日(土) けふは京大総長羽田氏来ると昨日の知らせあり。十時五分着校し迎へに松田氏を出した。十一時羽田氏来る。庶務課長をつれてきた。貴賓室に迎へ、今村微研所長、田中晋輔氏、学生課長に接待にきてもらった。田中氏は京大出身といふ意味でだつた。学部長は皆東京、庶務会計両課長は病氣のため出られず。大学院問題や二十年頃学年の重なる問題などで関西の大学は一致して行動したいやうだつた。昼食につるやへゆく。併し甚だ疎末「ママ」な昼食だつた。それから緒方洪庵の適塾を見せた。

二月二十八日(日) 早昼食をしたためて登学。国民服にきかへて学生課長と上田氏と勝山通の辺まで行き医学部学生、大高生、外語生の掘り居る現状を視て少し話をする。次に水が出るといふ今里のところが瓦屋町の理学部がほりし難所とを見る。之は石や煉瓦など多く出で大変だつたこと一目で知れた。本部へよりて着かへて帰宅す。

三月一日(月) 鉛氏産研所長たることの発令未だなきやうなれば文部省へ電話せしめた。すぐ産研へ向ふ。皆已に居た、十一時三十分頃也。十一時半頃から講堂で交迭式をやる。国民儀礼、高橋氏欲送迎の挨拶、余の離任の挨拶、鉛氏の新任の挨拶ありて式を了り、楠本会館に行き鳥のスキ焼にて昼食、酒も出た。純白米也。皆大によるこんだ。之がすんでから余の室にかへり大体の引きつぎをしたがまだ細きことは追々に話すことにした。今后も一月に一

たる次第を余より話した。

三月二十四日(水) 此頃臨時医専に於てカンニングの問題あり。二年生総代といふものより右に關する決議文と稱するもの及び一人の父といふものよりも余に手紙をよこして落第所分の緩和を乞へり。学生課長及佐谷主事に移牒した。速見氏辭任につき宮尾氏を学生主事に推せんすることにつき、学生課長より話あり。唯学歴不足也と、十年も動続につき今度はよからんとも思れる屋大阪クラブ。大阪クラブで佐谷氏に塩見を理学部の臨教か研究室の一部を貸すべくたのんだ。

午后五時松田氏と坂口にゆく。下村宏氏を招きあれば也。楠本氏と余とが主人也。来た人は下村、木間瀬、江崎、中根、飯島、伊藤忠兵衛、坂間、北沢(古田代理)となり。阪大に文科をおくことにつき皆意見一致した。即其準備のために会をつくり、活動を始めること、第一に府で買ひ上げる経済関係の本をもらふなどの話あり。又大学の将来の敷地問題、市の商大の国家に移管問題などについても話があった。御馳走は終りに鶏肉が出てゝ大によかった。之は松田氏の尽力のおかげ也。

三月二十六日(金) けふ午后、臨時医専で教授会あり。及落をきめて発表することになった。カンニングのもはその場で再三の注意をうけても尚やうた。至極明白のものゝ由、已定の通り落とした由。

三月三十一日(水) 十一時から産研へゆき、堤氏の日揮との特許実施につきての契約案を議する委員会に出で、新大阪ホテルにての産協の新旧総長交迭、産研所長交迭の祝賀会に出た。産研関係の専任、兼任の教授出で、協会の理事評議員なども出で中々盛會、古田氏挨拶し、楠本氏、余、鉛氏の順に挨拶した。それから一時半頃本部の余の室にて楠本、鉛、余、渡辺、茂呂五氏集り、災研解散、航科研にうつるにつき災研の金がくるまで楠本氏航科研所長で其后余がうけつぎ其機会に会をして関係者をよぶことにした。

四月二日(金) 木間瀬と県庁(ママ府庁のこと)に知事をたづねて大学に人文科学方面を置くについて目下県(ママ府のこと)の所有の経済方面の書籍を大学に寄贈せられ度ことを申出た。少くも他へはやらす、或は保管転換といふことまで三辺知事はいはれた。

四月五日(月) 工学部長交迭発令の旨電報きたる。

〔* 眞島は四月四日より六日まで上京していた。〕

四月八日(木) 宣戰勅語をよむ。年度末賞与三〇〇円くれたので之を以て本部の人々九〇名ほどの総長就職の披露の招待をすることにして、初め宝塚としたが、後北野劇場にかへた。警戒警報で夜くらきおそれがあるため也。

四月九日(金) 前十一時半大阪クラブにて山本五郎、戸川両氏の金曜会入会会見あり。けふは余が会長代理をやった。今村医博の話。会後、江崎、阪田、木間瀬、楠本、伊忠、飯島氏などのこりてもらひ協議して人文科学研究会なるものを阪大内におくことにした。夜伊藤忠氏の楠本、余、鉛、布施、仁田などの招待あり。いせやへ行く。格別の御馳走もなかったが、好意感謝の至なり。

四月十二日(月) 朝九時服部駅に降り、宮田大佐、茂呂氏、平沢氏等と歩みて大阪府の緑地帯といふ施設を始めたところを見る、四十八万坪。雨後にて泥ぬるみ甚だし。配属将校等は甲子園の運動場は狭隘且不適当となる故、こゝを使ひたく其ためこゝに大学の施設をなすため五百坪位の土地が借りたといへり。

飯島氏人文科学研究会の会則案をつくりくれた。

四月十三日(火) 朝九時登校。学生課長に人文科学研究所(ママ会カ) 会則案を示して其趣意書の起案を乞ふた。

四月十四日(水) 文部省にゆき永井局長に総長会ギにつきて聞いた。刷新振興につきては教授会などが強すぎて総長が置物のごときことの改められないかなどいへり。附置研究所についてはそれを京都との関係、大学院との関係等々また財団法人が出来るが差支関係などを一般に律したきやうだった。

四月十九日(月) 夜五時より適塾にて各学部の学生総代と懇談会を催ふし、学生の希望を聞く。

四月二十一日(水) 朝* 文部大臣交迭、農林、内務も交迭の報あり驚いた。九時文部大臣官邸へ行く。東条兼撰文相一寸挨拶に來られたが、次官が代りて會議を主宰した。正午文部省の自にて参内、御陪食仰付られ終生の光榮と感じた。其後別室にてコーヒを賜はり、各大学の状況及主なる研究状況を奏上した。二時半頃までかゝった。陛下は一々御聴取遊された。誠に恐懼の至りだ。それから文相官邸にかへる。文部省の役人達用事にておくれ會議は四時頃から始め、終りて前文相橋田氏によりて官邸内にて支那料理の御馳走になる。文相尺八を吹いた。

〔*眞島はこの前日総長会議のために上京した。〕

四月二十二日(木)朝、文相官邸にて東条さん出席、大学院のことを議した。

昼食を共にして東条さん去られた。午后続行、但し大学院以外の件なり。

四月二十三日(金)午后二時より中央公会堂で楠本氏の退官記念会があった。

余も阪大総長として挨拶した。式だけで茶もださず、楠本氏の写真複写したのを来会者に出した。種々の計画を発表した。楠本氏の家族が沢山列席した。

四月二十六日(月)正午航空科学研究所をつくり、災害科学研究所の後身となすことにつきて楠本氏も出席し、航空研の理事長を余に托した。夜、大阪クラブに学内の教授、事務関係の人々などを楠本氏と余の名でよぶ。大に御馳走があり、真に皆満足したやうだった。

四月二十七日(火)神戸正雄、白川朋吉両氏来り、関西大学に理工学部を創始せんとするによりて其相談相手になる人を出してくれといはる、承諾した。

仁田、岡谷、八代、船久保、鉛、高橋六君をたのんだ。桜の宮の大学艇庫を始めて見た。またボートレースを運動週間の行事としてやって居るのを少時見物した。

四月二十八日(水)各学部で防空演習をやつたのを巡視した(午前中)。夜、楠本氏と余と大阪の知名の人にて大学に關係ふかき方々をよび新大阪ホテルにて饗応した。楠本と余とアイサツ。小倉正恆氏来賓のアイサツをされた。

酒は正式に出したが御馳走は余りよくもなかった。

四月二十九日(木)天長節勸語奉読、医学部大講堂。終りて御眞影を奉還す。余壇上にたち事務員之をおろし余先導して階下にゆく。こゝにて高田保馬博士を迎へ共に講堂に至る。余博士を紹介す。「民族久遠ノ道」といふ講話なり。終りて余感謝し惠濟団にて教官懇談昼食をなす。高田博士も共に食す。

高田氏去りてから新任移動等を報告した。

五月一日(土)大学記念日につき甲子園にて学校報國隊の閱兵分列式をやり余訓辭を与へた。大要は交迭式のと大差なし。右終了后宮田大佐、学生課長等と服部緑地帯を見にゆく。大学運動場として使用のため也。また大学の敷地を附近にさがした。

五月十七日(月)朝九時、閑急上六駅につき熊谷氏其他大学の人々と合し生駒山上の航空無線研究室を大学へ寄贈される式に出た。余訓辭をのべた。山上食堂で御馳走になった。

五月十九日(水)正午航空研評議員会を開く。

午后五時より適塾にて学風会幹事会を開く。会者予定の半数位。教練を福知山にてやりたる關係もありて帰途つかれたるもの多きならん。懇談した。

五月二十日(木)午后四時佐谷氏と共に市庁に市長を訪ひ、千里山の地所に於て大学敷地に一部を得度ことを申出づ。市の住宅計画などを示されたが、十万坪は其内より、他の二十万坪は附近よりといふやうなことを談合した。

五月二十五日(火)午后二時航空研協議会を開き其内部機構と研究問題などについて議す。一部、二部、三部としてやることにした。各部で相談し、来月十五日にそれをまとめることにした。

五月二十八日(金)午后四時、関西大学の理工科大学創設に対する協議会をやるといふので前記相談相手に推薦した六氏を紹介して余は早くかへつた。

五月三十一日(月)本部へ行き仁田氏と共に産業研へゆく。十一時十分前位に已に大臣来た。渡辺がついて居た。研究室を大部分案内し、楠本会館にて昼食(スキヤキ)、一時十五分頃大臣一行をおくり出した。

〔*岡部文相。〕

六月二日(水)朝九時より文部省第二会議室にて総長協議会あり。内地の七帝大総長と東京工大、東京文理大、東京商大、早稲田、慶応の学長総長出席あり。昼べんとう出で、午后四時迄皆熱心に協議した。

六月九日(水)正午からつるやで谷口工業奨励会の評議員会が開かれた。けふの御馳走は相当であった。また松だけ飯をたべたのは珍らしかった。

六月十一日(金)朝七時半宅を出で八時十分頃甲子園、大学運動場へつく。査閱官下川少将已に在り、学生の教練始まる。全く中隊教練をよくやらせる程度のもとなりたるが実科がシツカリとやられて真の兵隊を見るが如くで涙が出た。前浜にてこにししく感じた。八時半に始まり四時頃に終つた。

六月十二日(土)午后二時三十分甲子園、大学運動場に到着した。教練已に終りありしが査閱官所見開陳は三時半に始まり五時近くになった。それから教練教師四名一度にやめ其補充をなすことにつきて下川少将に意見をのべた。

夜宮田大佐来談、教練教師の給与向上につきてなり。

六月十四日(月)午前、事務官、学生課長と協議。午后一時より宮田大佐、今閑大佐、野沢中佐来る。教練教師雇入れに關して給与の件なるが事務手当十

円といふものを認めたことにつき執拗、強情、掛引あり、紳士的と認められず。

夜つるやに小倉金之助氏と清水、正田、寺阪、南雲、諸氏と会食す。小倉氏十年間毎年講義に一度来てくれしが今年にて一先づやめてもらふことになつたので其挨拶のため也。

六月十五日(火) 午后航空研の協議会を開く。新しき研究員も出て二十人位となった。更に陣容を調べ、また研究題目につき議す。鉛氏より二部の方の問題の報告あり。馬場氏より三部の方の報告あり。本月中に尚二部の方のをそへて全部そろへてから研究費の算段をすることにした。

六月二十三日(水) 二時半頃より佐谷、茂呂、平沢、松田氏と大目で服部の東より豊津の方に入り、垂水神社からジャングルに入り西行し高地に上りなどして地形を見、将来の大学敷地として好適なるをたしかめた。服部緑地の方へも行つて見た。

六月二十五日(金) 朝九時に佐多博士銅像応召の式をやる。

六月二十六日(土) 学生課長と共に大学から京都へ行く。仁田氏とも一しょになった。午後一時京大運動場(農大内)につく。日本学徒体育振興会関西支部発会式あり。文部省体育局北沢課長来る。羽田総長支部長として分列行進を阅兵、式辞をよんだ。式后体操の講習が始まった。余は顧問也。体操を少し見て羽田総長の室へゆき紅茶をのんだ。

六月二十八日(月) 朝、宮田大佐をよぶ。金曜日にも土曜日にも来らぬからだ。学生課長をよび今度入れる教練教師の決裁すると同時に事務手当、被服手当などは今後事情の変化あるときは直に取りやめること及び教練課はなきこと、それが置くべきものならば軍の方へ申出て正式にせよといった。

六月二十九日(火) 市より土木課の人来る。佐谷氏をよびて大学敷地につきて話した。

六月三十日(水) 師団へゆき下川少将に逢ふ。宮田大佐の欠点を告げ、四年もつとめられたのだから転任を請ふた。十二時半より市の土木の技師等二人に佐谷、石崎、茂呂氏を加へ大目二台にのりて千里山西北の大学敷地の候補地を見た。三時帰学。

七月一日(木) 岡山医科大学長来る。小竹氏に同大学の内藤事務官を阪大へくれりやうに話してもらふ。

七月二日(金) 下川少将来る。宮田大佐の件につき尚詳細に聞きたしとて也。けふ菊池氏海軍へ入り、阪大教授を兼任したしといふ。戦争中といふ条件にて之を認める。

七月三日(土) 教練教師四名新にきたりしもの挨拶に来た。ハッキリ学生課との関係いひ渡した。

七月九日(金) 青山高樹町の資源科学研究所に柴田氏を訪ひて生物学科のことにつきて要談した。研究所を見せてもらふ。

七月十日(土) 午后長尾研究所を訪ひて見学した。資源科学と似て居て毛利男邸を買つたものといふことだがカビの科学が主力を集中して居て人も多からず経費も十万円位、そこら広くてよろし。

七月十三日(火) 鉛氏食后到着、昼迄種々話をした。午後一時鉛氏と共に技術院へ行く。大東亜省の南側に建つた新しき家だつた。和田次長と第二部長とにあつて阪大の航空科学研の陣容を示し、研究題目と費用とを見せた。五万円十万円位はもらへそうだ(?)。今月中に理事会を開くことに鉛氏と相談した。

七月十四日(水) 朝八時三十分帰阪、直に出学した。午后市の土木の人来り大学の仮敷地における学部の排置(「ママ」をこしらへて来てくれた。

七月十六日(金) 午後二時半頃知事にアイサツにゆき、産研、航研と経済書のことをたのんだ。

七月二十日(火) 三重県阿具(和具カ)へ行く。学生課長と同行す。賢島ホテルにとまる。雨ふり風もあり、天気よろしからず。

七月二十一日(水) 臨海実験所のある島へわたる。未だ学生は殆ど来て居らず、唯一人だけ見えた程度なり。阿具(和具カ)へ行き水産学校にて生徒に訓話をした。宿屋大洋館(?)にて休息、其聲といふ男よく話すやつ也。賢島へかへりてねる。

七月二十二日(木) 再び臨海実験所へ渡り、開所式は之を延期し、土産の赤飯材料など学生課長再来して開所式をやるときまでそのまゝにする。学生課長、上田氏と共に帰阪した。魚類沢山土産にもちかへつた、大目にて。

七月二十九日(木) 航空科学研評議員会。楠本氏記念事業会の協議会。

八月十二日(木) 午後一時、市の企画課長来る。大学敷地に関してなり。

九月十日(金) 后二時半、地所のことにて市長と話す。

十月三日(日) 軍人援護勅語記念日につき甲子園運動場にて勅語奉読。之が終りてから同所にて大学より出征して日支事変後の戦病死者の慰霊祭をやる。四十柱なり。はじめは訓示。後のは祭文を余がよんだ。

十月四日(月) 正午つるやに谷口工業奨励会理事評議員会あった。

十月五日(火) 后三時、戦時科学報国会第一回総会を医学部講堂にて開催した。十月七日(木) 午前十時宣誓式。余訓辞。午后柏(ママ欄ヲ)原神宮へ新入学生とともに参拝す。

十月十八日(月) 関西大学に神戸学長をたづねて同大学の校舎あきたらば借りたしと申込む。白江氏と共にゆく。内藤徹夫大阪大事務官発令。

十月二十三日(土) 后二時懷徳堂、新村氏の話をきく。武内氏も来た。后五時半新大阪ホテルによばれる。内藤事務官岡山から着任。

十一月一日(月) 織維科学研の講演会の閉会辞をのべた。

十一月二日(火) 午后二時から津村別院の解剖体祭に出た。

十一月四日(木) 十一時、土地委員会。会社にまかせる。こちらもさがすことにした。熱帯資源化学研究所講演会、余開会の挨拶。

十一月五日(金) 午后医学部へゆき戦科報国会関係の研究状況を視察した。航空医学関係の設備を初めて見た。午后五時から結核医学関係の会に出た。今村荒男教授のために三十万円の寄附が武田からあった披露のようなものなり。

十一月十日(水) 工学部文化講演には欠席。電気クラブの産研第二回講演会に出で閉会の辞を述べる。国民会館にゆき夕食し、新入生(阪大の)歓迎会に出で、挨拶をした。

十二月二十三日(木) 正午、産研にて昼食し、戦科報研を視察した。岡部、呉、高橋、西山、村橋、二国、小幡氏などのところを視た。皆相当に進み居て頼母しく感じた。

十二月二十四日(金) 午后大自で茂呂、内藤両氏と甲子園の音研を視察した。二ヶ月ほど前に見たときよりは大に整頓し研究も進んだやうに見へた。

十二月二十七日(月) 大阪府知事を午前訪問して安井知事の買ひおきし経済書を天王寺の府の経済研にあるのをそのまゝにせられたきこと、若し之を他へ移す必要あらば大学へ移されたし、保管し目録をつくらむといふ申出をした。

朝新聞記者と会見、会談、常例なり。午后理理学部の戦報科研の研究状況を聞き後、視察した。浅田氏のところ秘密多く最盛也。岡谷、清水、両氏をも見

た。

工学部鑛接研究生(所カ)の上棟式に参列、玉串をさぐく。

昭和十九年

一月六日(木) 朝八時半清水科学学局長、木下科学官来る。貴賓室に迎へ、理、医、工の順にて戦力科学関係の研究の主要なるものを見せる。それから産研へゆきて楠本会館にて昼食、そこを見させて甲子園の音研へ案内す。

一月七日(金) 産研、音研の官制、明日出るといふので新聞記者をよんで之を話し刷物を渡した。

一月十日(月) 午后一時より総長室に八代、望月両氏を招き仁田、高木、内藤氏の京大班長会議出席の報告をもらひ来年度の科学動員の研究費を請求する方法につきて話し合ふ。部会のもを小問題と其研究者とに従て羅列して学研へ出す。文部省へも出すこと(其間の関係?)にした。

一月二十四日(月) 午后一時より楠本氏退官記念奨学会のことにつきて協議会を開く。之よりいよゝゝ実際の運動に入らんとする也。趣意書、発起人などにつきて検討した。吉野、阪田、木間瀬、成瀬氏等、外より来てくれた。

一月二十五日(火) 航研理事会、外より古田、伊「忠」、木間瀬氏きてくれた。追加予算を認めること、本務一名を二名にすることを認めること、次に三部長から研究状況の報告あり。

一月二十八日(金) 三時から振興会、今村教授菊池恭三氏の伝を述べられた。評議会なし。五時半、大新支那料理へゆきて振興会の人を御馳走した。特に手配したので御馳走多く皆満足せられ、大自で帰宅。

二月七日(月) 午后二時より望月教授教室葬あり、工学部講堂でやる。余弔詞をよむ。

二月二十四日(木) 三時に大学へかへり、四時佐谷氏と市庁へ行き中井助役、等と大学の敷地の問題につきて昨年からの依頼してある件の成行を聞く。相当にしらべてくれられあり。感謝してかへる。

二月二十五日(金) 朝、駅に姉崎氏を迎へてともに出学、同氏の講演「聖徳太子ノ大理想と賢聖政治」を聞く。余、開会の始に姉崎氏紹介。

三時から振興会、「農学部、生物学科設置 大学敷地の性」終て五時より大新にて振興委員等余のために宴会、皆種々の物を持ちよられて盛会。余の万才

と阪大の万才ととなへて散会。振興会の中途に新聞社からニウス、決戦態勢強化、マキン、タラワにて六、五〇〇人の将兵軍馬全滅の報あり。

二月二十八日(月) 東京本省へ研究所研究室へ学生を勤勞奉仕せしめ度しと打電した。

三月二日(木) 朝四時頃大学より電話あり、産研やけるといふ。尚二度来た。八時梅田着にて産研へ九時十五分前つく。村橋、村上、林の研究室一棟やけ落ちた。鉛、内藤氏皆居た。内藤氏と古田俊之助氏と吉野孝一氏とを訪ふて願末を報告した。午后中軍防衛司令官飯田中将をたづねた。また長谷川中将とて大阪軍需管理局長をとふたが留守だった。

午後七時三好氏を帯同して上京、火災の始末書、進退伺を持参することにした。

三月三日(金) 文部省にゆき永井局長、有光秘書課長、会計課長において火災のことを報告し、前記書類は永井氏にあづけた。鉛氏はやめ、余がしばらく兼任、二、三カ月して鉛氏囑托の所長といふことがよからうとのこと、余の所分(ママ)は不明。

三月四日(土) 柴田、麻生両氏十一時頃きたる。農学部と生物学科のことにつきて相談し、昼食を共にした。其まへ午前に文部省に菊池次官をたづねた。また小笠原体育局長に学生の勤勞奉仕強化のことにつきて聞く。午后理髪して文相官邸にゆく。文部省へこのことにてそのごとくし、文相にあひ、火災の報告をした。

三月六日(月) 午后学生課長と京大へゆき、羽田総長、京大学生課長代理と逢ひ京都地方部及京大の学生の勤勞につきて様子を聞き、成るべく歩調を一にするやうに話した。

三月七日(火) 日独協会大阪支部の村田氏来り、二十八日午後三時にナチス日本支部長ドクトル、スパーンの講演を大学講堂にてやりたしといふて来た。午後三時より臨時部局長会議を開く。学生の勤勞報仕(ママ)の強化のことにつきて議した。

三月十日(金) 宮田大佐に話して二十八日のシュパーンの講演に工学部学生一、三学年生の出席を確保した。

三月十五日(水) 七時帰着し大自で帰宅し十時出勤。西宮寄宿舎に小火あり。二室焼けたのを聞いた。秘して公表せぬことに官憲の諒解を得たとのこと也。

三月十六日(木) 二時半カラ部局長会ギ。五時半カラ適塾ニユキ、学生主事会ギヲ開ク。食物ノ量多カッタ。

三月十七日(金) 田中敬氏来ル。大学沿革ノコトノ調べニツキテナリ。疎開ニツキテタノンデ見タ。

三月二十三日(木) 十一時半新大阪ホテルにゆき、楠本氏の退官記念事業会へ出た。百万円見当といふことにし、大学敷地に用ふることを主張した。

三月二十八日(火) 正午新大阪ホテルにてナチス日本支部長のスパーン総領事バルザー等と会食。スパーンの話をきく。三時半から医学部講堂でスパーンの話があった。工学部の一、三両学年生を入れた。演題「世界戦局の将来」。

三月二十九日(水) 住友に至り古田氏と楠本氏の記念金につきて議した。古田氏は百万円につき難色あり。由て三十万円とし奨学金とするに定めた。

四五時より適塾にて工学部の電気工学、通信工学の学生の壮行会をやった。

四月一日(土) 鉛氏退官、即日所長囑託。

四月二日(日) 在宅。午後四時過宅を出で適塾に至り、工学部航空学科の学生の壮行会をやる。この学生は三十五人。優秀なものが多い由、明朗性に富んで居るのを認める。

四月十一日(火) 十一時から新聞記者と会見。鉛氏産研、音研所長としてやられたことを書くやうにたのんだ。午後三時より音研を甲子園に見にゆく。大分整頓し二階造作中。音波を反射させぬ塗料の研究などやって居た。研究は余り進んだとも思はれなかった。

四月十二日(水) 午後医学部微研、戦時研究視察。航空医の馬淵氏、久保氏、梶原氏、岡川氏、微研の今村氏、谷口氏などを見た。デング、マラリヤ、結核などの研究が熱心にやられて居るのを見た。

四月十三日(木) 午後工学部の戦時研究を視察した。赤崎、吉永、香坂、藤井、岡田、小田、上野、八濱、板倉、菅田、諸氏につきて説明を聞く。皆熱心であり、実用性があると思つた。

四月十四日(金) 午後二時より部局長会議。二十九日の天長節と五月一日記念日との行事、先月にきめたのを変更したにつきて諒解を求めた。工学部から二十年度新規要求の案が出た。他は振興会に出してもらふことにした。

四月二十四日(月) 第四師団兵務部長教練状況を視察(査閲に非ず)に來た。医学部会議室で受察。それから当日の医学部生の教練を服部にゆきて視察せ

られた由。

四月二十六日(水) 正午、学生課長と大阪クラブへ行き、飯島幡司氏と逢ひて阪大の文科会につきて協議した。

四月二十七日(木) 正午、工学部へゆく。工学部陸海軍依托学生二、三年生軍で引上げるによりて工業倶楽部で壮行会をやる。夕方、再び工学部へゆき、昨年度の勤勞奉仕の成績よかりし工学部学生の慰勞会を会議室でやった。不言実行型の学生と認めた。

四月二十九日(土) 天長節祝賀式を行ふ。後に御眞影を奉還してから木下教授の「南方に使用して」といふフキリッピンの話を聞いた。その後記念館で理学部陸海軍依托学生二、三年生の壮行会をやり昼食を共にした。学業を中止して勤勞に従ふ故也。

五月二日(火) 昼谷口工業奨励会の評議員会へ出る。新大阪ホテルであり、食事した。一〇〇円もらふ。

五月十五日(月) 登学、正午工学部へゆき第二学年生の壮行会をやる。后一時二十分頃理学部へかへり戦科報の研究連絡報告会に出、開会のアイサツをした。

五月十八日(木) 登学、正午よりつるやで航科研理事会開く。外より古田、木間瀬、鑄谷氏代理来る。食事相当よろし。決算と予算と承認うけ、研究状況報告した。

五月二十日(土) 昼工学部へゆき三年生のいよ／＼長期動員出勤について壮行会をやる。この内には已に一度之をやった電、通信、航空などの学生も居たやうだった。

五月二十二日(月) 昼、産研協合理事会。鉛氏と余と参加した。けふは改選であった。鉛と余とは顧問となった。

五月二十三日(火) 楠本氏退官記念会のこと、岡部氏文化勲章祝賀会の件につき協議した。夕食は記念館にて会計検査官と学内部局長と共にした。ビールあり、また洋食も相当だった。けふ、学生課長、人文科学会のこと、平林、平林二氏を歴訪せられた。

五月二十六日(金) 阪田氏に人文科研の案を見てもらふ。

六月一日(木) 五時適塾にゆき、人文科学研究会設立準備委員会に出た。中々御馳走の夕食があった。皆満足したやうだった。本庄(栄)、平林、木間瀬、

飯島四氏きてくれられ、古田、伊藤(忠)、阪田、江崎、四氏は不参だった。協議も和氣藹々裡にすんだ。更に発起人会をやりてから第一回の日取りをきめることにした。九時帰宅。

六月二日(金) 二時より評議員会、二十年來年度予算案を議した。岡部氏祝賀会と人文科学研究会との報告をした。

六月六日(火) 昼大阪クラブにゆき、阪田、木間瀬両氏に農学部を予算に出すについて諒解をもとめ運動をたのんだ。

六月八日(木) 昼食せず。大詔奉戴日の昼は、爾今断食す。十二時四十五分、医学部で宣戦大詔奉読す。仁田氏来りて要談す。由て内藤氏を上京せしめることにした。物性の二講座を第二予備金で出すために。佐谷氏来る有隣塾買取。西宮市商業学校借用。

六月十日(土) 登学前大自にて布施氏と鴻池、野村銀行渡辺、三和銀行岡野を歴訪して楠本氏のための寄附金をたのんだ。

六月十二日(月) 関口鯉吉氏来阪、大学で二時間ほど話し、理学部数学の教授理、工両学部(ママ)と丹頂園で昼食した。

六月十三日(火) 佐谷氏来り、西宮商業のあとへ臨医をうつすこと一寸六ヶしきにより、岸和田へ外語のうつるのをやめて岸和田高女のとへ入りたしとのこと。

六月十四日(水) 午后二時より部局長会ギ。十九年度予算分配と学生課の提出諸事項。余は学生の通年出勤に対する授業の対策を早く各学部で決するのを望んだ。

六月十六日(金) 岡部氏の祝賀会は延期するより他はない。特配も人が多すぎ、且昼間だから許可されない。

今村正二氏より織研へ寄附金があった。

六月十九日(月) 午前十一時から人文科学研究会の発起人委嘱会といふやうなものを開いた。趣意書、会則の検討を乞ふた。出席者皆賛成だった。役員などは会長委嘱となった。

六月二十一日(水) 午後一時から戦時科学報国会の第二回講演会を、医学部病院四階講義室で聞く、八濱氏の報告が最もよかった。

六月二十二日(木) 楠本氏の退官記念会の寄附勧誘に布施教授と共に行く。久保田、保田、日窠、日窠化学、東洋紡、大阪商船、大林組に行った。久保田

と日室とはすぐにきまつた。

六月二十九日(木) 若き配属将校、大尉、中尉等四人挨拶に来る。午后三時より医学部大講堂にて四年学生の仮卒業式のやうなものをやり、余簡単に告辞をした。それから医学部へ行って休み、恵濟団で卒業予定の者の謝恩会に出た。こゝでも話をしたが、教授と学生との間にテーブルスピーチあり、面白かった。八時頃になった。

六月三十日(金) 朝八時二十分に大学にて教練査閲があり、高野中将副官などをつれて来る。理学部の学生の教室にての勤務を見たりした。昼食を共にして后、大自で服部の教練場へゆき、こゝにて学生の種々の軍事教練を見る。学生は午前池田からこゝまで歩みて来た。のちに演習をやるのだが中々よくやったので感心し涙がこぼれた。講評終りは五時だったから、すぐ帰宅した。

七月一日(土) けふも査閲があつたが、朝服部で医専と臨教とがやった。余はそれへは行かず、午后一時半一同が来りてから食事を共にし、それから高野中将の講評を聞く。概ね良好也。

七月三日(月) 新大阪ホテルにゆく。岡部氏も共にゆく。十一時から岡部博士に感謝する会なり。十二時前になりて開かれた。長谷川中将だけ来る。他の陸海の軍人三人はこなかつた。十二時前食卓につきて開会。余アイサツ。古田氏感謝状と記念品「金彫富士と登龍」の目録を呈す。岡部謝辞ありて食事後長谷川中将祝辭にて式を閉づ。文化勲章と記念品とは之をかざりて一般に示した。

七月五日(水) 正午つるやに産研理事会。産研に十万円火災復旧を出すこと、寄附者をつのること。后二時より部局長会ギ、勤勞出勤につきての各部署の対策検討。

七月六日(木) 午后二時頃工学部小風洞室火災にて焼失。直に視察にゆく。過失にてアルコールに火がついたのが原因(ママ)、それにたづさわつた助手二人火傷にて翌日死亡。

七月八日(土) 正午課長會議を総長室にて開く。火災防止委員会をつくる案を考へ出した。

七月十日(月) 朝十時より武内氏の文化講義あり「大東亜文化の特徴」といふ題にて富永仲基の所言により印度文化、幻、支那文化、文、日本文化、絞と

いふ話をされる。絞とは直而不好学、直而失礼などの義ありとぞ。貴賓室にて昼食を共にす。午后二時から人文科学研究会発会式、医学部會議室でやる。本庄栄次郎氏「翻訳学から日本学へ」、武内氏「中井履軒先生の経学」の話あり。終つて同所で一同と会食した。チキンライスと洋食一品、味噌汁。

七月十二日(水) 后二時臨時部局長会ギ、火災防止委員会設立につきて同意を得た。午后四時学士会クラブ理事会に出た。人文科学研究会の出来たことを紹介した。

七月十五日(土) 朝十時半、三木、小谷両氏火災につきてわびに来られた。午后一時、火災防止委員会を開いた。七里、香坂、南小路三氏と会計管轄兩課長に学内全体を査察して火災防止の案を具申せしめる。千谷、伏見、庶務課長に標語案を出さしめる。いづれも八月中に終り、九月にこの委員会を開くことにした。

七月十七日(月) 朝大阪駅西口にて酒井佐明科学官、学生課長と会合、大自にて学生勤勞状況を視察に大阪汽車会社にゆく。工学部二年生十八名あり、皆設計室にて研究題を与へられ製図などをせり。工場を一巡して他の学生の勤勞情況を見た。

七月十九日(水) 朝大阪駅西口にて酒井氏と会し、大自にて鳴尾の川西航空器(ママ機カ)工場へゆく。海岸にてよきところなり。こゝにて昼食をうける。午后尼ヶ崎の住友金属プロペラへゆく。それから川西の宝塚工場へゆく。こゝにて夕食の饗をうく。阪大生は前二社には出勤して居たが、最後の宝塚には居らなかつた。けふは平沢氏は来らず。

七月二十日(木) 兵庫駅へ十時にゆくのが遅刻になった。皆待つて居られた。社自にて川崎重工工業艦船工場へゆく。昼食の饗をうけた。こゝには造船の二年生が工場で鉄板に穴をあけて居た。

七月二十五日(水) 后二時より振興委員会をやり、主に諸種の報告をした。それから三時から毎日の本多氏の戦局の談あり。東条内閣辭職の真相などを聞く。

〔以上で昭和十九年の日記は終り、以後昭和二十三年までの日記は失われている。おそらく総長時の終戦にからんだ事情によるのであろう。〕